

文政八年長月朔

琴嶺興繼識

百九十

○雙生合體

文化十年癸酉の夏の初め。尾張の民銀之右衛門が妻異形の子をうみまといふ。當時同藩の陪臣山田生がある人よかくりし消息いひく

大番澤井圖書組松平傳右衛門知行所

尾州中島郡興村

百姓 銀之右衛門

酉三十一歳

同人妻

酉二十一歳

右きを儀。當酉四月致出産候處。異體のもの出生。男子にて頭二つ。手足四本づゝ有之。軀の二つ御座候。無事致生首候。御勘定所へも申達。此間御見分御座候由。右之趣御座候。實は異體の者にて。全く二子の別れ不申者と見え申候。右之通り承り珍敷事故申上候

山田定之丞

山田定之丞

この山田生は。尾州御家老石河土州の留守居なり。同年八月十一日。愚息興繼が一友人より借抄して見せけるを。雜記中よせめおましかば。とう出てふたゞびこゝは録しつ。この擧胎合體したる疑ひなし。按せる。方書は果實の雙仁なる毒あり。食ふべからむといへり。果子すらかくの如し。まいて人倫鳥獸の雙生合體なるもの。毒惡の氣の致まところ不祥なることあるべきのみ。書紀仁徳紀よ云。飛驒國有一人曰宿儺。其爲人一體有兩面。各相背頂合無頂。この宿儺は凶猛多力にして。朝命よ背さしよし。六十五年の條下見たり。この他雙頭の子をうみしもの。和漢の書史よ見る所。皆是擧兒の合體なるべし。又按する。雙頭兩頭の蛇は多かり。蛇蛇はとも毒あるもの。その毒惡の氣を感じつ。遂は胎を受けたること。これよりても曉り易かり

○一足の鶏

文化十一年の夏の比。飼鳥あまのふもの。鶏の雛の一足なるをもて来て。これ買ひ給ひをやどいひしかば。引きよしてよく見る。げは一足なること。定は一足なるものから。その足らざる左の足は。皮肉の間ありとおぼしく。運動はまたがうて腹の皮うごもちたか。これ冠輪不具はして。真の一足なるものならむ。よりに鳥屋は示していとく。汝惠子の



言を聞かむや。鶴有三足といへり。語に莊子に見えたるなり。蓋彼惠子がこゝろに。よこ鳥の二足なれども。その足を使ふもの。内一亦ひとつあり。故有三足ありといひよき。もしその理をもていひや。三足も尚足らむ。宜くもつて四足となまべし。いかよとなれば。凡手足の運動に。魂其用をなま毎に。心まづ魂に傳へ。魂速に指揮して。その進止を自由す。これよよりて推をとさむ。よの鳥の二足なるも。これをよく使ふもの。内一も亦ふたつなければ。足の用をなしがたし。かくれば四足といふこそよけれ。惠子が言のごとくならば。足を動も魂のみありて。是を指揮する魂なきものなり。もしかくのごとくならば。進退その度を失うて。そのゆくところを知らざること。風は轉べる歌におなじ。これ似たるに。狂人のみ。狂人の進退に神識術りを失ふ故に。その動靜夢寐と異ならむ。かくのごとくなるもの。二足よして三足なり。その魂位を喪ふ故のみ。この餘をべて四足とすべし。われ三足の説をもち排斥すること既久し。汝にこの鳥をもて一足なりといふめれど。これ則四足とす。變をすら一足といふ説に。風俗通に辨じたり。豈一足の鳥あらんや。ゆきねくと追ひたつれば。鳥あき人嘆じていそぐ。なべての鳥の二足なり。只この鳥のみ一足なるよ。君に惠子の語を引きて。三足といひ。四足とす。わが一足といふよし。目よ觀る

まゝをいへるなり。君が四足といふよし。かたちを取らで。理を推すものか。その理の隠れて見えざること。なほこの鳥の一足の皮肉に籠りて出てぬがごとし。細人の理に疎かり。欲するもの。只利のみ。君がいのゆるあし多かるも。われその足を取るよしなれば。魂のみありて。魂なきごとく。還らば妻子に虚走といこれん。足乎足乎。それ又赴くところあり。いとま申し候といひかけて。籠を抱きてまか出まけり。此あき人の。さるものか。野夫よも功者ありといひまし

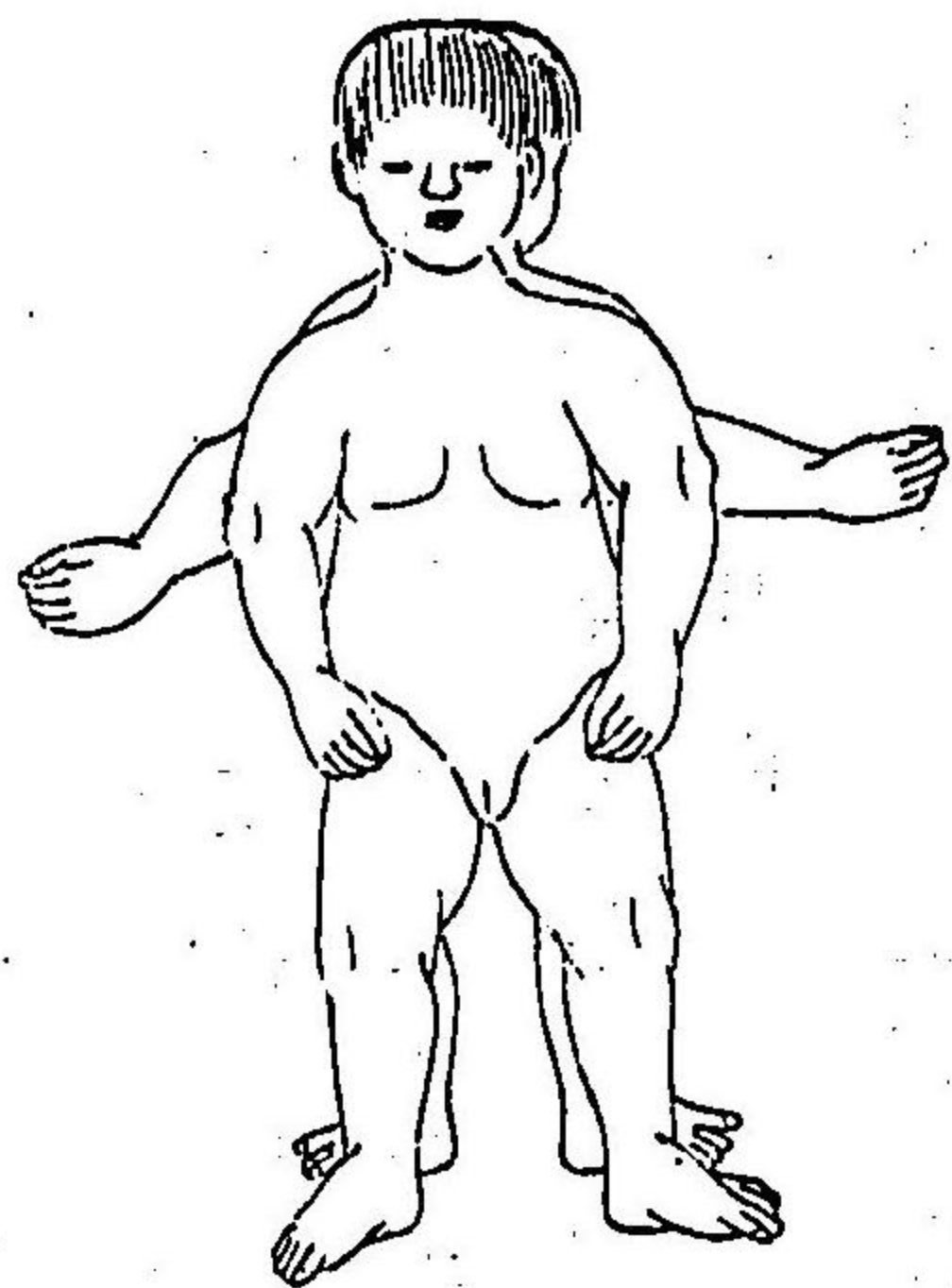
乙酉菊秋朔

愚山人解識

雙生合體追記

文政八年乙酉二月十七日。本所柳島十軒川へ漂流したる異形嬰兒之圖

長一尺許。産毛色濃く頬の邊まで生ひ。臍四つ股の真中よりあり。尤女よて陰門兩方あり



予が伯父なるもの。本所清水橋よりあり。この伯父よ使はる。林右衛門といふ者。近所の事



なれば。當時十軒川へゆきて見たるまゝをうつし來つるなり。この小兒の亡がら。柳島のほとりなる何がし寺に葬りしといへり

著作堂主人の志るされし。雙生合體といさゝかも違ひぬ。それの文化の酉のとし。是の文政酉の年。年のかねれど。一周の同支よあたりて。同物の異形あらわれし。尤奇といふべしよりてこゝに追記す

文寶堂志るす

文政酉九月兎園會

京 角鹿 比豆流

徂徠翁のなるべしを難せしものよ。ひかるべしといふあり。この日が都人富士谷成章がかけるものよ。自序あり。近ごろなよなる高芦屋が梓よせしより。やゝ世よ行ゆることよなりよけり。ざるをいかなる故よ。此本よ成章が名をあらわさむ。かつ其自序をもよぶけり。余終よ世人の知らざらん事をよしみて。其序文をこゝよかゝく。菰生先生のなるべしといふふみかゝれたるがありとい。そやく聞き置きたる故。このころ人よかりてみるよ。是なるべきにすくなく。非なるべきおほし。中よついで甚しきかざりをかきいだして。非なるべしとをつく。おほかたかの先生初より我道よ入りたれど。りければ。只かたこしをうかひて。ひがこゝろをえられたる事どもよどあるべき。たと

し難をべき書のみまよもあらねば。本機どものなかゝしかるべきなりと。ゆつ。かの先生の名よさゝおちたる人の。是をさへよしとおもふべければ。たゞすこしかきつけたるなり

○明和元年秋

成章

文化九壬申年九月八日より。新吉原中の町より水道尻まで菊を植えたり。南求翁の詩歌あり

南山不見東籬下。 西日將曠北里中。 整々斜々門種菊。 三々五々袖翻風。  
五街燈月菊花芬。 黃白交枝曳絳裙。 中有颯繩長袖子。 宛如野鶴在雞群。  
新買金葉一萬根。 滿街佳色溢倡門。 藝家常價爲之貴。 不似柴桑貧士村。  
菊の花の隠返なりと唐人のいひしいたけみよ中の町

庫法門

往昔世よ庫法門俗よ御座門として。あやしき宗旨ありしが。ある人その宗をいとあやしみて。彼法よ入り。委しくその勸むるてたてを試み。いよ直ならぬ教なりければ。官府へ辭し奉りしかば。やがてこれをいましめおきてさせ給へり。其辭へ申し人の。其宗門の



勸むるさまを詳し記し。庫裏法と題せし冊子あり。又二條開略として。かの庫裏法門のことを記したる。其序此二書にて。彼宗のつまびらかにあらるべし。一云。自古邪説惑人多矣。而庫裏法之行也。亡慮百年焉。人間無一人知之。則其險怪秘藏者可知也。此書一出邪徒屏息。冷膽無所施其術。其功不亦偉乎といへり。予このごろ何くれのさざしげくて。いまだ免園の料を得ざりき。こゝに於て嘗て庫裏法を鈔し藏めたりしを。寫しいでつ。徂徠翁の畸人十篇一題して云。遂俾寫一通以爲燃屏照怪之具云と。予が此書よかいても亦いへり。

教主を善兵衛といふ。元米行徳村の者にて。幼少より傳馬町中野屋と申す鼈甲細工致をものゝ方一奉公せしが。身持あしくて。彼家を進ひ出だされ。芝居役者の聲まねを申して。齒磨など商ひたり。其後此宗をひろむ。按よ。二條用師云。善兵衛法名の善生一人あり。外源右衛門として神田に在り。これを神田方といへり。傳米も四代迄の。姓名覺えたれど。其以前の名をしらむと云ふ。尤みな俗形にて。僧の無之よし。勸め方の次第の。江戸田舎とも。右信仰のものどもの内にて。譬へば親族よりも他人よりも此ものを勸め込み可申と心付候へば。事の序は世話人へとなし。世話人承り。其勸めんと申者の行状。又の宗旨その外。氣質まで。とくと承り。誤もあるまじく思ひ候へば。勸めさせ申候へども。至りて大事は不判法無之様。申合候。夫より晝夜不懈附まといひ。何よつて

も。深切に實情を盡し。神道信仰の人の。六根清淨の教など神秘がまじきことをほのめかせ。儒學など聞きこつりしものへ。顔子が所樂の何事ぞなど申す。そのものゝ心を引動し。又人の貴賤を擇まむ。賤者のこと一貴く存候譯の。我々が様なる下賤のものを。御同行よ行者衆よと。歴々の人と同じく致候事。誠し利を貪る爲もなく。外聞をおもふてもなし。只此報恩の。金錢の力に及ばむをなど。人を勸むべき手たてをめぐらし。教訓し。又の佛法者をなれば。人々の佛法信仰し給へども。いまだよき智識に逢ひ給ひぬゆゑ。誠の事を聞き給ひぬ。残り多きことなりなど申し候故。扱の道德勝れし出家など。近付きて。人しれを貴き教などを聽聞致ものとなし。何卒かゝる智識あらば。我も近よりて法談もても。聽聞したきと思ふこゝろ出来。密に承り候へば。始のわざと隠を様もてなし。成程尊き師のわかしませし候。扱引き合せ候様。頼み候へば。何か付き日を延し。爰彼の同行へしる人。致候て。法義物語りし。誠の道を求むるより。志淺くては至りかた。不惜身命の心よて求め候ひ。終の志願成就の時も可有之間。只心よたゆみなく。手足をここび。家ありても専念し。我信を佛菩薩も。誠の智識ありせ給へと。一心一念し給へなど申し聞え候ま。理に至極して。教の通り怠りなく。念を内よ。何卒片時もそぐ



智識の人は違ひ申し度と。せちし頼み無餘儀とさ。京に至りて。信心の同行の招よて。上京に給ふの。或のみちのく。又そのこの田舎などと申し延して。待ち速くおぼまべし。智識は違ひ給ふまでありしが。法談を先聞せ申すべしとて。高弟の辨舌あるものよいとせ候。是を下催促と名付候なり。只求むる心のたゆまぬ様よとのみ。心とげませ。引き立て候。是深き謀なり。近内智識江戸へ渡り給へば。案内申まべしとて。その日はなれば。彼引立の同行伴ひて。同行の内とおぼしく。人あまたつどひたる處よゆさぬ。一間は檀をきて。經机など置きたる。智識のわらざるまうけなりと見ゆ。凡三四十人も集りより。ごぞり居る體。あやしくめぐらかなり。辰の刻むかり。智識采り給ふなど。ひそかよひひあへり。かのまうけの座よつくを見れば。若き男なり。こゝいかなることよかと思ふ。いづれは。此程同行衆の各いひ通して。佛法のことせちし求めおぼる由をうけ給はりて。奇特と思ひ侍り。とくあひ奉るべきを。さるることありて。遅をり侍るよしなどねんごろよ云ふことの體。なめげならせうや。是善兵衛なり。扱ていふやう。佛法の一大事。法衣まといし老僧の申し侍るべきを。在俗の年若き者のまみえ奉れば。あやしく思召べし。是より段々辯のあることなり。先達如上人の御歌とて説く。人の姿を見るな。聞く人

の理り聞きて。身の徳とせよと申を歌をかたり。八宗九宗の大意。神儒の極意などことを申し聞せ候。愚昧のもの。至極の法門と驚き入り候。今の一向宗と。我慢愚癡よして。自力をととす。我傳ふる處。蓮如上人より。江州金が森の道西へ傳へ。嫡々相承して。某に至れり。御文八十一通あり。其内肝要なるをよむべしとて。月の御文を讀む。坊主をいましめ。の御文なれば。さまの詞よ引き合せて。京都様をも職り奉る趣明らかなり。又異かたよて。座を説くもまの如し。もや。まのふ説き勧められて。涙よくれ給ひたる故。けふは涙の暮つるともさ。辰の刻より午の刻の頃まで。法談畢れば。男女残りなく啼きさけぶ。外はかゝるためしあるべしと思へり。夫より扇を持ち。地をうちて。虎と見て石よ立つ。夫もあるものをといふ歌をいひ。命を捨つる程よといひし。いまだ御志のまれば。侍らざればなり。誠は命生きて歸らせ給ふこと難きなり。命なくなり給ふなれば。ゆめくもい給ふべからず。父よ兄弟金銀何よても思ひ給ふことあらばとて。歸り給へりと。強くいひ。善言を立てさせ。是を懺悔といへり。夫より五重の消息をよみ聞かせ。もや法談の止の。御歌の前。ひとり。出て。手を組み合せて。鳩尾の下をきつかりと。おさ。目をふさぎ。扱ひ聞かざる。南無といふたすけ給ひといふ詞なり。是をいく度もく。習へ



給へ。扱その程。如来たより信心治定せしめ給ふ故。あみた佛のおのが身へ宿り給ふなり。是南無と頼む機と。阿彌陀佛の法と機法一體にて。南無あみた佛。全く備り給ふなり。世に南無あみた佛とむかり唱ふる。笑ふべきことなりなど。理りこまやかよひひきかせ。扱廣き座敷。幾人もく手くみ。目をふさきたまけ給へくといひて居る。後を屏風にてかこひ。斯まる程。志の強き唱ふる聲も。力を入れて見ゆるを。世話といふもの。後の方より兩脇へ手を入れ。抱きて藏へつれ行くなり。藏の内は佛檀ありて。前燈明。線香。栴の花を備へたり。右の方善兵衛冬までも單衣すそほそをこき。左は行悦又縮葉屋などいふ宗徒居れり。縁とりたる敷もの。上は抱へ来れば。行者善兵衛向ひ。目を閉き給へといふ。始めて見れば。思ひもかけぬ座に直り居て。ことやうなるものども。あまた居るゆゑ。たれもくも驚く。かくて善兵衛いふ様。尊像あみた佛に向ひて。前のごとく目を閉ぢ。人の詞につま。たまひ給へくといひて唱ふべし。いか程くるしきことありとも。退く心あるべからむと云ひ。教へて。數多の人かたりくたすけ給へくといひて唱ふ。そのこゑは付きて唱ふる。始はひき次第く高く唱ふる程。助音もるもの大勢にて。唱ふるもの一人なれば。苦しさいとんかたなし。又信もるもの。少しもためらむ。こや

く死むや。その心にてたゆまねば。やがて面もかこり。さながら死せるもの如し。女なごの髪面もかこりさげぶさま。信なく見れば。淺ましき事いとんかたなし。かの行者をとらへ。引きあふのけ。耳口をあて。助けたりといふ。その時の聲始めて耳入り。こや往生の業成就去たりと思ふや。こつといふ聲を揚げて啼き出だも。傍なる智識もよくあたりとて悦びあへり。かくて人伴ひて藏を出で。靜なる所は臥さしめ介抱す。扱人々かたりあふ。今までの訪ひ申すべきも。禁しめなれば餘所のみ見侍りしが。こやそのかた様の人となりしとして。ものがたりも。近きあたりの人。酒くみなどせり。すべてこれを終の日と定め。七々の法事一周忌三回より。つねに異なることなし。夫より後の強ひてまみゆることもなく。布施などかくる煩ひもなし。一紙半錢でも人よりとり給ふ智識もあらむなどいへど。大きな偽りにて。參詣の者施物香奠を奉り度由。かの引立どのよいへば。とく厭ひ給ふを。まのあたり奉り給はんいかとなり。去ながら。志のほどせちし思ひ給ひ。我等がまるとくし給へ。佛間の中は小さく穴あり。是へ志のほど落とし入れて。歸り給へ。さらば御手へ届く事もあるべし。よしやそのまむなしくなればとて。この志の佛こそ知り給ふらめ。志あつく人々もあるしせられむくいをせざらん。夫



猫もかたりと思ふ。人情のつねをいひて。衣類。米麥等寄附をもて。寺院に異なることなし。その術中に入りぬる人も。いかで理をわきまへ知らんや。實に淺ましきかなむべき事。此こと止れり

文政乙酉孟冬朔

山崎美成識

このおくら門徒と。はじめ延寶天和のころ盛なりしが。露顯して。その繼に流刑せられたり。多賀潮古が。八丈島へなかせられしも。この故なりとぞ。かくて明和中また盛なりしを。ある人天明中在歌をもて。その名聞えたる町人ありとぞ。憚りてこゝに記さむ訴訟まうし。かむ。やかて罪なりせ給ひてより。絶えよたるを。いしめてたし。近ごろ又富士講といふものあり。寛政中停止せられしが。今もなほあり。さればこの富士講の行者と。御座内よりさらなり。御門々々を過ぐることをゆるされむとぞ

○立石村の立石

下總國葛飾郡立石村立石村の元名主新右衛門が畑の中。むかしより高さ壹尺計の立石一つあり。近き比年月未詳當時のあるは新右衛門相となりて。さまで根入りもあるべくも見えす。この石をければ。耕作に便りよし。掘り出だしのぞきなんとて。掘れども掘れども。思ひの外に根入り深くて。その根を見む。とかくして日も暮れければ。翌又掘るべしとて。その日の止みぬ。翌日ゆきて見れば。掘りしほど石をとるかよ引き入りて。壹尺をかり出で。あり。こそ幸のこととて。そがまゝ埋みて歸りぬ。又その次の日ゆきて見れば。石とものれと抜け出で。地上にあらはるゝこと。元の如し。こゝよおやて。且驚き且あやしみ。その凡ならざるを志りて。やがて祠を石の上にて建て。稻荷としてあかめまつれりといふ。一説に。石のめぐり。只垣のみしてあり。祠を建てたるはあらむとぞ今も石を見んと乞ふ人あれば。見るとなん。右新右衛門の本母寺境内に在る。植木屋半右衛門が縁家にて。詳に聞きしとして。半右衛門かたりき。おもふ。この村にこの石あるをもて。古采村の名よおせけん。猶尋ぬべし

○堀地得城壘

加州侯本郷の上屋敷。梅の御殿といへるが。ありし跡も。此度御守殿の御庭となし給ふより。植木うゑんとて。今茲文政八年乙酉二月廿八日。手の木方覺太夫吉太夫といふもの。土中六尺をかり掘る程に。石垣に掘り當りけり。これより大工棟梁甚藏。吉兵衛。吉藏といふもの。件の石を掘りとする事を請負ふ。同三月二日より。日毎に六十七人。或は百人をかりの人足をもて。七月廿日まで掘りたる。石は皆丸石にて。面少しづつ。つきてあり。



その数凡三萬餘。掘り出だしけり。その石堂つゝ銀貳匁五分づゝの請負賃にて。大小一拘らむ。同屋敷内へとり片つけたりとぞ。何人の城郭なりしや尋ぬべし。解按むるに。このむかし置の城郭より。よりてその圖を下し出だしつ

加州普請奉行

關田十郎左衛門  
松原牛兵衛

大工頭  
中村半次

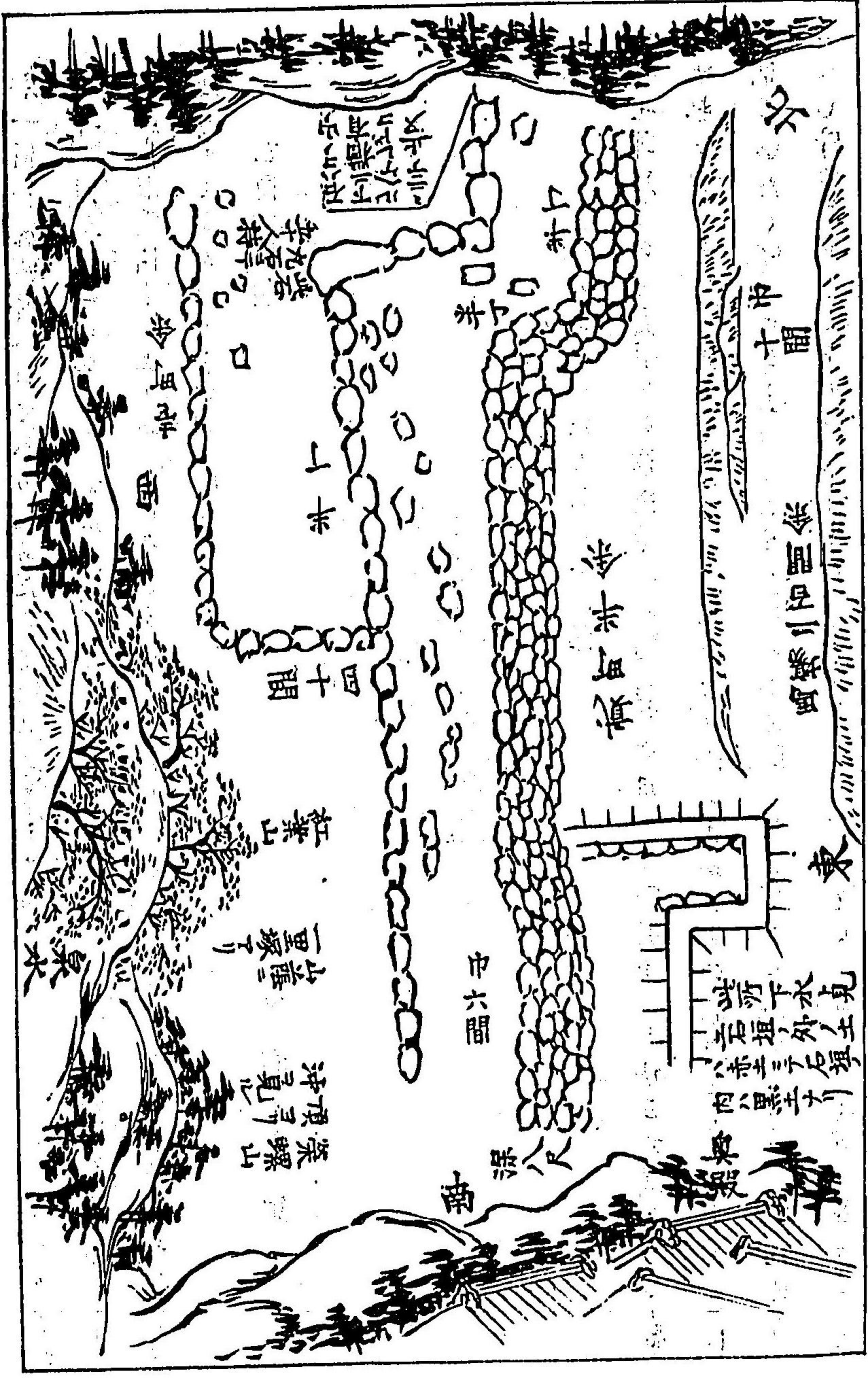
同頭取  
西田清平

手木方  
服部覺太夫  
石出吉太夫

大工頭

湯島天澤寺前  
松吉屋の裏 甚藏

本郷金分町 吉兵衛  
同所 吉藏



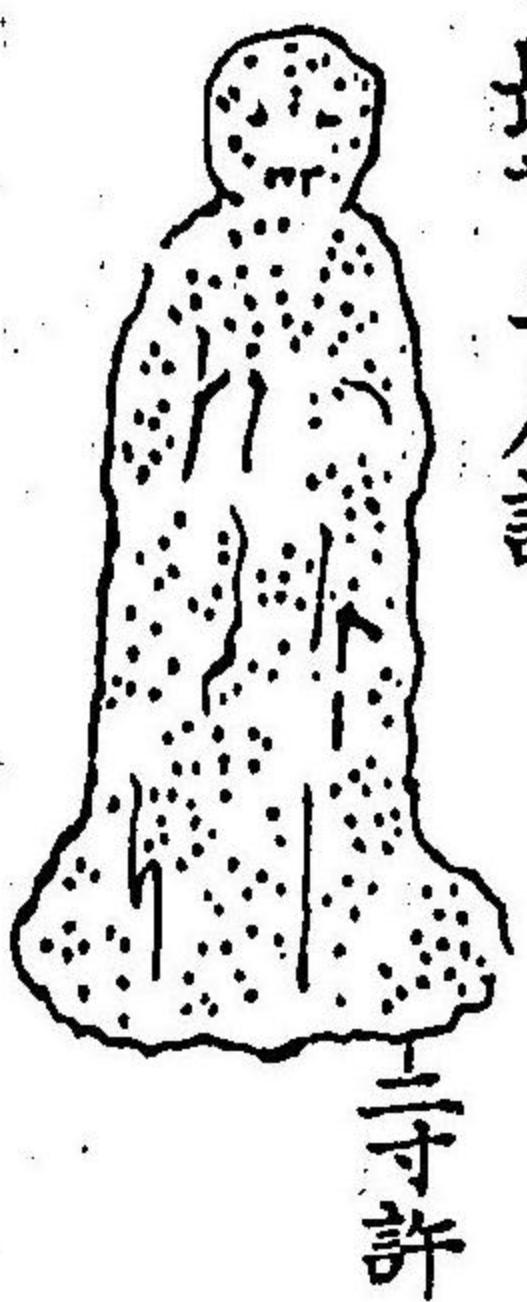
免田小説



右一條の。加州邸へ日々入り込みたる傭夫のこなしなり  
同年二月三日四日のころ。右同藩の家老村井又兵衛。小屋にて玄關前なる柱の下より。  
大工勘右衛門といふもの。石の地蔵を掘り出だせり。同月初午の日。稻荷の社地へ堂を  
建立して納めけりとぞ。其圖左の如し

乙酉初冬朔

海棠庵記



長サ三尺許

二寸許

○人のあまくたりしといふ話

文化七年庚午の七月廿日の夜。淺草南馬道竹門のほとりへ。天上より廿五六歳の男。下帯  
もせむ。赤裸にて降り来りて。たゞすみぬたり。町内のわかきもの。錢湯よりかへるさ。これ  
を見て。いたく驚き立ち去らんとせし程。かの降りたる男。そのまゝそこへ倒れけり。  
かくて件のありさまを町役人等告げ知らせしむ。みないそがしく来て見る。そ

のものゝ死せるがごとし。やがて番屋へ昇り入れて介抱しつゝ。くましをまねぎて見せ  
ける。脈を異なることもあらねど。いたくつかれたりと見ゆる。志むらくやまらぬ  
せおくこそよからぬといへむ。みなうちまもりてをる程。志むしありて件の男のさめ  
て。かろべを掻けしけれむ。人みなかたへようちつどひて。ことのやうを尋ぬる。答へて  
いそぐ。某は京都油小路二條上る町にて。安井御門跡の家来。伊藤内膳が悴。安次郎とい  
ふものなり。先こゝといづくどと思ふ。こゝは江戸にて。淺草といふ處だと答ふる。うち  
驚きて。頻りに涙を流しけり。かくてなほつぶさ尋ぬる。當月十八日の朝四つ時比。嘉  
右衛門といふものと同じく。家僕庄兵衛といふものをぐして。愛宕山へ參詣しける。い  
たく暑き日なりけれむ。まぬを脱きて涼みたり。その時のまるもの。花色深の四つ花菱  
の紋つけたる帷子。黒き緞の羽織大小の刀を帯びたりき。志かる。その時一人の老僧  
わがほとりへいて来て。おもしろきもの見せん。とく来よかしといわれしかば。隨ひゆ  
きぬとおぼえしのみ。其後の事をあらむといふ。いとあやしき事なれば。そのものゝこ  
きたる足袋白本締の足袋を。あたり近き足袋あき人等に見せて。この京の足袋なり哉とたづね  
よ。京都の仕入たがひなしといへり。その足袋。すこしも泥土のつかでありけるも。亦



いぶかしきことなりき。江戸にていかに事あれば。官府へ訴へ奉るが。町法なれば。何と御沙汰あるべきか。その事もかかりがたし。江戸は知音のものなどのありもやするたとづねよし。ある人としての絶えてなし。ともかくも扱のまよ／＼とからひ給われといふより。町役人等談合して。身の皮を拵へつかひし。官府へ訴へまうし。かば。當時御吟味の中。淺草溜へ御預けになりしとぞ。其後の事をしらむ。いかになりけんかし

文政乙酉冬十月朔

文寶堂 志るを

○素馨花

素馨花の速からぬ世。とじめて渡りしとして。いまだ世に稀なるを。この比手に入りたれば。よなくめつるあまり。本草のたくひを書きうつしつ。かうがへ合する。花鏡。花郁李に似て。香艶これより過ぐといへる。誌に合ひたれば。葉桑よりも大なりといふと。綱目および岸芳譜。花四瓣といふあり。疑なきよあらざるなり

秘傳花鏡

素馨花

素馨花。一名那悉若花。俗名玉芙蓉。本高二三尺葉大於桑而微具。蟻喜聚其上。花似郁李。而

香艶過之。秋花之最美者。性畏寒喜肥。并殘茶不結實。自霜降後。即當護其根。未年年便可分

裁黃蠶時打亦可。廣州城西彌望皆種素馨。偽劉時美人葬此。至今花香。甚於他處

本草綱目 茉莉附錄

素馨

時珍曰。素馨亦自西域移來。謂之那悉若花。即百陽雜俎所載野悉密花也。枝幹與柳葉似末利而小。其花細瘦四瓣。有黃白二色。采花壓油。澤頭甚香滑也。

二如亭群芳譜花部

素馨 一名那悉若花。一名野悉密花。来自西域枝幹最細。似茉莉而小。葉纖而綠。花四瓣細

瘦。有黃白二色。須屏架扶起。不然不克自豎。雨中嫵態亦自媚人

○濃州仙女

輪 池

今年雨多。濃州も前月十四日夜水災。長良川殊も溢決いたし。尾州領も堤三千間も溢決申し候。溺死も今日にて百人計も相分候へども。いづれも二百人からの儀と相聞候。總ての八百人とも。千人とも申候。可憐事ともいはん様も無之候

大垣領も。北美濃越前境も。根尾野村山中は仙女住居申候。初は齋藤道三の女子也と申し傳へ候所。さよとあらで。越前の朝倉が臣の妻。懷妊の身にて。朝倉没落の時。山中へのがれ。女子を出産せし。その女子幽穴中にて成長し。今年に二百六十歳計。顔色は四



十歳の人と相見え申候。髪ハシユロの毛の如しと申候。寫真も不速来り可申存候。詳なる事ハ未所々水受よて。誰もく途中の決口を恐れ得往觀不申候也。奇な事ハ候

九月四日

右尾張公儒官泰鼎手簡なり

○鶴の稻

輪池

この稻ハ十數年前。奥州白河領。鶴のくハへ来ておとし。稻穂なり。これをうゑて種とりて。こしもつたなりしを。淺草關氏の園中よりゑてみのりしなり。穂の長さ九寸をかり。粟粒凡ハ十五六七。粒の長さ三分五厘。廣き一分二厘ほどあり。或人のもち米なりといひしほど。やがてねりて試みしが。至りて淡味なり。これハ朝鮮の種なるべしといひあへり

平田篤胤曰。兼よしくて用。堪へざれば。異國の産なる事明かなりといへり。西教寺曰。鶴ハ朝鮮よりわたると聞き及べり。さてかくむかり大粒なる米をみし事ハあらむ。もしハ慈恩傳よみえし大人米なるべきかといへり。按むる。慈恩傳よも。大人米ハ烏豆より大なりとみえたれば。いかにあらん。高田與清曰。駿河國ハ米官といふあり。いよしハ異國より渡りしとて。烏喰豆よりも大なる米を神體とせり。これ大人米なるべしといへり

○供大人米考

其慈寺撰

西域記ハ初曰。摩揭陀國周五千餘里。城少居人。邑多編戶。地沃壤。滋稼穡。有異稻種。其粒大。香味殊越。光色特異。彼俗謂之供大人米

慈恩寺三藏傳三<sub>左</sub>十三。大人米一斤。其米大於烏豆。作飯香鮮。餘米不及。唯摩揭陀國有此秬米。餘處更無。獨供國王及多聞大德。故號供大人米

續高僧傳四<sub>右</sub>廿。曰。大人米一斤。大人米者。秬米也。大如烏豆。飯香百步。惟此國有。王及知法者預焉

新唐書二百廿一<sub>上</sub>十九。曰。摩揭陀國。一曰摩伽陀。本中天竺屬國。環五千里。土沃宜稼穡。有異稻。巨粒。號供大人米

○阿比迦麻村の藝錢

松前領エサシの近郷。アヒノマ村の民。立之助が母ハ。質樸慈善のものなり。人評號してオカツテ婆々と呼びぬ。はじめオカツテ村より嫁し来れるをもつてなり。又立之助が妻の名をよすといひけり。こも又朴素寡欲のものとぞ聞えし。かくて文政六年夏六月のころ。



件のよす。畑を打たんとて。ひとり田野に出でたる。この日畑のめぐりなりける土手の下にて。思ひを古銭を掘り出だしけり。勉めて掘りなすいくばくも出づべかりしを。素より寒慙のものなれば。扱おもふやう。あれこの銭の爲よとて。こゝへ来りつる。あらむ。さるをこの爲よ畑の縁をおろかすべきことかんとて。鉄よかれば取りかゝらね共求むることろのなかりけり。しかれどもとかくして三貫文あまりの古銭を獲たりしかば。それを賣ようちいれて。宿所へもて歸る程よ。ちひさなる蛇のものがしりよ跟て来るあり。はじめの程のみかへりながら追ひやらひたれども。猶あやよく来るを。こゝろともせで。しが門よ及べるころ。蛇の見えをなりぬ。かくてその黄昏よ立之助も。よそよりかへり来よければ。よまのまかぐと告ぐるよ。立之助のよろこびて。その銭をいかよまつると問ふ。かしき桶よいれたるを。蓋してかこよありと答ふ。いでやあれよく見んとて。納戸やうの處よ至るよ。その桶の上よ。ちひさき蛇の蟠りてをり。まやつ憎し。なごてこゝへ入りたるぞとて。させるをもて拂ひ落しつ。終ようち殺して。背門へ棄てけり。其夜立之助の。件の銭をかぞへて果て。よまよいふやう。求めて掘らばいくばくも出づべき銭をらんよ。畑をうたでも取るべき者を。等閑よしつるおろかさよ。翌とつとめてあるべを

せよ。それゆきてあらん限り取りてみまへきぞと罵りたり。かゝりし程よ。立之助の夜のあくるを待ちあびつ。またさ未明より妻を先よ立たして。そのふの處へゆく。掘れども。錢のひとつも出でざりければ。處まどひやまけんとして。いらちてよまを罵れども。正しくこゝなりといふよ。そのふ掘りたる跡もあれむ。さなるべくと思ひかへして。日ぐらし掘りよ掘りたれば。土手の裾のみほり崩しつ。一錢だよも得ることなくて。手を空くしてかへりよけり。さばれさのふよすが獲たる。めでたき古銭のみなれば。エサシ人の傳へ聞きて。價よく買ひぬといふ。村民時よ批評していやく。よまが三貫の古銭を獲たる。その寒慙なりけると。オカツテ婆々がとし米の慈善の陽報よてもあるべし。もしよすこのみ任しかば。錢を猶日々よ出づべきを。立之助が貪婪なる靈蛇さへ撃殺せしかば。出づべき銭の出でをなりぬ。いと惜むべきことなりきと。いぬぬものななかりける。彼の太山よ貨あり。なからよこゝろなきものこれを得ると。老子經よ見えたるをら思ひ出でられて。ことありよこそ聞えたれ。あるひらいつ。むかしアノマのほとりよ。數千貫の錢を埋めたるものありしよし。故老の口碑よ傳へたり。よまが掘出せし。むかし人の埋めたる三千貫文のうちなるべしといひしとぞ。三千貫といふよしと。いかなる故よかあ



らん。をほたづぬべし。かゝるものを掘り出たさば。私よものすることよらあらぬを。邊鄙村落の事をれば。領主へ訴へまうさざりしかば。今茲やうやく其事聞へて。老侯もそのめで知ろしめされしとて。太田九吉といふ使をもて。家嚴よ告げさせ給ひしとき。家嚴のいづく。むかし前九年後三年など聞へたる興のたゝかひより。近世天正のころまでも。落武者どものエサシへも野作地へものがれたるが多かるべし。かゝればそのともがらの埋め置きたる錢よてもありけんかし。恨らく。當時領主へ聞へあげざりしかば。その錢文をだも見るよよしなし。今も猶その錢をもちたるものあらば。見まくほしきものよこそ候へとまりまゝかば。老侯やがてまかゞと松前へ傳へさせ給ひしとぞ。異日もし其錢を老侯へまゐらるものあらむ。家嚴よもまかち賜ふべしと仰せられたりとはかりよして。久しうなれども。今よ何ともうけ給はらぬを。あれどもなしと申して出たさける敷。實よなきよてもあるべし。唐の黄巢が敗れて後。閩越の深山中よ。あまたの錢を埋め置きたる。宋の時よ至りて。樵夫ゆくりなく。その錢を得たり。只多くして。一人の力よかなむを。次の日。又取らんとて。その所よ至るよ。巨蛇ありて錢をみむ。樵夫おそれて逃れかへりしといふ事所見あり。宛委餘篇なりしかと思へど。暗記せむ。抄録したりと覺ゆれば。他

日見出たすべしと。家嚴いへり。興繼按むるよ。蝦夷何よまれ。その寶とるもの。山野よ埋め藏めて。妻子よも知らせむ。そのものよか死する時。子孫といふもの。是を取るよよしなし。星霜を経て。後よゆくりなく。他人の爲よ掘り出たさることありといふ。アビノマの古錢も。そのたぐひなるべし。又蝦夷地なるオコシリよても。今より九ヶ年むかりきまつころ。文化十古錢を掘り出たしといふ奇談あり。この他方コシリよ。異聞も多かれど。おのれ連日持病の手腕操動して。筆を把るよ自在ならむ。かばかりの短篇だもからくして綴りたり。こゝよ漏せることども。後の兎園よあるまべし

文政八年陽月朔

琴嶺瀧澤興繼

乙酉初冬兎園

京 角 鹿 桃 窠

明曆四年の卯本京童六巻の。中川喜雲の序ありて。其作なりと思ひしよ。森許六が厩代滑稽傳の。雛屋立圃の。野々口氏なり。貞徳門人よして。撰集数多あり。畫を能くも。京童といふ名所記自畫なり。立圃發句ありとみえたり。しかれば喜雲作よして。畫と發句の。立圃なるよや。京童の序よ。ぞもくやつかれた。丹波の國馬路といふ村よそたち。牛の角もじさ



へしらむ。無下よかたくなよりなどあり。もとの丹波の人よして。京よ住せしや。立圃門人なりしや。をば考ふべし

乙酉十月兔園會

平安 角鹿桃窠

芭蕉の謡曲。近水樓臺先得月。向陽花木易為春とす。宋人蘇麟が作よして。清録よ出でたりと。孔雀樓筆記よ見ゆ。また三井寺の謡曲。月山かせそしくれは鳩の海といへる。宗祇の發句なるよし。幽速隨筆よ載せたり

○真葛のかりな

真葛の才女なり。江戸の人。藤氏。名を綾子といふ。性歌をよくみ。和文をよくし。瀧本様の手迹さへ拙からむ。父は仙臺の俗醫士。藤源氏。平助。諱は平母の菅原氏とぞ聞えし。先祖は列所黨にて。播磨の野口の城主。長井四郎左衛門より出でたり。長井の族を。如古右京といふ。并に太閤傳天正七。三本合戦の條よみその子孫零落して。攝津の大坂ををり。數世の後。長井大庵に至れり。是則真葛の祖平助の父なり。大庵の醫をもて業としたりしかば。江戸に到りて。紀州公に仕へまつりぬ。をのこ子三人まで有りける。只武藝をのみ學ばせて。子ありとだよも聞えあけざりしかば。ある時公ちかく侍らして。汝が齡既一四十よあまりたらんよ。子ども兩三人ありと聞

きぬ。なごて家督を願ひ申さぬぞと問ひせ給ひしかば。大庵のあとさかり頼づく程よ。そふり落んとせし涙を拭ひて答へ申すやう。いと有りがたままで。忝き御意を蒙り奉りし事。身よあまりて覺え候へども。かね／＼申しあげし如く。先祖は一城のぬして候ひし。たづきの爲よかく長袖ををりたるだよも。くちをしく候ものを。子どもををら親の如く。よし候はん。先祖へのいなくなく思ひ候へば。不肖の某一代のみめし仕りせ給へかし。子どもよよしや涙々の飢に臨み候ふとも。武士よせまほしくこそ候へとまうししかば。公感も思召して。さらば方伎は。大庵一代たるべしと仰せ出だされて。跡をば武士よなされたり。これよより。その長男は。長井四郎右衛門と名のりたり。遊川流のやわらとりよて。師の允可を得たれども。生涯事よあわざりければ。名をしらるよよしもなかりき。次を長井善助といひけり。このさし昔の射手よて。いさ／＼かせよ知られたり。この同胞は。紀州に仕へ奉りぬ。平助は。三男なるをもて。さのみんとて。仙臺侯の醫師。藤某よ贊して。そが養嗣よどしたりける。さばれ亦平助も實父の志をうけ嗣きて。圓頂長袖の身たらん事を。ば差ちしかば。候よ願ひ奉りて。俗體よて有りけれども。衛生の術よのわろかならむ。思を關學よひそめて。發明する所も多かりしほど。その名も粗聞えたりける。かくて平助が子ども



も数人あり。長女の綾子所云真葛是なり。次を工藤太郎といひて。才子なりと聞えし。父は先たちて身まかりぬ。その次の女子。又其次も女子なり。これへもよまおもとめて。後いく程もなく世をこやうしたりとぞ。その次を工藤源四郎元輔とぞいひし。和漢の才子で。詩をよくし。歌をさへよみたる。方伎も亦庸ならむ。惜しく短命にして。子のなかりしかば。とつかよ名跡の遺れりといふ。その次の女子。名を栲といひけり。この越前の姫うへよ。とよ米みやづかへまつりし。姫うへなくなり給ひしかば。比丘尼となりて瑞祥院と法號とり。今はは鐵炮洲の邸内あるべし。又その次も女子なりしを。ある醫師は妻せられ。こもまたこやく身まがりしとぞ。このところから七たり。才も親もとりぐなりける。そが中よ乙のかよのみやけの御まへよみやづかへよとて。まゐれるとき。兄の元輔が後のおこたりをいまして。よくつとめよかし。ふた親のめやみをおもふ。雨露のごとくひとしきをうけたる身の。心々よたがへる。かの七くさてふ花のかれる。似たりとて

おのがじよほふ秋野の七くさも。つゆのめぐみのからざりけり。とよみてとらせたりしを。後よ綾子の傳へ聞きて。よくもいさめたるものかな。さらばその七くさの花よ

たへん。藤むかまのかくのしといへば。太郎よ。その次なる女かほよければ朝がほ。その次のをみなへし。をばなれそこよこそをいさめ。越の御まへなる。教。乙子のなでしてとなるべし。葛むなめつるむかひのものならねども。禁のひろければ。さらからをさしおほふ子の上よしも似つかひしかるべくやと定めたりしより。物よあや子を真葛と唱へ。栲の教と唱へ。祝髪の後ハ萩尼ともあるしたり。かゝるめで度同胞なりし。五人の命長からで。文化のまよ真葛と。教の尼瑞祥院のみぞのこりたりける。そが中よ真葛のいとをさなかりしころより。異なる志ありけり。明和壬辰の大火の比。物のあたひのよにかよのりて。賤しきものいよく窮すると傳へ聞きて。ひとりつらくおもふやう。いかなればあま人の心むかり鬼々しきものよある。あわれ民の父母たる身よしあらば。かく淺ましきことあらせむ。悔しくも女よ生れたることよと歎きたり。これよりの後。これハ必女の本よなるべしとおもひおこしつ。とよかくよ身をつししみ。おのれをうやくしうまることよさらなり。女子のおもてこそ肝要なれとて。愛敬つきたらんやうもしつ。又から文を讀まよくほりせし。父いたく禁めて。女子の博士ぶりたらんところし。草紙のみ見よといわれしかば。源氏物語。伊勢物語などを常よ枕の友としつ



つ。とし十六の時とじて和文といふものを一ひらむかり綴りたりし。父の平助これを村田春海に見せしかば。いたくめでよろこびて。その師なくかくまで綴れるは才女なりといひしとぞ。みづから只いせ物語を師として綴りてける。譽められしことのけやけき恥ぢて。このうち親すら見せざりしかど。猶よくせんとおもひたり。手迹をぢなりける人瀧本様の能書なりければ。その手を學びて。大かたに極めたれども。五十イッパちかきころ右のかひなの痛むやまひおこりしより。物かくこともかきときより劣り。目もかまむこと常になりたれば。細分のさうし得よまむといへり。いづれもく女の本ならんとほりせし。日々のわざよして。何事まれ。人のうへに就きて。心のゆく所を考へ果さばやとおもふ心もつきよけり。かくて第元輔。四書の講釋といふことをせさせて。只一たび聞くことを得たり。これより孔子キョウシ聖人の教。すべてかゝるまぢよこそといさゝかたのもしく思ひたり。佛のをしへもよくしらねど。念われに必利益ありと思ひとりて。とし米觀音と不動を信じ奉りけり。これより先とし十六七なりしころ。仙臺侯の御まへよみやづかへよのせられし折。みやづかへひとり勤なりと思ふこそよけれ。いくたりの同役ありとても。勤むることわれ一人なりとおもはる。うしろ

やすかりけんと思期せしがば。傍輩も憎まれむ。人のおこたりに答むる心もなくして。果して後やまかりしといへり。又をさなかりしころ。奴婢のみぞかごとをするが。ものゝいひざまとけしことよしらるゝをうち見て。あなわろかよも立ちふるまふもの哉。人よあらせじと思ふことを。なかく一人忘れぬといひぬむかりなるいかにぞや。かく浅むかなる心もて。志のびあふものどもの後々まで。いかでか遂げん。懲よまよふものゝ心むかりおろかなるをなかりきとおもふ程。果してその事あらわれて追われしものゝありしとぞ。かくてみやづかへの身のいとまを給りて。宿所よまかりしころ。母のなくなりしかば。猶をさなかりし妹どものうしろ見をもしつ。内をさむることをさへうち任するものゝなかりしより。三をぢをなかむ過ぐる迄。人づまとも得ならでありし。とらからのうちいづれまれ。國勝手なる人の妻とせむ。元輔が爲よよろしかるべしと。父のとしごろいひつれども。あれ仙臺へ赴かんといふものをなかりしを。真鶴を父の仰よもれ侍らじ。ともかくもとからせ給へといひしよ。父よろこびて。あちこちとよづるもとめつ。當時勤番よて。江戸番頭なりし只野伊賀とて。祿千石を領する人の後妻よえよし定まりしかむ。仙臺河内とせくらとて。仙城の二の丸に程ちかき只野氏の屋敷



へ遣嫁せられけり。人あるひここれを諫めしものありし。真葛答へていしく。速く仙臺へよめらせんとほりまると。これ父のことろなり。又速くゆくことをうれしく思ふ。子の心なり。なごふ子の心を心として。親の情願は背くべき。これ三十六歳を一期として死したりと思へむ。うれひもなく。うらみもあらむ。死してすぐせむろくむ。必地獄の可貴を受べく。且親同胞はあふよよしなかるべし。仙臺はもとも厭はしき所なり。且聲だみてむくつけきをよかしづき。詞かたきもなき宿を生涯うちまもりたらんも。地獄の可貴よこますことなからんやといひしとぞ。さてよしありて父平助も身まがり。真葛の良人伊賀も世を去りて。前妻の嫡子只野圖書の世となりたり。この家いとかたくなる家則多くて。傍いたき事のみなれども。繼母の事なれむ。何事も得いなき。いとわろかなるべきかなと思ひつ。そがまよくせずといふことなし。はしめ女の本。よあらんと思ひしを。得果さむ。をのこをらからの世をむとやくせしことのかなしくて。よしやどが身おうななりとも。人よ異なる書をあらして。世よも忘れられ。乃祖の名をもあらなきむやと思ふ。その諸侯の多くの。財主の爲よ苦められながら。要要に費を厭ひ給ひむ。或はつかさ位を望みて。そがなかたちまるものよこかられ。あたら黄金を失ひ給へることな

どをよじめとして。經濟の可否をろうむるとも。數篇全書三卷を獨考と名つけたり。時よ文化十四年冬十二月朔。真葛五十五歳の著述とぞ聞えし。此記興州むなし一卷。職つたひ一卷あり。予がこよよあるしつけたるを。真葛の予が爲よ書きておこし。「昔がたり」といむがたり。「秋七くさ」筆のここびなどいふ草紙の意をうけて。略記しつるものなり。予のちかきころまで。真葛を忘れむ。文政二年己卯の春ささらき下旬。家の内のものどものことしの始のことほきよとして。やから許ゆきたりし日。齡五そぢむかりなる比丘尼の從者ひとりいたるが来て。おとなふ有りけり。とりつぐものなき折なれど。うちもおかれむ。みづから出ていづこより来ませしと問ふ。比丘尼のいそく。あまも牛込神樂坂なる田中長益といふくすしよゆかりあるもの侍り。あるじよ見參せまほしといひつ。よじりかたりたり。予の文化のよじめより。客を謝し。帷を垂れて。常一人と交らず。をちこちの驛客のきよよ来訪せらるるも。舊識の紹介なれば。病よ托してあざりし。ついでとろしとおもへども。せんかたのなきまよ。いなあるじよ出でて。今朝よりあらず。家の内の人どもいづちへかゆきたりけん。おのれに志ばし留守するものなり。何事まれ仰せおかれよ。かへらば傳へまあらせんと。惟光がほよ答へたり。そのとき比丘尼は。ふと



ころより一通の封状と。さかを代とあるしたるこがね一封と。ふくさよ色みたる草紙三  
 まきをとり出で。このみちのくの親しまものより。あるじよと々けまぬらせよとて。お  
 こしたるなり。草紙のをんなの書きたるを。この翁の筆削をたのみ侍るとよ。猶つぶさ  
 よい此志やうそこよこそあらめ。あまのこよひ田中がり止宿し侍れ。翌のかへさよ又  
 とぶらひ侍りてん。その折よ一ふでなりとも。此かへしを給われと傳へ給へかじといふ。  
 予答へて。そのころ得て侍れども。あるじよとし采筆とるまじよ倦みつかれたればと  
 て。いづ方よりよざし給ふも。かゝるものうけ引き侍らす。殊更留守の宿なるよ。あづか  
 りおかば叱られやせん。又折もこそあるべきよ。このもてかへらせ給へかじといなむを。  
 比丘尼の聽かをして。その宣ふことながら。おん身の心ひとつもて。おしかへされんこと  
 よいあらじ。とまれかくまれあづかりてたべ。翌の朝の己のころよまたこそ采めと。期を  
 おして。いとまごひしてまかり出でよけり。予も亦書齋を退きて。まづその状をひらきて  
 見るよ。いひおこしたる趣の。比丘尼のいへるよおなじけれども。ふみの書きさま尊大よ  
 て。馬琴様みちのくの真葛とのみありて。宿所などの定かよしらせむ。いぶかしきこと限  
 りもなければ。ひとりつら／＼おもふやう。此とし采あて人より書を給はりしことのお

れども。かくまで尊大なるいかなる人の妻やらん。仙臺侯の側室よて。御部屋など唱  
 ふるものと。とる／＼とよざしぬる草紙の。何を書きたるやらんとおもへば。やがてまき  
 の稿本なり。その説どものよきとろさのとまれかくまれ。婦人よ多く得がたき見識あ  
 り。只惜むべきこと。まことの道をしらざりける。不學不問の心を師として。ろうじつけ  
 たるものなれば。傍いたきこと多かり。はじめより玉工の手を経て。飽まで磨かれなば。か  
 の連城の價よもおとらぬまでよなりぬべき。その玉をしも玉鉾のみちのく埋みぬる  
 ことよとおもへば。今さらよ捨てがたきことあり。さびさりながら。人づまか母かもし  
 らぬ一老婆の。その宿所だよ定かならぬ。需は應むべくもあらむ。いでまご志を見し  
 らして。その後よともかくもせんまべあれとおもふよなん。その夜かへしをものするよ。  
 おのれいといとそやくより市よかくれて。をんなを<sup>婦</sup>ら<sup>幼</sup>んべのもてあそびものとなるよし  
 の。刀自よもしられたるなるべし。さばれたみよせられしかん作のさうし。それらの  
 まぢよいあらぬを。世の人の目れをしれるものと異なる見どころあるよあらむ。江戸  
 よい名たゝる儒者も。國學者も多かるよ。おのれよいたのみ給はじ。さるころもてせら  
 れなば。などていと尊大なる。およそ人よもの問ふよ。禮節あり。いよしへの人。一字



の師をだも猶おろかよのせざりき。もしまことよ問はんとの。みこころあらば。かくのあらじを。馬琴とさへものせられし。いかよぞや。曲亭も馬琴も。予が戯號なれど。戯作狂詩狂歌などのうへよのみ交る友ならば。しか唱へられん。答むべき事よのあらむ。もし實學正文のうへをもて交る友よ。なほ曲亭とたへられ。馬琴といはる。是われをしらざるものよ似たり。いかでか予がこころよ恥づることなからんや。かくれば刀自もよく予をしり給へる。よあらざるなめり。近ごろ平賀源内が。儒學。蘭學のうへよの鴻漢と號し。戯作よの風采山人と稱し。淨瑠璃本の作あるよの。福内鬼外とあるしけり。又大田章の。儒學よ南畝と稱し。狂詩よ寐惚先生と稱し。狂文狂歌よ四方赤良。四方山人。巴人亭。李花園などもあるし。晩年よの蜀山人と號したれども。戯作淨瑠璃のうへをならで。鴻漢を風采とも。鬼外とも稱するものなく。狂文狂詩狂歌のうへをならで。南畝を寐惚とも。四方とも。巴人亭とも稱するものあらざりき。よしやその著きをのみ呼びなれて。虚實の號を混むるとも。まことよよくその人をしれるもの。こころよ心を用ふべき事歟。刀自のよく予をしらむ。予の素より刀自を知らむ。男女みづから授け受けざるの禮なり。刀自の人の妻歟。母歟。その宿所だもつゝみ給ふよの。され答ふる所をしらむ。こころをもて只こが志

を述べて。おとろかし奉るのみと書きあるしつかいして。めのをんなを呼びて。翌の朝しかくぐの比丘尼来つべし。あるじのけふもそやまよ出てゝあらむ。こころのふのおんかへしなりと告げて。またせよといふよ。こころ得果て。まかこからひつ。このうち廿日むかりを経て。又かの比丘尼より御寮めきたる使をもて。みちのくよりの消息を届け侍ると。おこしたるよ。袴の尼とあるしたる添ふみもありけり。まづ真葛の状をうちひらきて見るよ。こたみといとおしくたりて。ふみの書きさまのねもごころなりし。そが中よ。よろづよありしきをんなのよをだよ得たらねむ。今のやもめよといとおよすけたる身よしあれど。まことよ物いそんよねもごころぶりたらんも。なかくよなめげなるべしと思ひとりしより。い<sup>世</sup>やなしと見られよけん。露むかりもそなたさまをあなどる心あらば。人よと見せぬ筆のすさびを。たのみ奉ることやある。この後とても。心つきなきこと多からんを。教へられんところねがひ侍れ。こなたのうへをあらせよとあるよ。いかでかつゝみ侍るべき。真葛のまかくなり。又さきよこらのが消息をもて。とふらひ侍りし妹よて。まかくとその身のうへをも妹袴尼の名どころをも。つぶさよ書きあるして。別よ昔がたりといふ草紙一まさよ。その先祖の事さへあるしつけてみせられたり。又その消



息よ。こゝよと詞かたきもなく侍れば。只あけくれし物を考へ見かへすることの癖となり。病ともなり侍りたり。さておもふやう。何の爲し生れ出づらん。女一人の心として。世界の人にくるしみを助けまほしく思ふも。なしがたきことと志りながら。只この事を思ふが故よ。日夜やすき心もなくして苦しむぞ無益なる。今やもめよもなりつるよ。なげきをのこさんことでもなし。いさのかよん限り。この歎きやむことあたはじ。なかく生きてくるしまんより。いきをとむむるぞ苦をやむるのみみやかなるべしと思ひて。ひたすら死なん事を願ひ侍りしよ。時秋のなかき曉かたの夢よ。

秋の夜のながきためしを引く鶯のといふ歌の上のおのづからふと聞えたる。多年信に奉る観音おきつゝおめさせ給ふと覺えて。夢ごころよ忝く。此下のつけやうよ。おのが一世のうらとならんよとまでおめさせ給ふとおほえて。いとうれしく心いとあまたしきものから。世々榮えんとこそいひめと思ふ程よ。さめはて侍りき。四の句いと大事ぞと思ひつゝ。やゝほどありてたえぬかつらんとつけ侍りし

秋の夜のなかきためしよひく鶯の。絶えぬかつらんと世々榮えんと。一首のかたちをなしぬれど。いと心もとなくのみ思ひ侍りき。かくたえむ。物をのみ思ひつみし故よより

て。病者となり侍りて。身もよやく心もさえくよのみなり増さりし。不動尊を信じ奉りて後。漸病もろくなり侍りしか共。今右の手のいたみて。筆取ること心のまゝならず。眠くらくして。細書を見る事あたはむ。是の老の病とぞ覺え侍る。このちかきあたりよ。岩不動と申し奉るがたゝせ給ふ。とし毎の五月廿八日。この日たりなるららんべ共のつどひて。御こしをかき荷ひ。御はたあまた持ちて遊ぶが如くもて渡り侍り。我も赤色なる御はたをたてまつりしを。御先よ持ちてあたりしかば。御心よつかせ給へるならめと有りかたく思ひ侍りしよ。よひ過ぎてうすねむたまよ。いざねばやと思ひて。はしぬしをがら。籠よこめたる螢のやすげなくふるまふをまもりつゝ。何心もなくてありしほど

ひかりある身こそくるしき思ひなれといふことの耳よさかれて。めさむることちせし。此御佛の御志めしぞと有りがたくて

世よあらわれん時をまつ間いと。又下をつけそへ侍りし。此二歌をちかくよ。さらば心よこめしことどもを書きしるさばやと思ひ立ちて。いとほげなきこと共をいひ出だせるよぞ侍るなる。書き果て後よ誰よしらばをたのまばやと。又しう思ひ煩ひて侍りし。



ま。かゝる人を見せよと。不動尊の御志めしありし故。そなたさまよことよせ侍りしよこと。そ。おろそかならず考を添へ給はらんなんとねんじ奉りぬ。今の此身はたとへば。小蛇の物よ包まれて。死もやらず。生もせむ。むなしき思ひのこれるよひとし。君雨となり。風となりて。こゝろざしを引きたすけ給はらば。もし天は顯るゝことのありもやせんなどありて。こたみの瀧澤解大人先生様御もとへあや子と書かれたり。この長ふみを見る程よ。おもむき涙はふり落ちて。あわれむこゝろよなりたり。名をいむ事はからくよの制度なるを。國學などのうへよてぬ。ふかくいむよしもあらむ。たとひ今のなべて忌とても。戲號を唱へらるゝよぬ。はるかよましてほいよ稱へり。但大人先生などたゞへられしのみ。當りがたきことなれば。大人先生のわけをしるして。かたくとゞめたりけれども。猶あやよくよ用ひざりけり。こゝろ羹は懲りしものゝ。齋を吹くたぐひならまし。そもくこの真葛の刀自り。おのこたましひあるものから。をさなきよりの痼症の凝り固まりしよもやあらん。さばれ心ざますなほよて。人あろからぬ性ならずぬ。予がいひつることどもを遠よ諾ひて。とほつおやの事をさへしるして見せることやぬせん。かゝる婦人のたのめる事を猶いなまんぬ。さまがよてしかんぐとことうけしつる。そのをりの予がかへしよ。海

なす御こゝろの廣からむ。木の枝よ鼻を走らるゝといひけん如き。予が言ぐさをうべなひ容れて。しかんぐと聞え給はじ。およそこのたみの御せうそこよて。あし曳の山の井のかけさへみゆるこゝちし侍れば。淺くの思ひ侍らねど。不動尊の示現よよりてなど聞え給ふむかりうけられぬ。そのとまれかくもあれ。たのまれ奉りし一條は。よくもこゝろくもまし果て。おん笑よこそ供ふべけれ。しかれどもなりぬひの爲よ。たのまれたる書きものゝ多かれば。ことしのくれまで待たせ給へなど志るし果て。妹の尼の彌ふみを見るよ。みちのくよりのせふそことゞけ奉る。さてもいぬる日ふたゞびまでとぶらひまつりしぬ。人つてよなせせ。みづからゆきてしかんぐと傳へよかしと。みちのくよりのいひおこせたりしよこと。さるをつぎのあしたよもあはせ給はぬよて。しか侍りぬ。かのるまのおきなこと。こゝろよくけれ。かゝれぬ興のたより毎よ。尼がそのせうそこをもてゆきて。とゞけまるらするもあうなし。此のちぬ。いつも使をもてまべきようやなして。御答め給ひそとゑんじたるふみの書きざまなれば。予は何ともそのことのいらへんせで。ふみよきてとれし草のいほりよぬ。なほ春をかくかるゝ君かもとよみてつぬし。かば。後のたよりよかへし萩の尾。「やぶしとぬぬ君が心し春ならん。とりことくさ



もかれむやあらましとありしよ又予がかへし

ことくさを花とし見ればとゞめあへむ。まのふまゝみし春の物かゝとよみてつかひしけり。この卯月朔日のことよぞ有りける。この萩の尾瑞祥院も多く得がたま才女にて。歌をよみ。和文をよくし。としり書きうるのしくて。手をぢのあねの真葛よ似て。瀧本様なるもめでたし。程へて予がことくさの歌をたゝへて

ことの葉のこげき庵の下つゆ也。ふるその萩を花とをすらんとよみてかこしたりき又このとしのふゆ萩の尾よりものをつゝみてかこしゝ服紗を。あやまちて火桶の中へとり落したりけるをこびつゝ。かへしつかひすとして

解

こがれつゝまたしかねたる川舟の。風のふくさよいとゞくるしきといひしよ。萩の尾のかへし。やけふくさといふことをととし書きして

よの人のたくひよあらまめなりや。け。ふ。く。さ。の。戸。よ。か。へ。ま。心。の。と。ありし。この予が達したるかへの服紗をかへせし折の事よなん。是より先よやよひのころ。真葛のせふよ。おんなりのひの爲よ。筆とらせ給ふよ。いとまなきよしはくゞとづらひし奉るを。こゝろなしとやおもわれ侍りてんなどありしよ。かへしをよみてつかひしける

解

幾宿の花さくころもみちのくの。風の便りのいとゞりけり。程經て真葛のかへしあやまたす君よつげなん歸る鴈。霞がくれよことつてしふみ。このその家のおきてあれば。予よせうそこをかくれることを誰々よもあらせむとか。嚮よ聞きたることもあれば。歌の心もあられたり。是より後かねて書きつゝりたりし物を。妹の尾よ浄書せしめ又予が爲よ。綴れるものを。真葛のみづから浄書して。くさくゝかくりて見やられたり。この餘。そのせうそこのはしよも。真淵。春海。宣長。大平などを論ぜしあり。いとけやくおもほゆるを。さのみんとてあるしてつくさむ。かゝりし程よ。このとしもはやまも月よなりしかば。獨考のこと忘れ給はずや。かねての約束をたがへ給ふななどいひおこせること。志むくゝなれども。今さらよそのふみを引きをほさん事易からむ。もしそのあろきを刈りとらば。残らんことの葉をくまかるべし。この此まゝ。ようちおきて。別よさよまよます事あらじと思ひよければ。原本の假名づかへのためへると。真名の寫しあやまされるよ。いさゝか雅黄を施して。別よ獨考論二巻を綴りたり。その言つゆむかりも諳ひかざれる筆をもてせむ。その是非をあけつらふよ。教訓を旨として。高慢の鼻をひしきしよ



ぞ。いとおとなげなきとぞ似たれど。かくいひてかたはめせば。いよ／＼とよしな  
 くて。よぶしといふとも。予が斧をうけたる甲斐のあらざるべし。人よ信をもて来るよ。い  
 かりを怕れて。諫めざらん。交遊の幾もあらむと。かねておもふよよりてなり。かくて  
 廿日むかりよして。そのふみやうやく采りしかば。みちのくへつかひすとき。いつくまで  
 もまじらひし事うけ給はり度思ひ侍れど。をとこをみなの交り。かしらの雪を冬の花  
 と見あやまりつゝ。人もや咎めん。且まがなりはひのいとまなきよ。とし来思ふよしもあ  
 れば。いとふるき友をらうとくになり侍りたり。かゝれば御交りも是を限りとおぼし召さ  
 れよなどいひつかひしよ。次のとしの春。みちのくよりのかへしとて。萩の尻の届けら  
 れたり。くだんの尻。予が論の書きざまを識れりを見て。うらみよけん。怒りの筆よあら  
 ぬれよき。このあねよおとりて。むねせまき婦女子の氣質とあられたり。真鶴のさもあら  
 をして。いといたくよろこびうけたるせうそのまゆめよかよて。おんいとまなき冬の日  
 よ。ふみやどものせめ奉る春のまうけのまごをすらよとよして。かうなか／＼しきこと  
 をつゞりて。をしへ導き給ひせし御ころの程あらぬれて。限りもなき幸よこそ侍れ。な  
 ほながき世よ此めぐみをかへし奉るべしと書かれたり。このとき越前のさくよかみと

て。費物よ絶えてなき小かたの美の紙。十五帖とおなじ國のはさみみちのく名とり川  
 なるうもれ木の葉。もとあらの萩の筆などを贈られしよど。明の春ささらぎの頃。そのよ  
 ろこびを一ふで書きてつかひしよ。かしこのかへしり来よたれど。兼路の橋のなか絶  
 えて。ふみ見ることいなくなりぬ。いとかなしともかなしかりしが。かく速さかりぬる事  
 を。いかよぞやと思ふ人の爲よ。いふもえうなきまごながら。彼同胞の才女なり。齒の  
 れも小動のいとちを過ぐる程なりとも。迷よおもてをあらむて親しみ。としをかきねな  
 ば李の下よ冠を正し。瓜の園よ履をいる。人の疑なからむや。且彼家のぬしよあら  
 さでみよかよすといひる。をしりつゝ。交るべくもあらむ。いと捨てがたき思ありて。捨  
 てむしてかなぬのすくせありての事ならんと。かねてよりおもひしなり。これよりの  
 後。まどろまぬ曉毎よ思ひ出で。そのあけの朝。せうそこさへとり出だしつゝ見る毎よ。な  
 みだの胸よみちしほの。ふかきなげきとなりよたり。このうちみとせむかりの程。萩の  
 尻が御宰をもて。予が家の奇應丸を求めさせつる事。をり／＼ありしとむすめどものい  
 ひつるよて。叔の予が安否のほとをみちのくへ告げんとてのまごかと思ふも。いとほか  
 りなし。いかでこれ真鶴の草子をゑりまきよして。世よあらんさんと思へども。彼の



真葛の文政七年某の月日。身まかりしと云。今於三月尾張の友人田鶴丸が松島見ゆきし折。言つてし。真葛と疎からぬ仙臺の醫師はたつねしよして。そつかよその計開えたるあり丙戌四月追記

獨考の禁忌は觸るゝこと多かり。まいて予が獨考論など。人に見るべきものよあらむ。されば此二書はそらろよな人へ貸しと。興繼をすらいましめたり。又興州をなしたといふものも。はゞかるべきことまじりたれば。えもなきよのなしがたし。只磯づたひの一書のみ。その文の特はすぐれて。且めづらかなる説もあり。禁忌よふるゝことのなれば。是をこそとおもふ物から。いまだ時の至らぬよ。ふみやと謀るいとまなかりき。真葛の齡を憐るよ。予は四つむかりのあねなりければ。今もなほ慈なくば。六そぢあまり三つよやならまし。おもふよぬる文化のはじめつかた尾藤の某氏の後室が。新潟といふ草紙物語を書きつめて。予が筆削を乞ひけるも。かたく辭びて還したり。又ちかきころ。本郷なる田中氏の女の。予が教を受けんと願ふこと。既よ十とせよあまりぬと聞えしも。いなみて終ようけ引かざりき。まいて男子の予がをしへ子たらんと請ひし人々の。かゝるよ違なきを。意見を述べ推し禁めて。いづれもよとめよ應せざりけり。予が人の師とならざりし。柳宗元よ做ふよあらねど。素より思ふよしあればなり。さるを只この真葛の刀自のみ婦女子よといとよげなき。經濟のうへを論ぜし。紫女。清氏よも立ちまさりて。男たましひあるのみならむ。世の人のえぞしらぬ。予をよくしれるも。あやしからむや。され

ば予が陽は祛けて。陰は變つる。このゆゑのみ。かゝる世は稀なる刀自なるを。鬼園社友よしらせんとて。いとひがたきことををら。おしもつゝまでしるまよなん。秋もこやけふのみとくれゆく窓の片あかり。風さへいと身よしみて。火ともす程をまつまよ。かくなん思ひつゞける

から見ごと思ふもわびし真葛葉よ。人もなごりの秋の夕風。予の例のふみやらよせめられて。かゝるものかくいとまなきを。そのいとまなき折よ。いと長々しう書かんこと。まことよかくよあるべけれど。思ふも老のしのみたるなり。瘡を見するよ似て。それながらいとくをかじ。さればきのふ巳のころよはじめて。筆を把りしより。さて書くとかく程よ。夜もはや二更の鐘を聞きつゝ。このしたひらを綴り果よき。もちろ初稿のまよしあれば。さまがよ心もとなきよ。今朝のじゆよりよみかへして。纒よ誤腕を補ふものから。拙きうへよなほ拙きが。巧よしてけふのまよの問よありぬよ。まをらめと。みづからゆるすも嗚呼なるべし

文政八年乙酉冬十月朔

愚山人 解稿

○孫七天笠物語抄



夫今よして古をしらん。書よしくべからむ。又居ながら夷狄の風俗をしるも亦書なり。ふるくの僧玄井の西域記あり。近くの張鵬翻の俄羅斯日記の如き。目其事を視。足その地よ至れり。此等の書實よ徴とするよ足れりといふべし。其他歴史中載する所。外國傳。及諸書よ散見するもの。又むねと其事のみを記し。東西洋考。西域聞見録等の如きも。多くのみを想像の言耳。其中たま〜吾邦の事よ及べるもの。妄誕少からむ。概してしるべし。扱吾邦の舟人時として。颶風よ吹きなたれ。あらぬ國よ到れるものよ歸ることを得て。ものがたる。みな目撃のことながら。一丁字をもわきまへぬ舟人なれば。事物のほとより地名だよ詳よの得おぼえぬものよみ。癡人よ夢を説くの思ひなきことあたむ。其中よ孫七天竺物語といふ冊子あり。本書よ壬午年とあり。寶曆十二年也明和三年。筑前國の松頭重右衛門といふもの。伊勢北といふ船よ廿人のりよて漂流し。數月海上よありて後。こゝかよこの夷人の手よとたり。果に孫七といふ者一人天竺よいたり。高家よ奉公して。九年を経て。本書よ明和七年とあり。廿六日安永三年八月十五日故郷よ歸り來て。話せしを記したるよて。地名人名のいふまでもあらむ。方言さへ詳よ記したれば。此冊子こそ彼地の一斑をも窺ふべきものならんと。一わたりよみかたがへつるよ。考據とすへきことなきよあらむ。こゝをもて。今其天竺のことよ及べるものを。こゝよ抄し。且拙考の一二をも附記すといふ

し。且拙考の一二をも附記すといふ  
 六月明和六年の初のところ。大船をしつらひて。「ソウワロク」地名南天竺の内といふの小港よど入りよける。宿の主が案内して。それ〜二人孫七。幸五郎を。此舟よつれ行きけり。いかなる國よ又もやと覺束なくも乗りよける。のり合よぬ。老若の女八人。男の廿二人なり。水主梶取のもの廿人。都合乗組五十人。いつくよゆくとも夢心地。残りし友のこと問へばさらよ行方もしらざりける。名残をしくも見送り〜。沖津浪よぞ走りける。女を見れば枕も上らむ。涙かよかぬありさまを。いかなる子細もしらざれども。後よ思ひ合をれば。親よはなれ。兄弟よ別れし人を。盗みて上荷よ積み。遠き國よ費りよ行く。その人々の心のうちこそ。思ひやられて悲しけれ。舟よの黒砂糖。黒胡麻なり。かくて日數も廿日あまり過ぎければ。兄と頼みし幸五郎このもの伊勢丸乗組廿人の内。孫七と此もののみあり何とやら煩ひ付き。食事も絶えいろ青ざめ。たのみをくなく見えよける。死がいなりとも納めんと。舟の者よいひければ。海へ捨てよと仕かたする。いと悲しく。とや角いへど。幸ひ泊り港よて。岡近くてんまを寄せ。手を添へてと頼みけれと。つばきはましてかぶりをする故。是非なく〜も獨して。死がいを肩よ岡へ上り。かいよて砂をほり。よきほとよ納めてこそ。船よ乗る。思ひ暮して打ふまよ。船のものの氣遣うて。



又も煩ふかとして。樂よ水よと世話すれば。しほれぬ體してくらしける。行き向ふ船もたま  
 くよて。見馴ぬ帆かけ吹き流し。島も珍しく日本の道のりよて。海上凡貳千里ほど。日數  
 も已よ四十二日。しけよも逢ぬを。船のゆくくみをとよおぼしき川口よ。十里むかりぞ  
 登りける。やがて瓦の軒見れば。碇を入れてよんまをおろし。三十人の男女を乗せ。岡のか  
 たよぞ着よける。舟方の十人むかり。岡よ上りて宿を極め。町々所々よ人を賣りつけしと  
 ぞ聞えける。此所の中天竺黒房の國よて。「カイタニ」といふ國よして。「バンシヤラマア  
 ン」といふ處とかや。いつの頃よりか始まりけん。中華。南京。福州。山東の商人出店して借  
 地なり。家作りのみを瓦葺。客家も多し。町々纏いたばりよして。往來の人工をふむことな  
 し。諸國の唐船出入をあらそひ。からんだ船も入津して。繁昌なるみとなり。後よ山も  
 あり。里々廣く打ち續きて。前よ大河あり。渡り二里ありて。甚深し。大船岸ちかくつな  
 ぎならべて。水の流れなほ靜よ見え。關戸小倉の海の如し。川上の南天竺龍砂の下まで續  
 きて。その流幾千里といふことをしらむとかや。此處の町家千四五百軒。みな商家なり。人  
 の形きれいよして。衣類よも目をさましける。孫七三千世界を廻り來て。初めて人の風俗  
 よ逢ひ。何れよ我も賣り付くべし。こよようれかし買へかしと。心よぞ思ひける。よきよつ

けても幸五郎たま〜道まで伴ひ來て。爰よも届かぬ。打ち捨てし。残り多きこそ悲し  
 けれ。大方人も片付けるよや。あれも來れとつれて行く。此町よても大家と見えし萬店よ  
 ぞ入りよける。我月代もなて付くむかり。まだらかみよ色黒く。目の内丸く見出しければ。  
 家内の上下打ちつどひ。日本人のめづらしくや。仕事を止めてながめ居る。我も又口ゆか  
 め。肩をしぼめて見せければ。常よの勝手よ出でぬ嫁娘。笑ひよ傾く。髪の飾り觀世音の様  
 よ見えける。かくて主とおぼしき人。船のものと物語し。臺所よて食事をさせ。夫より船子  
 の歸りける。家内の人數廿四人。主人の名は「ダイゴンクワン」妻の名は「キントン」とい  
 へり。年十八。この春此家へ嫁よ來りしとき。老母あり。主人の弟あり。「カンヘンクワ  
 ン」といふ。手代頭「ハウテキ」「ヒヤウコウ」のふたり。家内よろづの裁判して。呉服を商  
 ふ大店なり。外よ下人十五人。その内「アルセン」「モウセイ」「カウセン」の三人は。黒坊  
 よて朝夕の食事を別所よてつかみ喰ふ。下女「ハヒアラハン」「ウキン」「コキン」の三人  
 は。是も速國黒坊の娘なり。我名を日本とよぶ。初のはどの物毎よ仕形計よて。致させける  
 が。盆前なればいそかしく。言葉習へと手を取らへ。物をとらへて「コンサミヤア」され  
 ばなよと云ふものぞとなり。「チナウサミヤア」なよをいたすとなり。先二事を教へてよ



り。其後の言葉をおぼえ。天生口状おぼえけり。主人も家内も慈悲ふかくして。常<sub>ニ</sub>勘辨を加へて。召仕<sub>ハ</sub>なる。我が命あらん限り。心もとけて仕へける。光陰夢と移り行き。七月も朔日<sub>ニ</sub>なり。此所<sub>ハ</sub>今夕より。門口<sub>ニ</sub>燈籠を燈し。靈具を備へ。猪羊鶏の肉を備へ。聖靈を祭ると見えよける。十五日の夕<sub>ニ</sub>。又々寺々の御堂の庭<sub>ニ</sub>。大なるせがき棚を掛置<sub>キ</sub>。町々これ<sub>ハ</sub>より五升。思ひ<sub>ハ</sub>く分限相應<sub>ニ</sub>飯を炊き。大鉢<sub>ニ</sub>高く盛り。五色の紙<sub>ニ</sub>その家の佛の名を書き付け。竹の串<sub>ニ</sub>挟み。飯の上<sub>ニ</sub>是をさし。く<sub>ニ</sub>し色々の肉を備へ。焼酒を器<sub>ニ</sub>入れ。施我鬼棚<sub>ニ</sub>備へける。寺より大ぜい僧出て讀經あり。經終りて後。若者子供等大ぜい集りて。備へし靈具を取り争ふ。持ちかへりて。家々の羊や犬<sub>ニ</sub>喰<sub>ハ</sub>せける。扱十五日の夕<sub>ニ</sub>より。一町々借合<sub>ニ</sub>して。大筏を持へて。前なる大河<sub>ニ</sub>浮べて。これ<sub>ハ</sub>より大蠟をく<sub>ニ</sub>くらくともなく火をともし。靈具共<sub>ニ</sub>持ち出だし。件の筏<sub>ニ</sub>ならべける。火捕ふとつなぎし筏を切り放せば。水<sub>ニ</sub>随ひながれ行く。家々より佛の數蜜蠟<sub>ニ</sub>て。一斤かけ二斤かけも有りければ。風<sub>ニ</sub>も雨<sub>ニ</sub>も消えやらで。水上よりも流れ来る。その火の光り幾千萬。こるかの下まで見え渡るありさま。目をかどろかすむかりなり。扱さま<sub>ハ</sub>く<sub>ニ</sub>の踊あり。引物あり。賑やかなりし盆會なり。勿論廟所の十三日の夕より。廿日の夕まで。燈籠をかけ。

花を生うゑ。香をつぎ。毎夜の參請。主人<sub>ニ</sub>も父<sub>ノ</sub>親なく。餘人も親の墓あれば。みな如此すとぞ。同年の八月末<sub>ニ</sub>。近き町<sub>ニ</sub>主人の一族あり。男死し。我も家内の働<sub>ニ</sub>として遣しける。その葬禮を見る<sub>ニ</sub>。棺<sub>ハ</sub>長さ一間。厚さ二寸の板を以て持へ。徑<sub>ハ</sub>二尺五寸の箱なり。内<sub>ニ</sub>の金箔を敷き。ふとんを敷き枕を置きて。死人<sub>ノ</sub>の四重の衣装をかさねてさせ。あをのけ<sub>ニ</sub>麻せ。巾着。煙草の道具等を入れ。又そのうへ<sub>ニ</sub>。金箔を餘分<sub>ニ</sub>置きて。蓋を釘<sub>ニ</sub>て打ち付け。深絹<sub>ニ</sub>て上をおほひ。墓所<sub>ニ</sub>かき送るなり。扱地を少しほりて。棺を納め。廻り白土<sub>ニ</sub>てまつくいし。上の石を板瓦<sub>ニ</sub>て葺き。頭を西<sub>ニ</sub>埋みおき。石塔を立て銘をほり。香花を備へて。是をまつる。塀を見る<sub>ニ</sub>似たり。官ある人の墓らむ。此町の人みな甲乙ありて。如此家<sub>ノ</sub>の佛具をかざり。魚肉鶏肉を備へて。妻子<sub>ハ</sub>是を食<sub>ハ</sub>む。勿論その妻子<sub>ハ</sub>。百日迄佛間<sub>ニ</sub>こもり。白き絹をかつぎて。香具金箔をも焼きて。生前のありさまを語りなげくこと。甚痛ましきありさまなり。只金箔を餘分<sub>ニ</sub>焼くを。未來の爲といへり。子として<sub>ハ</sub>百日墓<sub>ニ</sub>參り。香花を備ふ。三年<sub>ハ</sub>喪をつ<sub>ニ</sub>し。色の衣装をさせむ。音曲の席<sub>ニ</sub>至らむ。これを喪の中の禮とまといへり

美成云。喪中<sub>ニ</sub>金箔を多くたくが如き。蓋夷秋の俗なり。まかれども。登遐せむ。且三



年の喪あり。親の喪の慎み追慕の厚き。實に鄒魯の儒士と何ぞ別たん。誰か諸夏のなき  
いゝまかむとやいゝまこ

解云。金箔  
とたくい箔  
錢冥衣を焼  
く類あり。  
今も長崎よ  
て來舶入。  
神佛及び先  
重を祭る  
。金箔銀  
箔をたした  
る寸指を。  
金銀細工と  
あつてた  
くあり。こ  
れらの祭奠  
禮記に見え  
たり。その  
金箔をたく  
い。被土は  
金多き故あ  
るべし。

主人も父なく母むかりなり。常は佛間は靈具を備ふる。魚肉焼酒を備へける。日三  
度佛前に向ひて。親は孝行なることかたる。言葉なし。外の家々も是と同じとぞ聞えし。  
こゝも暖國にて。常は五六月の氣候なり。單物にて冬もよし。もこや九月に至りぬれど。氣  
候のかゝる事もおぼえむ。九日の節句はなし。叔野は出てい。十月の末に至り。二番稻あ  
り。都て山をひらきて。畑稻多く。飯は油なく。三年米を喰ふに似たり。米は一升錢一文。  
獅子の繪あり。是よりも下直なる年多し。三文錢の壹文錢より少し大きし。銀目百目の金  
錢あり。阿茶陀が走り舟の繪あり。拾文錢の馬乗りあり。六十文錢の虎を畫く。銀は七十文  
よかへ。金錢のみを阿茶陀が持ち來る錢なり。

美成云。此にいふ所の錢。文を見ざれば。何れの國の錢といふことを志るべからむ。まか  
れども。西洋の錢の種類甚多し。獅子。走り船。騎馬等くさくあるが中。獅子尤多し  
虎といへるも恐らくは獅子なるべし。猶詳に西洋錢譜を併せ考ふべし

又此國は「カハヤ」といふ鳥あり。是燕に似て少し大ぶりなり。この鳥の巢。川筋の岩窟の  
内は多し。その巢は椽の腰懸に似て。甚白し。くがき内は黒き羽などの付きたるもあり。  
此巢いかなる藥やらん。おらしたより入銀して。懸目壹斤に付。銀八十匁に代ふ。是より  
國主よりみたり取ること禁ぜらる。常は改の役人ありとぞ

美成云。こゝにいへる巢は燕窩なり。泉南雜志に云。閩之遠海近蕃處有燕云々。海商聞之  
土蕃云。蠶螺背上肉有兩肋如楓。蠶絲堅潔而白。食之可補虛損己勞瀾。故此燕食之。肉化  
而助不化。并津液區出。結爲小窩附石上。久之與小雛鼓翼而飛。海人候時拾之。故曰燕窩。  
かく見ゆれば。此孫七がをなしと併せて。その詳なることを志るに足れり

解按。燕窩の事茶餘  
客話に詳を  
り。併せ考  
ふべし。又  
唐山にて。  
宴會は燕窩  
を上等とし  
すと。清人  
の小説燕窩  
縁に見えた

今年も浮世の浪はたよひて。十二月大晦日ほど成りよける。先づ客の間の天井は。唐草  
の華布を縫ひ合せてこらせつ。壁のところも同じもやうの木綿にて張り。町並の門口  
は。大燈籠を夜なくともし明し。門戸を閉ぢて祝籠し。儀式なり。借七つ頃より衣服をあ  
らため。町内ちやちんよて。手頭の禮は出で。明和七年外より「サラマツタ」といふ。内より  
「ホリロウラ」と答ふ。銘々名札を門口にこるもの多し。又は兄弟近き一族の戸をあけて  
内に入り。手頭の祝儀をのべ。焼酒肴をいそひけり。勿論元朝餅を廣む。白餅あり。黒餅  
あり。餅米を粉にして。砂糖の水にて是をこね。又蒸して白にて搗き。餅もちきるあり。押







む。しかのみならず。殺子魚の名あること。此孫七が話をからまししかば。得思ひとくまじきことぞかし。鱈の響名「カイマン」。又「コロコジ」などいへり。「ホアヤ」も此地の方言なるべし。鱈魚の圖。紅毛雜話に見えたり

當年の八月。主人の弟「カンヘンカン」は縁談をみて。けふ吉日とて。嫁迎の用意ありけり。先づ髻のかたより嫁の所へ送りけるその品々より衣類を三通り。箱へ入れ。箱三重。不祝儀の四これ一人よて持ち金の指かね六つ。手首よかくる。金輪二つ箱よして一人よて持ち。金のかんざし十二本箱よして。一人よて持ら。金銀百二十文箱よして。草履壹足。たび壹足。これまた一人よて持ち。焼酒二瓶壹よを。四人よて昇き。ろうそく二丁貳人よてこれを持ち。五十斤かけ。但置燭。牝牡の猪二足。雞一番。家鴨一番。二人よて是をここび。仲人髻同道なる人。上下十八人なり。嫁の方へ参り。祝儀調ひ。暮六つ時よなりて。嫁入とぞ聞えし。かくて嫁のかたより送りける。其品々より。巾着一通り。是は嫁の手づから縫ひ。仕立たるを。髻よ土産とを。程々の毛を付し。笠一つ是も土産。衣装の入りし長箱壹つ。くより枕六つ。是二通り。枕の長さ三尺。髻の方より贈りし金銀二文をとめ置き。百八十文の返しける。此外猪雞家鴨共よ男をとめ。女をかへし。雙方よ分ち。料理よ用ふといへり。大蠟燭二丁の内。一丁

をとめ。一丁の返しける。叔嫁入の同じ年齢の女中。二人の顔をかつき。嫁の顔をあらにし。て。右の十二本の芥を髪よかざり。手よ金の輪をかけ。衣装をあらためて。天くまをさへせてあるさける。目ざましきありさまなり。真先よ件の大蠟燭をともし。半切よ米をもち。そのま。同道十二人むかり。叔髻のかたより一丁返せし大蠟燭をともし。半切よ米をもち。その中よ押し立て。町の門口よぞ出だしける。嫁の燈し来りし夜。此下脱字アルベレ一族の勿論。朋友若もの杯のめい。くよ一斤かけ。半斤かけの蠟そく持ち来り。火をともして祝儀をいひ。ろうそくを嫁の部屋よ持ち行き。嫁を見んとなり。後よの部屋よあまり。勝手臺所までともしつらねけり。女子は七歳より戸外よ出ださむして育て。今日嫁入といふその夜の。ゆるして顔を見するとぞ。能まで唄ひ舞して歸りけり。去程よ。孫七思ひける。此よ落ち付きて。凡六年の春秋を暮しける。安永元年。同二年。さのみくるしみもなく。不自由なることもなく。年を経たり。只故郷の戀しきこと。起きても寝ても忘れがたし。つくく思ひめぐらまよ。此所の風俗父母兄よ孝行なること。うへなければ。我父母よわかれ。兄一人を父とも母とも頼みつれど。かねて二親ありとかたりければ。彌この事をかたらんと思ひ。まつ主人の母親よ語りけるやうに。我多年こよ来り。御愁よ預ること。此うへや候ふべき。されど我日本よ二



親ありて。我行末を察じくらし候べし。折ふし夢も見えて候。願くは一度日本の地へ渡り。親どもの命あらん内よ。一寸逢ひ見なば。いかむかりか悦び候んとかたりければ。老母も涙くみ。道理やとどいひける。此事やがて老母より主人よかたりければ。阿茶陀舟の出帆するよ。主人念頃よ孫七をたのみける。時なるかな。時来りて。この國をこなれ。九年の夏安永三年午の四月十三日。家内よも朋友よも。此世限りの暇乞。又こん秋を頼むの馬だも。鳴さてぞかへるふる郷の。そら心の底の嬉しさも。久敷馴深し旅の空。主人の情ふかき江の涙よくもる水鏡。ずわけ船の竿さして。見かへりく阿蘭陀が。もと舟よこそ乗りよける。

猶この物語の前後の省けるところ。又こゝに記したる中よも。いさゝかつゝの考いと多けれど。ことく書きいでんもむづらひしければ。今又贅せむ

文政乙酉十月廿有三日

山崎美成記

解云。この本文のうち。鱒の「ホアヤ」の事。又嫁のかたより草履。足袋各一雙つゝ舞へおくる事。この外よも予が考あり。これらに列よまゐるすべし

○蝦夷靈龜

江戸坂本町小村屋平四郎といふもの。松前東蝦夷地アツケシ松前城下より行程四百里ばかりといふ場所。受負人よて。手代惣助といふもの。當文政八年乙酉正月よ。そやく松前へ渡海してけり。

考異よ云。アツケシハ三千石目。運上請負の蝦夷なり。又惣助ハ平四郎が子よて。松前へ渡り。蝦夷地へ往來するものとぞ。手代よあらむ

おなじく四月よりアツケシへ赴きて。漁獵の事よろづ手くむりしてをりしよ。六月よもなりければ。漁事いそがしく。日よく蝦夷人うちまじりて。網をおろしなどする程よ。あるとき彌三郎とて。蝦夷の頭取をもちもの。惣助が許よ来て。今日の漁獵ハ。殊よよき勝利あたり。濱邊よ出て見給へといふ。

考異よ云。アツケシハ春三月ころより。漁獵をすなり。大龜を獲たるハ四月ころといふ。且彌三郎ハ。この漁場をあづかるものよて。所謂支配人なり。是惣助がためよ老僕なり

いかなるものを得しやらんとて行きて見れば。長さハ貳間よあまり。横幅一丈餘もあらんとおぼしき大龜龜といひへど。龜の類よて。方言の網よかゝりてあり。濱邊よあくるよと。五人十人のちからよかなふべくもあらねば。船を引くろくろといふものよて。からくして引



さあげたり

考異云。この大龜の俗いふ海坊主。正覺坊の類もあらむ。又常陸の海よりあかる浮木の類もあらむ。全體脂肪多く。且その甲のへりを細工もつかふといふ。又云。トツキの五六尺のもの。たゞみ貳疊敷むかりなるを。をりく網をかゝることあり。さばれ如此大きなる。稀に得がたしとぞ。おもふ。龜の類なるべし

よく見る。その頭も又ふたかへもありぬべし。この龜惣助を見て。涙を流しつつ。哀を請ふありさまなれば。惣助つらく思ふやふ。かくまで巨大なる龜のいくむく年を歴しやらん。龜の齡の萬歳を保つとしても聞くものを。さらむ又このものも千載を経しものこそとおもふ。そゞろよかといくおぼえて。さて龜をむかひいふやう。汝の齡の長からんを殺さんことの不便さよ。この濱のちかきころ。としくは不羈のみよて。どがうへいたく仕合よろし。汝助命のめくみをおもうて。海のさちあらせんやと。さながら人よものいふごとくおもひ入りつゝ。説き示す。龜のいよく涙をながし。首をあげてキ、となく。そのさまこゝろ得たるごとし。さていそや聞きとさたりな。さるよても不思議なれと思ふ。不便いやまして。又しかくぐと説き示せば。龜も亦かうべをもたけて。キ、となく

初のごとし。これより惣助の彌三郎よしを告げて放ちやらんといひけるを。彌三郎従がらむ。あの龜の油をしぼらば。三十金よもなりぬべし。甲も又二十金よのなるべきを放ちやるべきことかんと。うち腹立て争ふよぞ。惣助かさねて大なる漁機を業よをなるものが。もつかなる金の爲に助けやらんと思ひしものを。殺さん不便なりといふを。彌三郎聞きあへむ。あの龜よりちひさきをさきの年よ得たりしとさだま。云々の利のありけるよ。ふたゞび得がたき大龜を得て。又捨つるにえうなしとて。従ふ氣色なかりしかば。惣助が又いづくまづあの龜をよく見て。後よともかくもせよかしとて。さらし兩人つれ立ちゆきて。龜に向ひて。そじめのごとくしかくぐと説き示す。龜のありさま。又同じ彌三郎も此體たらくよあられみの心おこりて。放ち給へといひしかば。惣助のよろこびて後々のあるしよとて。甲のしを少しけつりて。又かのろくろもて巻おろさせ。そがまゝをちつかひしければ。龜の海底よしつみつゝ。凡十町むかりよして。波の上よ浮きあがり。こなたよ向ひて。かうべを動かす。又沈みつゝ。そるか神よて浮きあがること。始のごとく。怒みえむなりしとぞ

考異云。アツケシの濱近年不羈よして。三千石目の運上よ引きあはむ。これより請



負人の借財なども多くいで来しかども。今年によき獵あらんか。明年の仕合のなほらんかとして。からくとりつゝきたれども。この兩三年いよく小獵なるより。とてもかくても。この乙酉の年を限。弗とやめんと思ひおたり。かくて惣助ある日。獵場を見廻りし。支配人彌三郎が云。けふのよきトツキ大龜の方言がかゝりて候。これまで。稀に網入りし。五六尺のものなる。それより五倍のものこそといふ。惣助は濱邊よりきて。件の龜をよく見る。云々。この間の本文よきとて立ちかへり。又彌三郎はいふやう。それ今行きて。トツキを見たる。實に大きなること。實に未曾有のものなり。あかれども。それの彼助けて放ちやらんと思ふなりといふ。彌三郎驚きて。その故を問へば。惣助答ふる。本文のごとし。彌三郎又いづく。人を見てキとなく。いづれのトツキもみな同じ。よく思つても見給へかし。向に得たるトツキども。五六尺四方なりし。すらすらあぶらを絞。甲を賣れば。三十金。或は四五十金なるものありけり。さるをあのトツキ。その五倍なるをもて。二百金か。よくせば。二百五十金もなるべし。近年不獵にして。借財も多かる。大金なるべきものを放ちやることである。おん身のごとく。女らしきあれみの心をもてせば。いかてかあのトツキのみならんや。凡網に入る魚をみ

なをちやるべきや。まこと沙汰の限りなり。よをみづから思ひねとたしなめしを。惣助かさねて。否。それが思ふよしからむ。もろくの魚を網まる。それが渡世なれば。何とも思はむ。汝も亦よく思ひよ。けふの網のあのトツキをとらん爲にあらむ。まかるよかほりる魚の入れをして。思ひもかけぬトツキのかゝりし。これから網に異ならむ。よしや。あのトツキが百金二百金なりたればとて。それにて生涯をまざるよもあらむ。大獵をなまものよのみ小利を貪ることかといふ。彌三郎は従はむ。惣助又いづく。あれは理もなく。思慮もなく。只何となくあのトツキをいと不便と思ふなり。それとまれかくもあれ。いざそれともろとも。ふたゝびゆきて見よといふ。彌三郎は争ひかねて。うちつれたちてゆきて見る。云々。これよりすゑの本文よしるされしが如し

扱その次の日より。漁獵の得ものいと多く。これまで十倍せり。例歳の荷物高三千石目。過ぎざりし。今年に八千石目。餘りしと。なん。秋の漁獵もなき場所なる。思ひの外に得ものあり。その上松前より便船の都合よく。十二分の利を得たり。これ全く惣助が慈愛の陰徳より。忍陽報ありしものか。彼惣助もこの冬に江戸に歸ると。なん。なほ面談せば



くらしきをなしもあらんかし  
考異云。撰得八千石目及びしと云ふ。方便のこと業して。その秋中二三ヶ月を得たる利なり。實に此四月のころより。九月に至りて。二萬石目の利を得てければ。これまでの借財を費ふて。猶あまりありしとぞ。凡一萬石の。金三千五百兩なり。かれば二萬石の七千兩なり。かればその借財をつくなふて。猶あまりありし事もありぬべく。思ふかし

右野作異龜の編。予が聞きしと異同あり。彼此みを傳聞よるのみなれば。是非をいつれと定めがたし。まがれども。予が聞きし趣の。いさゝか具なるに似たれば。先夕席上において。海堂庵主よまかぐと告ぐる。さらわが書に追記してよといゆるれば。またしかたくて。燈下よ秃筆を把りて。蛇足の説をなすこそ。○再いふ。龜をこちて善報を得たるもの。昔より和漢よ多かり。予その故事の抄録ありといへども。博雅の諸君素よりよくあることならんを。こよ賛すべくもあらむ。但ちかごろ仙臺のちかまたりで。このアツケシの大龜の事とよく相似て。なほ異なるものがたり一條。真葛が磯づたひといふ草紙よ見えたり。餘紙なきをもて。

これ又賛せむといふ

乙酉十月廿四日

著作堂痴叟追記

○佐久山自然石

野州佐久山福原家中町すむ住吉や爲八といふもの。當文政八年乙酉の四月のころ。おのれが裏なる地面に鯉の魚溜を作るとして。まりの石垣に用ふる石を。ちかまほとりの箒川より取り寄せける。そが中  
一。丸き石よ自然と二分程も  
高く佛像現れ。左右に日輪月  
輪めくものあるを見出だし  
たり。奇なるものなりとて。同

南岳日蓮大菩薩



野州那須郡佐久山箒川出現御影

一見せける。一。祖師上人の御  
まかたよ違ひなしと。驚嘆せしかば。此爲八齋のいでまありしを立願なせし。頗よいえ  
けり。是よりの後。近國より聞き傳へて。日々參詣群集まつ。このころといよぎやかな



りとして。福原家の臣。原某が右の石の搦本をおくりて。かたりき

乙酉仲冬集初冬念三

海堂庵

○狐の祐天

文政三庚辰年の秋。大傳馬町二丁目させる問屋升屋善兵衛といふものゝ娘。年十八名。祐天僧正のよりうつり。此むすめ俄に六字の名號をかき。名をば則祐天とかきて。花押まで少しもたがひざれば。名號を書きて貰はん。十念をうけん。昔羽生村の累女を得脱させし僧正の。再び来らせ給ひしとして。悪毒無智の老若男女。升屋が門より市をませり。此むすめ名號をもかき。十念をも出だせど。来り給ひぬ時。常の娘にて。平日よかぬるとなし。此娘のかきたる名號なりとて。元飯田町藥店小松三右衛門よりもたせこしたり。ひらきみれば。表装は赤地の錦にて。いと立派に仕立たる絹地の堅物。

南無阿彌佉佛

祐天 面

かくのごとく彌陀の二字たがへり。これを借り得て南取翁に見せける。折ふし酒宴の時なりけり。貴き名號なれど。今醒き口にて。親鸞をらは貧者の有るまじけれど。祐天のちとふむむきなりとて。口をくぐりて一軸をひらき。よく見られて。此彌陀の二字を

かへたる。まさしく狐狸のまじならん。憚りてまじとかく書きたがへしものなるべし。口をくぐりてやくなき事したりなどいひつ。又盃をかたふけて。例の口とく

祐天がのりうつりたる名號の。ひかりをみたの二字よことなれ

此娘の沙汰あまりよいぶかしき事なりとて。大傳馬町名主馬込氏。みづから升屋かたへゆきて。委しく聞き亂し。夫より娘に面會して。さまざま證職して。問ひつめければ。是非なく本性をあらわしたる處。狐のつきたるに相違なければ。馬込のよきまじしと問答しつめて。此きつねを退けたりとぞ。此娘よきつねをつけたる事。此升屋の後家なるもの。上州より年々来て。滞留せる瀬商人彌三郎といふ者と密通して。此瀬うりのたくみなるよし。此事既に露顯し及びければ。絹賣の出奔しけり。後家をば親里へ預け。娘あいをば。親類方へ引きわたし。當主幼年なれば。事落着まで。是迄の通り支配人持とせり。これ皆馬込のそからひなるよし。此頃馬込の取沙汰よく。宿老のかく有りたきものなりと。人々いひあへり。これよつけても。名號を一度見られて。狐狸のわざとそやくさとられし。南取翁の先見明らかなりといふべし。狂歌に名號のひかりをみたの二字としれと。もとより貴き彌陀の二字なれど。その光りよおそれて書きかへたれば。則此二字にて。怪しき



ものの所爲なるをしれと。よまれしものなるべし

○白猿賊をなす事

佐竹侯の領國。羽州は山役所といふ處あり。此役所を預りたる大山十郎といふ人。先祖より傳承する所の貞宗の刀を秘藏して。毎年夏六月に至れば。是を取り出だして。風を入るゝ事あり。文政元六月例のごとく。座敷に出だし置きて。あるじもかたから去らむ。守り居ける。いつこよりいつのまゝ来りけん。白猿の三尺をかりなるが一足来りて。かの貞宗の刀を奪ひ。立ち去り。ゆくりなき事にて。あるじもやゝといひつゝ。かつとり刀にて。追ひかけ出づるを。何事やらんと從者共もあるじのあとよつきて走り出でつゝ。追ひゆく程。猿は其ほとりの山中に入りて。ゆくへをしらむ。あるじはいかよともせんすべなき。途中より立ち歸り。この事從者等をとじめとして。親しき者も告げしらせ。翌日大勢手配りして。かの山もわけ入り。與ふかくたつねける。とある芝原の廣らかなる處。大きな猿二三十疋まどわして。其中央よかの白猿。藤の蔓を帯よしつ。きのふ奪ひし一腰を帯ひ。外の猿どもと何事やらん談じある體なり。これを見るより十郎とじめ。從者も刀をぬきつれ。切り入りければ。猿ども驚き。ことごとく逃げ去りけれども。白猿をかり

は。かの貞宗を抜をなし。人々と戦ひけるうち。五六人手負たり。白猿の身よいさゝかも疵つかむ。度々切りつくといへども。さらし身よ通らず。鐵砲だ一通らねば。人々あやみこて見えたる。白猿は猶山ふかく逃げ去りけり。夫より山獵師共をかたらひける。此猿たましく見あたる時も候へども。中々鐵砲も通らずといへり。此後いかよなりけん。今一手よ入らざるよし。その翌年かの地の者来りて語りしを。思ひ出で。けふの兔園のいくさよもど。記し出だすよなん

文政乙酉孟冬念三

文寶堂散木記

天正兔園

○越後烈女

輪池

ことし八月の末つかたよ。小石川水道端よ住める與力藤江又三郎の宅。強盜入りしことあり。あるじのやも男よて。俳諧の會よ行き。老母と親類がり行きて。下女と下男のみ留守に居たり。よる夜の刻過ぐる比。門をたたく音す。あるじのかへりたるをらんと思ひて。男出でてあけたれば。白刃を提げしもの。五人おし入りて。この男を志むりあげ。部屋よ入れて。二人のまもりをり。三人の内よいらんとせしを。下女窓よりのぞきみて。とみよ歸り



入り。燈火をふきけし。誰かまよ。かれ起きよと。有合ひもせざる人があるがごとくよよばり。さで雨戸を音たかくおけて。うしろのかたよさけ。縁を下りて庭よ出で。玄關の前よ行きてうかぶふよ。人影なし。あたりをみれば。稻荷の祠の垣のかけより。さきよみしぬす人三人出でたり。女少もさどかむ。こなたへき給へ。みづから道びきをべし。いざとて。先よ立ちて刀を前よさげて。縁をあがり。物かげよかくれてまちあたり。かくてひさしくまてども。入りきたらむ。いかせしならんと。もとの如く庭よいでよみるよ。さらよかけもなし。垣のかけをのぞきみてもあらむ。さてのよげさりしならんと。あけたる門の戸をたて。戸ざしをる音を聞きて。男のふるへ聲よて。女をよぶ。女いかせしやとへり。かくじはられたり。ときてたべといふ。すなわち繩をときながら。此有さまを。かならむ人よかたをまじ。あるじよも申すまじといひさかせて。うちよ入り子過ぐる比よ。あるじかへりたれば。事の系なきさまよて。やすませたり。あくる日。あるじ銭湯よゆきたれば。となり同僚よ逢ひたり。同僚のいづく。夜邊のそこよ。何ごと有りしやと。あるじそれがし。他行してしり侍らすと。いかなる事よや。たよならぬ物おとしければ。耳たてよさよをり。猶物おとせば。出で逢ふべしと。身がまへせしが。その内よ納りたれば。うちやすみ

ぬと。あるじかへりて。かのひとのかくいられし。なよごとか有りしとへば。しかくどなたよ。さばかりのことま。いかで告げざるやといへば。さん候。ぬき人おしりたるのみよて。物もうせむ。人もあやまたを候へば。申す違もなしとおもひしなりとこたへて。打ち過ぎぬ。まがちかきあたりよ。この家あるじの姉あり。長月なかばよ。この女つかひよきたり。姉がいふやう。さきよぬす人しりぞけし。たぐひなきふるまひなりき。その時いかの覺悟よて有りしと。女の堅固の田舎人よて。覺悟と申すことしり侍らす。おしりかりてもみ給へ。白刃さげしものよ。いくたりも入りきたれば。みづから命なき物とおもひしのみよて侍りとこたへし。越後のむまれよて。年廿あまり三よなるとぞ。酉彦といふものよかたりさかしよなり

○高須射橋

鳥井丹波守 某侯の家令高須源兵衛といふ人の家よ。年久しく飼ひおける猫。去年のいつ比よや。ふと行方しれをなりぬ。その比より源兵衛が老母。人よ逢ふことをいしひて。屏風引さまりし。朝夕の膳もその内よおし入れさせて。給仕もしりぞけて。したよむるを。かひまみせしかば。汁もそへものも。ひとつよあつせて。はひかへりてくふ。さてのむかし物がたりよ聞き



しごとく。猫のむけしよやといふかりあへる折から。その君のゆあみし給ひて。まだゆか  
たびらもあらせざりし時。なまらん真黒なるもの飛び付きたり。君こぶしをもつて。  
つはくうたれしかば。そのまゝ逃げ去りぬ。その刻限より。かの老母せなかいむといひ  
ければ。いよくうたがひつゝ。親族よかくと告げられ。ものゝふの身よて。すてかくべ  
きよあらず。心得有るべしといわれ。とかくためらふべきよあられ。雁股の矢をつ  
がひて。よく引きつゝ。人して屏風をあけさせたれば。老母おきをほりて。むねよ手をあ  
て。とても母をいるべく。こゝを射よといふよひるみて。矢をはづしたり。又親族よかた  
らひける。その射藝のいたらぬなり。をみやかよいどめよといわれ。このたびいた  
ちまちよきつてはなちたれば。手ごたへして母よげ出で。庭よてたふれたり。立ちより見  
るよ。母よたがふ事なし。やゝまばしまもり居たれども。猫よもならざれば。こゝいかにせ  
む。腹きりて死なんといふを。おしとめて。あままでまち見よと云ふ人有り。心ならず一  
夜をあかしたれば。もとかひおける猫のまかたよなりぬ。其のちたよみをあげ。ゆかをこ  
なちて見しかば。老母のほねとおぼしくて。人骨いでたり。いかよかなしかりけん。このこ  
とふかくひめて。人よかたらざれば。人しるものなし

評云。この鳥居の家老高須氏の。關・潢南のしる人なり。はじめの定府なりしが。今の  
勤番よて。去歲より江戸よありといふ。又當主の今茲十五歳よならせ給ふなり。右  
の物語りかたよいふか。もし在所よての事と。さらば昔の事を今のごとく  
とりなして。人のかたり聞かせしよ非を

○明善堂討論記

文政七禩。六月朔日。予與門人敬齋。強齋。謙齋。昌齋。笠齋。約爲會讀。預期自曉七鼓而  
始。至黄昏而終也。適予友襟葉散人。携其徒十數人來共討論。乃記其言藏諸篋。云  
六月一日。展各蓐食。集於明善堂。天將曉。月未落。焚篝燈。倚九葉。襟葉散人忽到。散人者武州  
金杉根岸人。常好讀日本記事。其於正史稗說。無所不研究。能辨我邦治亂。論其興廢。言辭滄  
澗。若決江河。若驟雨暴至。沛然無禦之者。以予酷好西土書策。每往來會讀。雖問。此日方讀史  
記伯夷傳。襟葉曰。嗚乎。夷齊。不食周粟而餓則可也。何輒食其土薇。詩曰。普天之下。莫非王  
土。薇亦非周土之生乎。夷齊之義。不食周粟。則薇亦不可食焉。孔子方稱夷齊賢。吾甚惑焉。且  
孟子論武王曰。聞絀一夫紂。未聞殺君。孟子何出此言也。夫紂雖無道而親戚皆之。猶爲天子  
也。安得等之匹夫乎。敬齋揖襟葉而進曰。甚哉。子言之過高也。夷齊不食周粟。乃是夷齊之僻。



孟子所以為隘之也。足下不知其為僻。而責食其微。足下亦是僻之又僻耳。必如足下言。則雖  
 巢文許由下階務光。未以嘯於足下心也。若其充足下之心者。其於陵陳仲子乎。所謂胡而充操  
 者。我孟子之所不取也。足下坐未嘗讀聖經。是故出此言。退讀聖人之書。而後會我輩強齋在  
 側。抗然大言曰。二子之言皆失矣。二子愕然曰。何。強齋曰。夫道一而已。分為二為三以往。復散  
 為千為萬。故有陰則有陽。有剛則有柔。有君必有臣。有仁必有義。其所遇或異。則其所行亦殊。  
 是以事雖萬殊。於其歸道一也。譬之忠質文。三代所向不同。其及合於禮。未嘗同也。武王之伐  
 紂。夷齊之諫武王。其迹雖異。各盡其道。始非有二致也。武王見天下之溺。不極之。不免揚朱為  
 我之誇。夷齊扣馬諫。不免賊其君之謂。聖賢之心。無所偏倚。隨物而應者。孰不規矩。何不準  
 繩。以夷齊之準繩論武王。而曰不平。曰不直。亦其宜也。以武王之規矩。議夷齊。而曰出方圓之  
 外。役亦其宜也。又譬之。武王之德。大陽之輝也。夷齊之行。大陰之光也。微武王不能為夷齊之  
 光。武王亦不得夷齊。則不得著。其德輝也。二聖之在天下。猶日月之五行。而不相戾也。孔子盛  
 稱之。不亦宜乎。蓋孔孟之所毀譽。必有所試。又何疑其言。然足下疑孟子命紂為一夫。是何其  
 意謬戾也。紂雖稱天子。親戚眾臣。及四海內。無一人助之者。則非一夫何。昔者宋高宗。亦與足  
 下同病。問時碩儒尹焯曰。孟子何以謂之一夫紂。尹焯對曰。此非孟子之言。武王收師之辭也。

曰。獨夫受。洪惟作威。由是觀之。孟子非敢新言之。假令孟子言之。孟子聖人也。如何廢其言乎。  
 足下實有違心乎。吾丁寧反覆。雖頻提子耳。而大聲告之。子固覆如充耳。豈有益其是非乎。如  
 子之人。謂之無與與昔宜哉。不得其觀日月之光。聞大雅之音。於是三人相爭相怒。或瞋目或  
 握拳。喧嘩良久。謙齋猶然笑。徐之前席曰。三子之言。俱有理。雖然未得其所處也。夫聖之道。區  
 以別之。則有時者。有任者。有和者。有清者。如伯夷者。所謂聖之清者耳。伯夷之好清潔。猶顏子  
 之好學。伯倫之嗜酒也。天地開闢一人也。於是操業又怒曰。子嘗孟子之餘孽。將折我言。雖孟  
 子再生。我猶將說却之。亦況於足下輩乎。退哉退哉。謙齋亦怒。四人猶戰場爭死生。市中貪  
 贏利也。乾齋曰。予有一說。足下輩安意聽之。四人同曰。如何。乾齋曰。盡信書不如無書。書且尚  
 疑之。則史記不能無疑焉。吾聞之。史記者大史公之未定之書。而且多攙入。今取一二證之。其  
 攙入者。司馬相如傳贊曰。揚雄以為靡麗之賦。勸百諷一。趙翼辨駁之曰。雄乃哀平王莽之時  
 人。史遷固武帝時之人。而何由得預知百年下揚雄者。又自在岐互處。朱建傳謂。黠布欲反。建  
 諫之不聽。事在黠布傳中。今黠布傳無此語。是亦古人辨駁之。由此觀之。未定之書。未足信之  
 矣。雖然如伯夷傳。明確高論。非後人攙入。唯夷齊叩馬而諫之事。殊不經見。則疑是流傳之言。  
 若果為流傳之言。未足信之也。且明王直辨駁也。子輩知之乎。若未則熟視之。察之而後正其是



非。蓋爭者事之末。其言雖有義理。終損君子之操。願暫聽吾說。莫爭莫辯。於是座中哄然笑。讀如故。畢伯夷傳。次讀春秋左傳。至莊公九年。齊管仲請囚之章。樂門人大軌。喟然歎曰。噫。漢土之人。何薄於忠義乎。管仲怯懦而無義。魯殺子糾。召忽死之。管仲不死。以余觀之。召忽可謂之能終事君也。然孔子特稱管仲。吾竊惑之。昌齋應之曰。子惑宜矣。昔者。子路之果敢。而不能無此惑。况於足下輩乎。夫孔子之不稱召忽。而稱管仲者。稱其功業也。蓋召忽一夫之材。若不死於子糾。三軍之虜也。管仲王佐之材。死子糾則不免溝瀆之死也。故孔子美其不死。而稱其功業。嗚乎。管仲功業之益於民。平王東遷。諸侯內攻。夷狄外侵。周室之不亡如線。向無管仲相桓公振霸業。則中國之不被髮左衽無幾矣。可不謂非仁乎。雖然於其為人。孔子亦賤之。傳所云。不一而足。管仲之器小哉。焉得倫。管仲不知孔。由此觀之。孔子之稱管仲。所謂門上挑之。而在夷狄則進之。猶如稱文子之清。美藏文仲之智也。亦何怪之管仲也。且子言曰。魯殺子糾。疎漏甚哉。經云。齊人取子糾殺之。殺子糾者齊也。非魯也。大軌擊節乾笑曰。子席讀唐土之書。偏僻于唐人。一何甚。夫仁者而必有仁之功。智者而必有智之功。既云管仲不知禮。智者而不知禮。可乎。又云。焉得倫。仁者必倫。管仲不得倫。則可謂之仁乎。昌齋曰。聞之錦城先生。曰。夫酒有清濁之別。有醇醪之品。飲清醇者亦醉。飲濁醪者亦醉。於為醉之功則一也。為其物厚薄則

解云。この  
發句。口碑  
は傳ふとの  
み云へれと  
も。其角が  
口調は硬な  
し。且梅が  
かや云々と  
いひし梅が  
香の。御能  
殺者梅若氏  
をいふよし  
にて。當時  
茅場町。こ  
れかれ相  
隣てをりし

異也。管仲之功。濁醪之醉也。堯舜之仁。清醇之醉也。今天清醇與濁醪。固有差別。霸與王。功同而本異。然至其一匡天下。一也。傳云。君子成人之美。不成人之惡。故夫子蓋其不知禮與器小。而特稱其功。如足下之言。吹毛求疵。責人而無止。而與我聖人之道大有逕庭。於是大軌言下敬。豐民云。予記此事。既在客歲。自後以來。有定期。而為此討論。又每會必筆。而藏諸篋笥。中。今適搜篋笥中得之。亦以至兔園社友。若有頑說。幸見教焉。敬而受教。  
千時文政八年乙酉小春念三  
乾齋 中井豐民識

○梅が香や隣の放生惣右衛門  
といふ。其角が句のよし。世人の口碑は傳ふれども。近頃京傳が書けるといふ奇跡考。其角がいつれの集いも見えをと出だせり。全く後人の贋作なるべし。其角は寶永四年に没せしとかや。然るに祖徠は。六年までの吾藩の内に住居せしかば。其角と近隣なるべきや。やあるべき。

今茲乙酉の二月二日のころ。野州那須郡大田原。回祿ありて。城のこりなく災いありし。城下の民家にて。三日鳴物をみづからつゝしみて籠居せしとかや。四日めは及びて。有司のものより命じて。常は復せしめて。各々修業を行ひし。古國とていとたうとき事



時の事とも  
いへり。其  
角と祖來と  
近隣ありと  
いふ作よ  
あらむ。か  
れば祖來  
のいまだ柳  
澤原へゆし  
かへられ  
ざりし已前  
の事。尚  
尋ぬべし

なりき。災まつまりし後。民家より造營の費をわのく所望して。調進せんことを争うて  
請ひしかば。有司よて造營の失脚の勞脚なかりし。文王の靈臺も齊しきめでたかり  
したゆしなり。これよよりて。速に造營をりなめま。國主めまされば。あしんとて。六  
月中に歸國をべきを。回祿よよりて二月中に歸國を請ひしかば。縣官よて在所の回祿  
よて。歸國をいやく請ひしたゆしなして。其沙汰は閣老方困り給ひしかば。さりなが  
ら二月末に請の如くゆるしありて。歸國ありしかば。事新しきためしなりき

乙酉冬十一月朔

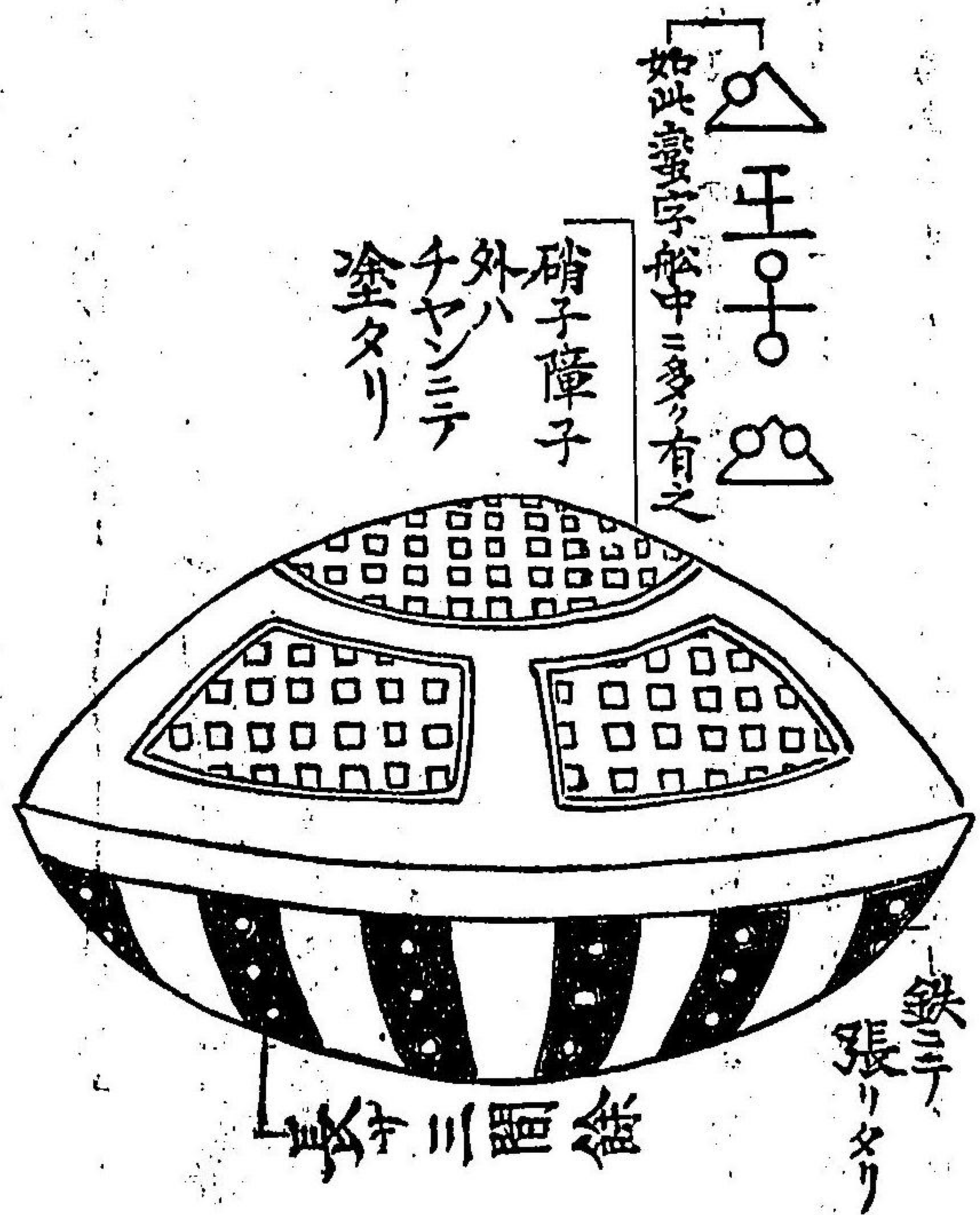
○うつろ舟の變女

萩生鏡園記

享和三年癸亥の春二月廿二日の午の時むかり。當時寄合席小笠原越中守千石知行所常  
陸國とらやどりといふ濱にて。沖のかたに舟の如きもの造り見えしかば。浦人等小松あ  
また漕ぎ出だしつ。遂に濱邊に引きつけて。よく見る。その舟のかたち。譬へば香盒の  
ごとくよしてまろく。長さ三間あまり。上の硝子障子よして。チヤンをもて塗りつめ。底は  
鐵の板かねを段々筋のごとくよ張りたり。海巖にあたるとも打ち砕かれざる爲なるべ  
し。上より内の透き徹りて隠れなきを。みま立ちよりて見てける。そのかたち異様なる

ひとりの婦人ぞおたりける

その圖左の如し





解接を二番西物の一  
 見録人物の  
 際下云女の  
 の衣服か筒  
 袖上を細く  
 仕立云々を  
 仕立の毛の  
 白き粉をぬ  
 りかけ結ひ  
 申候云々を  
 見るとより  
 この髪女の  
 頭髻の白き  
 も白き粉を  
 ぬりたるを  
 ちん髻西物  
 属國の婦人  
 云々ありけ  
 るは考  
 ふへし

そが肩と髪イシガキの毛の赤かる。その顔も桃色モモイロにて。頭髪イシガキに假髪イシガキなるが。白く長くして背セに垂  
 れたり。その歌の毛か。より糸の。これをしるものあることなし。送ユツク言語コトバの通トぜねば。い  
 づこのものどと問ふよしもあらむ。この鬻女ウツメ二尺四方の管フエをもてり。持モチ愛するものと  
 おぼしく。しばらくもそなきをして。人をしもちかづけむ。その船中フネナカにあるものを。これか  
 れと檢せし。

水二升許小瓶コビン一入れてあり。一本ヒトポン二升を二斗ニト作り。小瓶コビンを小敷物コシキモノ二枚あり

船中作れり。いまだ孰か是を知らむ



菓子やうのものあり。又肉を煉りたる如き食物あり

浦人等うちつどひて。評議ヒヤクギをるを。のどか見つゝ。ゑめるのみ。故老コロの云。是は鬻國ウツメの王の  
 女の。他へ嫁したるが。密夫ヒソカありて。その事あらわれ。その密夫ヒソカに刑せられしを。さきが  
 王のむすめなれば。殺すコロスは忍びむして。虚舟ウソフネに乗せて流しつゝ。生死シジョウを天アメに任せしもの  
 也。志ココロからば其箱の中なる。密夫の首カビやあらんむらん。むかしもかゝる鬻女ウツメのうつろ  
 船フネに乗せられたるが。近き濱邊ハマに漂着ヒラせしことありけり。その船中フネナカの。組板クミイタのごときも  
 の一載イチサイせたる人の首の。なま〜しきがありけるよし。口碑クヒに傳ツふるを合アヒし考ふれば。件  
 の箱の中なるも。さる類のものなるべし。されば鬻女ウツメがいとをしみて。身をそなきをるな  
 めりといひしとぞ。この事官府ウツメへ聞えあげ奉りて。雜費ソロヒも大かたをらぬ。かゝるもの  
 をば突き流したる先例サキレイもあればとて。又もとのごとく船フネに乗せて。沖ウチへ引き出だしつゝ。  
 推し流したりとなん。もし仁人の心もてせば。かくまでよあるまじきを。その鬻女ウツメ  
 の不幸なるべし。又その舟の中フネナカに△王子△等の鬻字ウツメの多くありしといふより。後  
 よかもふ。ちかきころ浦賀ウツメの沖ウチに歌りたる。イギリス船イギリスフネもこれらの鬻字ウツメありけり。か  
 られば件の鬻女ウツメの。イギリスか。もしくハベンガラ。もしくハアメリカなどの鬻王ウツメの女を



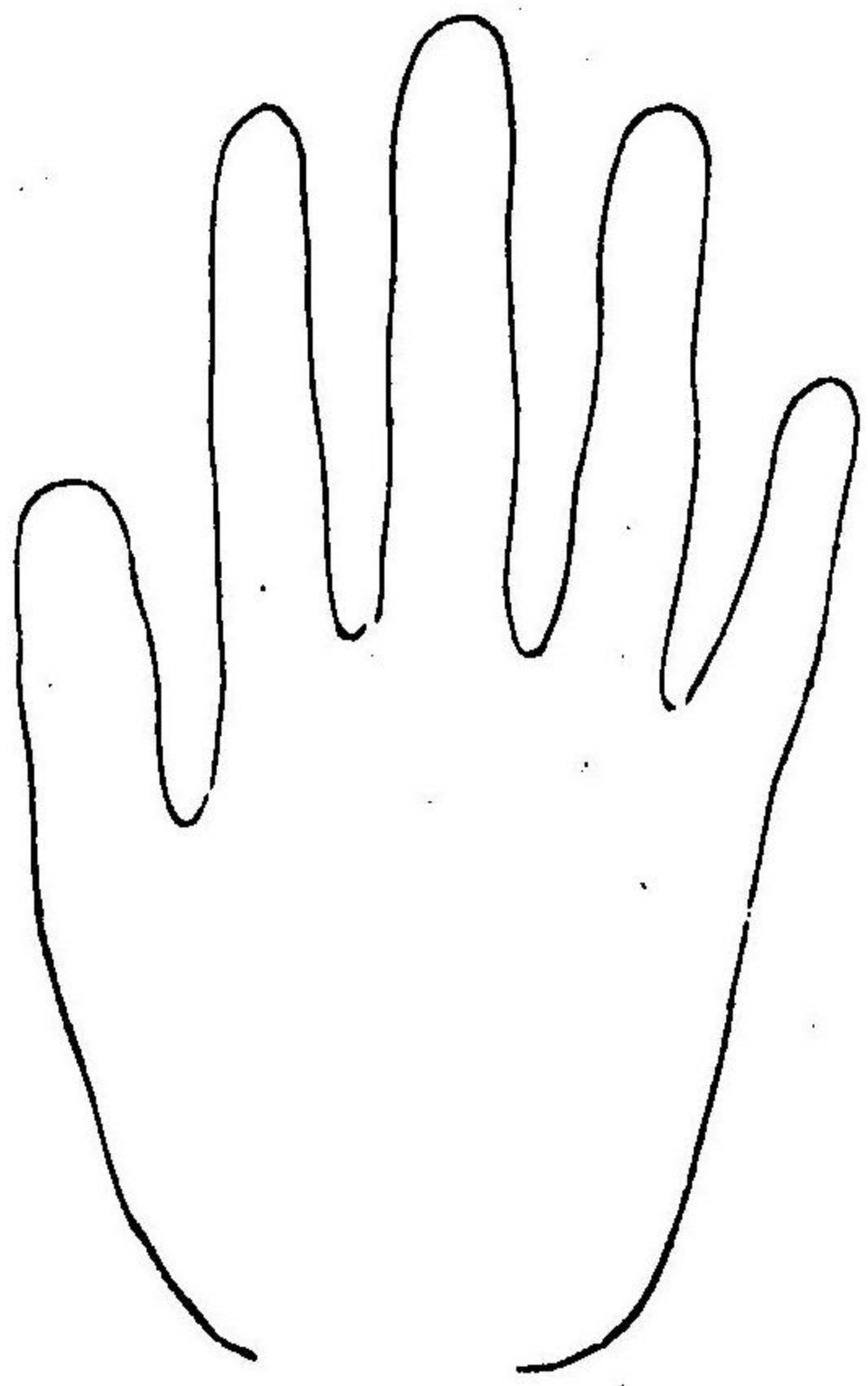
りけんか。これも亦知るべからず。當時好事のものゝ寫し傳へたる。右の如し。圖説共ツツサ疎鹵ツツサとして。具ならぬを憾とせ。よくしれるものあらば。たづねまらずしき事なりかし

○品草の巨女オホメノコ

文化四年丁卯の夏四月のころより。世の風聞フウブンよきこえたる。品川驛の橋の南なるこゝを橋鴨鴨屋が鴨かゝえの飯盛女イハモリメノメ。名をつたといへる。この年廿歳ニニトシにて。衣類イロの長さ六尺七寸ロクシチブシとして。裾をひくこと一二寸イチニセンまぎま。膂力リキありといへども。そのちかさをあらわさざりしとぞ。世に稀なる巨女なれども。全體よくなれあふて。しなかたち見ゆるしからず。顔オモばせも人なみなれば。この巨女オホメはあゝんとて。夜毎ヨ毎はかよふ標客ヒラカ多かり。當時その手形テガタを家イ嚴イはかくりしものあり。をななち舉アげて左ヒダリに載ノせたり。その手テの中ナカ指サシの頭カブより。掌テの下シタまで。曲尺マカド六寸九分。横幅ヨコタマ巨指オホササを加へて四寸弱ヨシチヤクなり。その圖左のごとし

身まかりよきといふものありしが。さなりやよくしらむ。又その翌年文化五年の冬フユのころ。

湯島なる天満宮テンマンミヤの社地シヤチにて。おほをんなのちからもちといふものを見せしことあり。予オノはなほ總角ソウカクにて。淺草アサカのとしの市イチのかへるさサは立ちよりて。それをば見けるミ。よのつねのをんなより一歳イツサイ大きなる。俤イデきかりしが。品川シナガハのつたが手形テガタよくらぶれば。いたく見劣りて。さのみ多力オホチカラなるものとい見えざりき。彼品川シナガハのおほをんなは是



なるべしと。おもひをる紛マギらしものとしられたり。かばかりをぬきうへへだも。賈物ヤモノいで來たる。油斷アブのならぬ世よこそありけれ。こゝこゝはすぎこしかたを思へば。十八九年ハチヤクハチヤクのむかしむかしなりぬ。時トキは筆研フデシの間。亦戯オモシれししるまといふ

文政八年乙酉小春念三

琴 嶺

乙酉霜月兔園會



○天台靈空是湛靈空

平安 角鹿桃窠

享保元文の頃ほひ。沙門光謙。字は靈空といふ天台宗の學匠たり。近年皆川淇園翁一たび其文章を賞せしより。其名ますくあらこれぬ。その書もまた奇逸なるものなり。また寶曆。明和の頃。浄土宗に靈空字は是湛といふ僧あり。寛政十一年の刻本。平摺印補正。比叡山光謙字靈空と載せ。靈空是湛の二印を出だせる。頗杜選なり。このかの是湛靈空の印として。天台靈空の印よりあらむ。是湛靈空なり。晚年寺町今出川の邊。西山派の寺に住せり。此二僧書風かつて似るべくもあらぬを。など誤り傳へたるよしや



○天台靈空是湛靈空

平安 角鹿 桃 窠

享保元文の頃ほひ。沙門光謙。字は靈空といふ天台宗の學匠たり。近年皆川淇園翁一たび其文章を賞せしより。其名ますくあらぬ。その書もまた奇逸なるものなり。また寶曆。明和の頃。浄土宗に靈空字は是湛といふ僧あり。寛政十一年の刻本。平摺印補正。比叡山光謙字靈空と載せ。靈空是湛の二印を出だせる。このかのは湛靈空の印として。天台靈空の印はあらむ。是湛靈空。晚年寺町今出川の邊。西山派の寺に住せり。此二僧書風かつて似るべくもあらぬを。など誤り傳へたるよ

兔園小説 第十集終

# 閑窓自語



○柳原紀光卿小傳

紀光卿<sup>キミツ</sup>姓は藤原權大納言資明卿の裔として權大納言光綱卿の男なり延享四年を以て生れぬ童名綱丸初の名は光房字は藤曼後櫻町後桃園光格の三帝に歷仕し權大納言正二位に至りぬ寛政九年八月九日落飾して法名を曉寂と呼べり博覽強記を以て稱せられぬかつて百鍊鈔の後を繼ぎて龜山院より後桃園帝までの事を志るせりまべて八十一冊續史愚抄といふみを當時の記録に據られたれば殊に史家のたふとぶべきものなり寛政十二年正月四日病みて薨ぜり年五十四墓は領地紫野西京にありとぞ



開窓自語

柳原紀光著

禁秘御抄事

禁秘記御抄。後三條院勅撰なり。無宣公記およびふるき書目俗仁和寺のなとよも。たし書目六といふかゝ見ゆ。應永の比まで。御府ありしよし。無宣公記せり。今につたえらざるや。たえて聞きも及むを。順徳院の御製の禁秘御抄のみ。あまねく世にひろまれり。これに後三條院御抄もつがれて。えらび給ひし事と見えたり。

假真内侍所於念誦堂事

應安四年。後光嚴院當家柳原の第一遷幸ありしとき。内侍所を念誦堂におかるとよし。志るせり。いまの世にかりそめにもあるまじき事とおぼゆ。まかる。禁秘御抄。院の御時土御門院行幸の時のごとき。念誦堂となづけて。護摩のけぶりよくすぶる所をもて。かじこどころの御在所ととわれ。例なき事とあらざるべし。

大嘗會等再興事



大嘗會也。後土御門院文正元年の後。絶えたるを。東山院貞享四年。かたのごとく再興ありけれども。辰日。巳午の節會を。たゞ一日の宴會あり。例はかなとざる事多かりしを。櫻町院元文三年。かさねておよそのころ所なく。再興ありて。いまよつたへ行たるなり。新嘗祭も同じみよと。元文五年再興あり。寛永比よりたえし跡ありそれより年々の事とに在れり。東山院元禄元年より。新嘗御祈として。吉田の神祇官代して。下部のともがら年々奉仕とありけれども。准的のあらむ

公卿勅使例幣等再興事

公卿勅使。後光明院正保四年九月。例幣のたえたるを再興あるべしとして。まづ廣橋宰相繼光卿を伊勢。たてらる。宸筆の宣命。公筆も御製なり。かねて菅氏のともがら。筆を仰せられし。この筆の口傳つた。らざるよし。辭し申せるゆゑとぞ。例幣の宣命をかり草進を。奉行の尚祖父一位殿資行頭辨して。御存知あり。此後靈元院天和二年正月。去年の冬。内宮火事より。公卿勅使左大辨宰相宗顯朝臣をたてらる。この時も正保のあと。て。宣命御草とも。おほんみづから遊むしけるとかや。曾祖一位殿資廉權大納言して。傳奏せしめ給ひける。その後。又櫻町院元文五年三月。代始の公卿。勅使新宰相中將重熙朝臣を

たてられて。これの代々の式よとおぼしかきてたりし。絶えよけるぞほいなく覺ゆる

嘗祭事

周公旦のつくられし。爾雅。秋の祭を嘗といふよし見えたれども。こが國の。冬の嘗といへり。これの秋のみのりを冬をなへらる。ゆゑ。嘗といふなるべし

和歌三神事

和歌三神の。いま人のしるところ。をみよし。玉津島。かきのもとなり。おかる。後奈良院宸記。和歌三神の號を。宸筆にあそびす。住吉。玉津島。北野等なり。北野の中あり。御誓いか體くむしくのせらるさま柿本のひとまろ。後世石見。社を勧請せしかども。神號のあらざりし。中御門院御時尊保八年。この北千年忌。かよふといふ沙汰有り。豊年たしかむらざる事なりて。二月一日。靈元院法皇の御沙汰として。大明神の神號をさづけられ。同じき日。正一位神階降。かいて宣命あり。上卿の中院大納言通。卿。奉行の頭辨頼胤朝臣なり。柿本大明神の號。近代の事といふ事。人大方あらむ。又三神のうち。北野のあるといふ事も。しらぬなるべし

當家所藏宸翰事

龜山院。後伏見院。已下宸翰。御記も少多く品持す。又後醍醐院御製和歌。よろき中納言資朝卿



傳家どのすけよたまふ所とてもちつたふるなり。御うた  
明神の御あり

たちかへり身をぞからむるかひり行く。人のつらさのあまりなりけり

この外明正院晴雨亭の勅願あり。これに仙洞は通圓の御茶屋とてありけるよ。かけらる  
るところとぞ。御由緒ありけるゆゑよ。たまふなるべし

明正院河原御所事 付掘井室事

いまの掘井室と。明正院の時より御幸のためとて。つくられし河原の御所のあとなり。崩御  
後かの室よたまをりけるとぞ。掘井の室もとたかくみねの邊にありけむ

宇佐使再興事

宇佐使に。應仁のみだれより已前たえてなかりしを。櫻町院延享元年十月より再興ありて。  
勅使左中將雅重朝臣をたてらる。その後またたえよけり

靈元院疫癘和歌事

享保八年病をやりて。人民多くうせぬ。靈元院の御うたあり

風ふかば本采空のそらよふけ。人よあたりてなんの疫癘

此御製を都鄙きつたへて。かきしるし。まもりとせしよ。やめるものごとく治し。やま

ざるもの大かたよのがれけりとぞ

靈元院知食大變事

故大夫典侍のあまごみ 曾祖一位殿御女 かたられしに。寶永五年三月八日のあした。東山院 于時御  
前よさふらにれしよ。靈元院より御書を進ぜられて。今日に御つしみあるべし。おぼし  
めしあはす所ありと仰せられぬ。そのひる頃より。火おこり。禁裏。仙洞はじめ。諸家人家  
社寺よいたるまで。おびたしくやけぬ。火事といはれども。大變をかねてまろしめし  
けん事。いみじく覺えしとをむ

中御門院笛御堪能事

中御門院に。笛の御上手よ。御音ことよをぐれておとしましけりとぞ。よきりなど御心  
をすまして吹きいらせおとしまをとき。まつねの。まのこよまありて。まよいたりけるを。  
ときぐ見しよし問しすけのたまみ 光子東山院中御門院兩朝女房 かたられしなり

廣南國貢象事

享保十四年廣南國より象をわたし。術をきよしよ。このけものきよめて。鬣をいせゆゑ  
よ。舟のうちよほどをこかり。そこのごときものをこしらへ。ねをみを入れ。うへよあみを

本草綱目時珍曰。象出交廣雲南及西域諸國有灰自一色形



體面  
大者  
長文  
餘高  
辨身  
之  
楚越  
之象  
皆  
青黑  
也。北  
戸録曰。  
廣  
雷州  
皆  
州  
黑  
牙  
小  
而

そりかくよ。象これを見て。ねをみを外へいたさじと。四のあしよて。かのここのうへをふたく。これよ心をいるゆゑよ。數日船中よたつとぞ。志からざればこのけもの。水をもえたるゆゑよ。たちまちうみをわたりて。かへるとなむ。さて象本朝よきたる事。應永十五年南蠻よりくろき象をよたま。この外例見えす。黒象列種なり。このたびの象の灰色なり。白象よあらむ。

召覽象於内院事

同年四月象を宮中よめし入れて。中御門院御覽あり。臺盤所のまへよ引くとき。象まへあしを折りける。ちく類といへども。帝位のいとたつときをまりけむ。やむごとなき事なり。御製和歌よ「時しあれば人の國なるけだものも。けふ九重よみるがらなしき。」のちよこの御歌草。故殿光臣よたまりて。もちつたふるなり。又この日靈元院法皇の御所よひかせて。御覽ありけるよ。このたびの象かしらをたれて。恐れけるかたち見えけるとなん。御製やまとうた二首

めづらしくみやこよさざのからやまと。過ぎこじかの山いくちきとなる  
なさけあるさざのすがたよから人よ。あらぬやつこの手よもなれさて

後水尾院被任往年分官事

後水尾院也。官途の家作よかくるをあれみおこしませしけるよ。往年分の官をよんぜらる。位階よと常の事なれども。官よかいて。こと様なる事よて。その比の日記を見ん人。もたら心得あるべき事なり。たとへば日次よ元和二年某宰相とあるよ。志補任よ。大納言よかけり。ある侍従それがしとあるも。諸家侍よ。中將とのを。おとホトいませらとしく宰相よて宣命文などあるよ。大納言よて宣命使つとむるが。うたがひ多く。世よのこれり。その後。次第よ此事やみけるぞよき事よ侍る

櫻町院爲聖主事

むかしより。延喜。天曆のみかどを。ひじりの御門といひつたふ。その外の御門。ときよとりていふゆゑれども。昇殿の後いこぬよ。櫻町院といみじきおほんといきまどかりけるをあふぎて。いまよ聖主と申まなり。このみかど。中御門院第一のみこよて。新中和門院の御たらなり。享保五年正月一日の曉よ降誕あり。およそ××××おほんむまれぬ。神武天皇。垂仁天皇の外みかよばむ

入道前攝政家源公敏辭書院日給簡銘事



享保二十年。中御門院御讓位の頃。院の殿上日給の簡の銘を。入道准后前攝政家熙公清書  
あるべしとて。院司左中將隆英朝臣奉行して。簡をつくらしむる。寸法よりあつくと  
のへ。書さあやまりあらんとま。けづられん料よあつるよし申し持參せし。入道前攝  
政大さよけしさをとんせられ。書さとんじすべきもの。清書をうけ給ひる事やあると。  
かたくいなと申されける。これのもとより院の御氣色よあらむ。隆英朝臣の才學なり  
けれども。院よりさまぐ仰せなだめられて。つひは清書のせられける。隆英朝臣の院  
より××××××とぞ。故准后内前公かたり給ひしなり

櫻町院被尋水火灾事於神祇道事

櫻町院伯二位雅富卿。權大副二位兼雄卿とをめて水火のまよき同し事なりやと  
えせおのしましける。雅富卿のともよまよきよしを奏す。兼雄卿の水のまよき。火のまよ  
からむとまりす。かさねてそのいれを奏すべきよし仰せられける。火は清織あり。水  
は清織なし。これ火は水のまさりて。まよきゆゑと申したりとぞ

同帝被爲造竹臺事

同じみかど元文五年五月。竹臺のかたを常の御所の西庭先につくりたてられて。和歌

御會などありき。寛政の内裏の。中殿のまよか竹。くれたけかげをならべてたてら  
れし。わたりぬ。珉山のながれ。みなもとにさかづきをうかべてあそぶべく。江津のい  
たりて。舟をならべ風をさげざれば。またるべからむのたくひなるべし

同帝御時被修記録所事

これも同じみかど寛保のこしめ。記録所として。小御所の面よかたのごとくの所有りける  
を。さらよしつらぬ。御座なども設けらる。障子の繪の畫所の預光芳よ仰せられて。時  
のうたよみ。名所のうたどもたてまつらしめ。その心をもて。かしさまふ色紙形。是一乘  
院入道尊昭親王清書を。又東の庭は梅をうゑられ。和歌を講せらる。題は梅有春色とかや。  
寛保二年さらざの事なり。天明の火はけうせ侍りぬ

同帝愛典侍資子事

昔のすけ資子の。故一位資時卿のむすめなり。かたちことようるこしく心ばへも人よを  
ぐれて。同じひじりのみかどのおほいとはしみふかく。またなきものよおほしおきて  
たりし。延享二年葉月の末つかた。こちあづらひ十八歳よてうせぬ。その長月は從三  
位を贈らる。風記よて消患宣下を本宣下あり。上卿を故殿光綱よていまだかりぬ。宣命を大



内記爲範朝臣例よりて草せしよ。いくたびとなく。御覽じまでさせたまひければ。心も  
となくのちおもひけれど。あしたの詞をつくりて。帝涙屢滴宸襟。利衰戀轉倍。厭慮須殊。皇女  
多等降誕無利志止。深久悼美。惜給布奈。と草せしよ。御ころよかなひけん。清書すべきよしを  
仰せられきとぞ

中御門院感押小路前中納言實岑和歌

元文二年ささらぎ十三日。院中御門院よて和歌當座御會ありしよ。押小路前宰相實岑卿不逢  
戀といへることを

もがみ川逢瀬の猶もいな舟の。いなとむかりよ過ぎ行くのうし。院この日御敷を實岑卿  
よたまふ

もがみ川いまだのぶらんいな舟の。いなとむかりよまでもおかまし

すなをち禁裏千時上よ櫻町院仰せられて。同じき廿一日。權中納言よ任せらる。そのころの美  
談よて。中御門院の和歌一首をも。あだよ見そなりしめおとしまさぬ事と。世の人あふざ  
しとぞ。さて實岑卿といさゝかかゝる心ありて。詠せしよあらをと。かたく辭し申しける  
となむ。今の人ならむ。よし心なく詠をとも。かゝる厭感をかうぶり。つかさなどたまて

らむとならむ。心ありて詠せしとやいこむ。古語よも若仁なる時の臣直しとぞ。このこ  
とよや

櫻町院開食筥聲令賜和歌於故殿事

櫻町院のすべらき元文五年八月十四日。御小座しきよて月を御覽じけるよ。東よあたり  
て筥のねきこえければ。故殿よてやおとまらん。歌よみてつかさをべきよし。冷泉三位爲  
村の御前よさむらひしよ仰あり。とりあへむ。歌をおくらる

秋のよの月よきこえて雲井まで。まみのぼる筥の聲もさやけし

この筥。故殿よてのちおしまさきりけれむ。後日そのよしをを奏し給ひけるとぞ。たゞし  
御返歌もありしやらん。御記よももれ。又爲村卿の集よものせざるよしきよ侍るなり

同帝右中將重熙彈正少弼氏榮等事

同じみかど右中將重熙のうるこしきと。彈正少弼氏榮のきよらかなるとを花紅葉と仰  
ありて。めでおしましきけるとよ。重熙朝臣の寵遇ことよあつかりけれむ。のちよ權  
勢もありしなり。周大王の君子なるも。色をこのみて。その妃を愛し。漢の文帝の賢なる  
も。鄧通を寵して。蜀の銅山をあたへしたぐひなるべし。およそ民とよもよするときと。色



をこのみ。だからを愛するも。王者なりと。孟子よもとけるならむや

中御門院重清二位宣通事

伏原故二位宣通卿は。させる學才もあらざりけれども。中御門院御讀の師よて。ことの外  
重んぜられ。直衣などもゆり。又林和靖の繪の間よ供すべきよしなど仰せらる。此間うちか  
る人の儀也これの内々の事をがら。例なき事のよしきよおよびぬ。往古侍讀の人。清涼殿よ  
りまがへるの時。殿上人×××とするの例などよもかなひこべらん。いみじき事なり

桃園院恩顧事

甘露寺前大納言篤長卿。童のあひだ桃園院めしつかひさせ給ふ。近代見二人内々うちよめしかの  
つる例なり。院よもありちごいとあてよらうたけなりだれば。人しれむ心をかけ。□をいかにまきこしめしけん。と  
のあしける夜。人しづめて。かの兒きたりて。まめやかよかたらふほどよ。時義をこかりし  
よ。内へ厭慮よてまたれりとをむ。あるの御前よて。ものなどたぶるよも。かの兒よわが  
前をやくわよなど。御氣色ありしとかや。予微弱のあひだといへども。恩顧身よあまれり。  
和歌もいまだ師をさだめざるうちよ。内々御常座のときめさる。蹴鞠も同じく御あひて  
よまわりぬ。高倉流の紅葉を折りし□□のよ風流ありと仰せられけんためしも。おもひ

出で、かしまりぬ

桃園院御學問事

清二位宣條卿つねよかたられし。桃園院の御學問。後光明院このかたの事よておひ  
しまをなり。されど易の口傳まで申しいれしとぞ。後光明院の後。この事をしとの給ひま

櫻町院和歌御堪能事

太神宮御奉納の御うたよ。春曙といへる事を。櫻町院のよませ給ひける

宮川や千木たつかやが軒見えて。杉村かまむ春の曙

いせよ参りしもの。この御製よまこしもかゝる所なし。見をなにしめ給ふこともなく。自  
然よ厭心の通る所を感じけるとなり。つらくあんするよ。此御うたの御堪能むかり  
の事ともおもこれむ。天智天皇の「秋の田のかりほの庵の」とよませ給ひしよ。騁驛とし  
て。萬乗の天子よあらむして。たれか歌せん。拜吟をるごとよ。ひじりのみかどよぞおもひ  
侍る

桃園院御鞠事

桃園院の御まりぬ。ことよをぐれておひしましける。時のまりあし皆及ばむ。後鳥羽院こ



のかたと人いへり。のちよかんがふるよ。後伏見院も御上手よてあり。其後の御堪能の沙汰をさかむ。十五六七歳のあひだ。御うちまりよ。御あひ手よ参りて。御ふるまひを見たてまつりしよ。くわしき事しらざれども。難波宗建卿飛鳥井雅香卿などのごときさわがしきものよあらむ。御まりの拍子ゆるやかよ。御あしなどのひきよて。その後もたえて見る事なし

雁再活事

同じみかどの御時。一條前關白道香公雁をたてまつらる。まなこら龍池よて立ちあかる。この雁外より前關白もらひて。庖丁せんとして。まつ膳もおかくよぞ。せいしてとひあるきけるゆゑよ。めづらしきとなれば。たてまつるよし奏せられぬ。寶曆九十年のあひだのことなり

怪鳥啼宮中事

安永三年卯月なむまかり。まだ宵のことなりしよ。夜の御殿のうへよ。手車をひく音して。いとおどろしく。後桃園のみかどきこしめし。あやしみおどろかせ給ふ。女房殿上人なども。あともこさまへむ。いかなる故ならんと恐れあひぬ。御めのこのころきよた

るが。御庭よいで。御殿のうへを見やりたるよ。鳩ほどの鳥。夜のおとゞの棟かこらのうへよ。あたり。月のころなれば。よく見ゆ毛の色いむかきとぞ。あやし見あたるよ。南をさしてとびけれむ。あやしきひびきたちまちよやみけるよぞ。かの鳥の聲とらえられけるとなむ。後日御前よまわりけるよ。くこしく勅語あり。程へて或人かたりし。東山若王寺の深林よ。うめきとりとなづけて。たましくなく事ありとぞ。いづれあやしき事なれば。内々上臈局忠子朝臣姉きをもて。内々御祈あるべきよし申し入れしも。うちおかれむ。御沙汰ありしなり

禁中無齋賜事付子規事

後桃園院仰せられける。禁中よとかけといふ虫ままむと。かねてきこしめしけるよ。安永七年の春。御庭よめづらしく御覽む。又去年の夏。女御御方の内へ渡御ありしよ。子規の木よあしを。間近く御覽せらるとぞ。この鳥。宮中よ集まる事。このまじからむ。ともよめづらしき事なり。このみかど御徳もいみじくましますしよ。御代又しXXXXXX

彈正尹直仁親王蹴鞠堪能事

閑院故彈正尹直仁親王東山院の。まりの上手よて。ささへこけ行くまりをもすくひかへしあげられけると。故殿仰せられま



同親王説鞠事

同じころ。源三位廣仲卿もよきまり足なりけり。難波前大納言宗建卿と。たち合ひてける。廣仲卿ふたつむかりあぐるうち。大かた宗建卿とられぬ。やまからむおもひて。直仁親王家に参りて。宗建卿を上手のやうにいへども。人のまりをとるいかでか法よこべらんと申しければ。親王こたへられける。人よまりをわたへぬうち。人よとらる。大かたまりの身よ遠きゆゑなり。とらるまじとおもそ。身よちかくけるべきよし申されければ。答ふる。詞なかりきとぞ。御前大納言隆重卿のかたられしなり。

土御門里内小御所庭作事

土御門里内小御所御庭。寶永火事後。醫師素仙といふものなどつくれりとさけり。たしかならざれば。かさねてたづぬべし。ことし寛政九年又池をひろめ。そしをそへられぬとぞ。これに植木をあきなふもの。立ちよりて。つくりぬるなり。日野大納言資矩卿内々申沙汰よて口入せりとむ。

櫻町仙洞及庭作事

櫻町仙洞當時院御所この地。天正十四年正親町院御護位のうち。仙洞よちひられし地。

て。代々の洞裏たり。櫻町のみかと御脱履あらんとて。この地は仙居をつくられ。延享四年二月廿八日。この後櫻町殿と稱すべきよし仰せらる。元のたりの御所といひて。地名のさなたとぞ。さて此御庭のきりめてよしあるつくりざまよて。心をつくせる事。なべての庭のおよぶ所はあらず。近衛准后内前公仰せられし。太政大臣秀吉公のつくれる庭なりとぞ。のちよその頃の日記をかにかふる。秀吉公繩張りなどみづからいとなまれし事など見ゆれば。さもあるべし。その比名をえし庭つくりをよせて。このまれし事とぞおぼゆる。

近衛准后内前公被召飼糺於庭池事付被築庭事

近衛殿今出川の第の庭。延寶の火のうち。應田満院前關白基庶公のこのみつくられしとぞ。故准后内前公かたり給ひしなり。この庭の地水よて。天明三年の事をりし。糺飼舟をまうけられて。見物をべきよし。かねて内前公仰せ合されし。まあるとて見侍りぬ。河よて見れば。今一入の興ならんと覺えぬ。むかしは大井川などちかき所も有りけん。今の美濃尾張などのみよてのこれりとなん。このうかひ人も。尾張よりきたれりとぞ。

九條准后尚實公天造明月樓事

九條故准后尚實公。明和元年于時左府大きなる樓をかひ町の第よつくりられ。清二位宣



條卿の記をかゝせて。明月樓となつく。天明の火のこのところなく焼けうせぬ。この公の漢才ありて。から様なる事をこのみし大臣なり

詠背狩於和歌事

寛延二年九月々次和歌御會。故殿状山といふ事をよみ給ひける

「あかむ猶背狩りくらしかへるさよ。このみをひろふ秋の山ぶみ。」櫻町院于時上皇仰せられける。内々の和歌より。この後よみ入れてもくるしかるまじくとぞ。それよりこのかた。たけがりのことをおほやけとたくしのうたよも。人々よみ侍るなり。又この事をあんむるよ。ふるさ事よて。古今集よも。北山は僧正遍昭とたけがりよ。素性法師のまかられける事見えたり。假西院天和三年八月秋の山といへる事をよませ給ひける「またもこんけふいもみちを松かねよたけかりくらす秋の山ぶみ」

桃園流二宮貞行親王

伏見殿七歳和歌事 付今失明給事

桃園院の二の宮。さたゆきのみこと。いとけなくおのしませる時より。两眼ともようしなこせ給ひぬ。そのさしく何事よつけてもかしこくましませし事。いふむかりなし。なつこの時。雁のこゑをさかせ給ひて

いく里をこえてまつらん秋のよの。さやけき月よまたるかりかね

二の宮。明和九年十四歳よて薨ぜられぬ。崇徳院の二の宮むまれ給ふとしより。两眼見え給て。大治四年閏四月六歳よて薨ぜられけるよし。中御門右大臣宗忠公の記は見えたり

仁和寺入道一品深仁親王自切取敬事

付菩提院榮通僧正事

菩提院前大僧正榮通。長者もへし人ながら。才學うとく。年よるまでけんやくをもととして。召しつかふ人も。ひとりふたりよすぎむ。財をつみて。寺の修葺などねんころよいとをみ。又手をから草などをひきて。日をおくり。嚴寒といへども。ひとり一つの外の寺よおかすとなん。仁和寺深仁親王をさなくて得度あり。この僧正戒師成りければ。宮ならびの岡の坊よはじめたり給ひけるよ。庭を見給ひて。青苔ひらよあつふしてと口をさみ給ひけるとぞ。權僧正覺通後よかたりける

仁和寺入道一品深仁親王再號伽藍事

付自雙岡移比事

後南御室覺深親王。今の伽藍をこじめ。再興せられんとて。大猷院贈太政大臣家光公よ所望ありけるよ。寛永十一年たちまち許容あり。それより經營としをかさね。正保三年よ雙岡の邊より北へわたましありて。今よ火災もなく。いとをこそかなり。この後。ならびの岡



のほとりをふせ御所といふなり

### 渡唐天神畫感將事

渡唐天神の御影として世にあり。いかなるいそれよや。いぶかしくおもひ侍る。まかるよ。寶慈院故周琮禪尼いもう樹の下の寺よ。もちつたふるの道遙院入道前内大臣實隆公の畫なり。紅梅の枝をもちて。書さかくられしよし。くわしくあるし。紀そへり。周琮禪尼よかりて。うつしおかましとおもひけるうちよ。世をそやくせられぬ。その後。住持の尼もかそりて。折をえて天明八年の火よ。寺もやけぬときよ。とぶらひしよ。かの御影の事なり。くらよ火入りて。文書の類みなやけぬ。そのうちよや侍りけむあらむ。それよりちかき先師周琮禪尼の書さおかれし經類など。ひとつもとりいでせやけぬるよしかたりぬ。あまり便なくおぼえて。周琮禪尼の書かれしものなど見いで。佛具などをなへてつかとしぬ。さてことし元政。それから。高雄山の寬暹法師のうたせし靈像よ。頓阿法師の讚かけるを感得しぬ。先年道遙院の畫見及びし。よ。すこしもたぬせむ。讚よいとく。異國の人。天神の御影を夢中よ感ぜしまよ。うつして渡せしを。寬暹法師うつしよ。讚をとて詩をのせり。貞和二年秋とあり。これよよて。ふしんををらしぬ。あんむるよ。異國よりきたしよといへるも。およそ其比の事ならんかし

### 同天神事才學

入道長親卿花山院流。但南朝。後出家號料世。兩聖記よ。むかし無準和尚號私鏡異國の經山よをみけるよ。日本の管丞相となのりて。受衣ありける。其かたちをうつしけりとぞ。また明德の比。釋の月溪伏見殿よて。夢よ管丞相を見侍りけるよ。からの服をつけ給ひける。その御かたち。無準の異願よて。うつしおく御影よまこしもたかぬをとなん。又後十輪院前内大臣通村公の宇治興聖禪寺記よ。先年新院明正院勅筆の渡唐天神の讚を納めらるよといへり

### 呪厭凶夢丑未札事

いま春日の御やしる。廻麻みづがきのあたりよ。丑ひつじと紙よかきて。多くおせり。これに奈良の人。夢見の心よさゝるととき。かきておせばさざひをまぬかるよまじなひと。ひつたへてくる事なり。御驗記などよもこのまじなひのふたを繪ようつしてとべれば。ふるき事なるべし。この事春日社よにかきるべからむ。御門かたよても。凶夢とおもそん時。このふだをちかきあたりの社よも押すべきなりと。人よもをしへ侍りしなり

### 春日御驗記事

春日御驗記二十卷。繪所のあづかり右近の大夫將監高階の隆兼がかけるよ。封書に圓



光院前關白基忠公。後照念院攝政冬基卿。一乘院長位僧正あてせて父子四人。他人をまじへむかきて。延慶二年奉納せられしなり。近頃聖護院のかり皇居がり土御門新内裏遷幸のとき。馬くら弓やなく。ぬくさくの調度などことよきたありし。此繪よりて。多く再興せられ。時の關白輔平公といひ。又この繪ちかごろ勸修寺大納言經逸卿のもとあり。遷幸の傳奏ぞんし。かた／＼時よあひしといふべし

近代社寺文書等分散事

近頃の神社。佛寺よふかくよりつたそれる縁起文書なども。うつすとしてとりいで。こてのがねのかとりよ。ながく人の家のたからとなる。なげくべき事なり

東福門院御簪事

東福門院の御かんざしとして。當家よもちつたふるあり。こがねよてつくり。うへよ三色のたまをつつみつけたり。安永年中そのかたよよて。じろがねよてつくりしめ。三色のたまをいれて。家内のものよさゝしむ。内院の女房。ある友なふ人々など聞きおよび。所望ありてつかとしぬ。されば玉えがたまよよりて。つくりしむる事かたし。そのうへ。これいやしさものよさすかんざしよのあらざるべし。のち／＼心をうつし。世間の人の。専保の

はじめまでのごとく。花すゝきなどのみよかきなきかんざしをさきまべし。この玉のかんざし。あるものしりがほなる人ひとよかたりていふ。かんざしよ玉いること。いよしへいなき事なるべし。所見なしと。此事ちかき書よあり。古今和歌集第七のまきの詞書よ。五節のあしたかんざしの玉のおちたりけるを。たがならんとたふとびて。河原の左大臣のよめる。ぬしやたれとへどしら玉いなくよ。さらばなべてやあわれとおもはん

世俗簪造始事

或人かたられし。今の世。をうなのさすかんざし。専保のはじめまでのなかりけりとぞ。それよりかんがふるよ。繪草紙などを見るよも。その頃までの。かんざし髪搔のたくひをすべてさゝす。しかればちか比の物なるべし。又ふるき人のものがたりをさくよ。専保の比までの。女のことなどもなごの花きゝきなどのかたしたる白銀のかんざしをさしけり。まかるよ御厨子影故若狭守宗直よかゝりしより。好事のものよて。みよかきをそのこなのうへよつけてつくりしめ。かんざしみよかき。通用たよりありと思ひて。人よかくりしよ。たよりあるものなれば。よろこびてまだいよつくりそへ。色々このみをくそへ。今の貴賤となく。ちろがねよてつくりて。さしもてあそぶ事よなれり。それかんざし。髪のかざ



り。みゝかき理髪の具のうちなり。そのへたてをささまへむ。たかき人の用ひらるゝのくちをしき事なり。宗直の時の興よてやつくられしならん。志からざれば遠きおもんてかりなしとやいふべし。

若狭守紀宗直朝臣事

かの若狭守紀宗直朝臣の才學あるものなり。寶名類聚といへる書をつくりける。類本もあらざりければ。天明の火もやけうせて。名のみつたふるなり。このもの清涼殿。紫宸殿のくこしき圖を。ふるき文書よりて。かんかへつくれり。裏松入道右少辨光世の法名門弟として。かの兩圖ももつけて。近比の内裏の口入してつくらしむ。開院里内をうつされしとや。

入道國評の  
大内兼國考  
證の作者を

伊呂波興加京字事

よの人いろこの手本をかくよ。京の字をおくよとふ。ちかごろの俗事と。皆人あらふめり。此事康長が撰びし通用古紙といふ書に見ゆ。康長の明應。應永ごろの人と見ゆ。氏系かんかふべし。順の和名抄よつぎたる才學ある秘書なり。世俗の事も。みだりよなんをべからむと。先人故一位殿つねく仰せられしなり。又頼阿法師の高野日記も。京の字をいろはのおくよくとへて。四十八字のうた

を詠せしなり

當家念誦堂事

寶永の火。當家中筋の第もやけぬ。敷地の北さま念誦堂ありて。本尊あみだ佛。ふるくよりつたこれる木像とむ。これもとりのけえをやけぬ。曾祖一位殿ことよをしみ給ひしとど。その後念誦堂もなきなり。曆應のころ。梅寮すけあきの第をつくりみかゝれし時。立てられしあとして。萬治の火のまへより。中筋の第の念誦堂ありけり。玉葉承安三年十二月。月輪攝政兼寶公。民部卿入道殿すけあき。日野下莊の持佛堂を見られし事をあるされしなり。

當家植柳事

寶永の火までの。當家中筋の敷地。東面五十間むかりもありし。東のかたの築地のほとりよ。いと大きな柳ありて。梨木町よおほひ葉のしける比の。日をもちらさで。おのづからひるもをぐらく。よるの蜘蛛の火のあかりかりするとして。子どもなどおそれけるとぞ。同じ七月二日の大風。東のかたよたをれぬ。十丈もあまれる木なりければ。枝のやがて京極通よおよぶとなむ。さて當家よ。室町のかみ柳原よ。梅寮すけあきの第のすけあきをたてら



れしゆかりとて。居所をかふるよも。かならむ柳をううるよし。曾祖一位殿仰せられきと  
なん。今の第すかすかよも。やなぎ数株あり。去年寛政四年岡崎一新第をつくらしめしよも。柳をう  
ゑおかしめぬ

當家紅梅古樹事

寶曆の末までの。當家西の庭に。紅梅の古樹あり。花もうるはしく。たかさ一丈あまりよ  
て。南北よさしひろがりたる枝九間よあまれり。木のもとにふたかへむかりなり。この  
木萬治四年火のとき。若木よてやけのこり。又寶永の火よ。枝のやけぬといへども。かれを  
して。ふたへびまげりけるゆゑ。火よけのむめと人いひならせせり。まかるよしをしをへて  
次第よかれとて。あつかよもとつ枝のそなのみぞ。むかしの春をのこまらんといとほし  
みも。ふかへりけるよ時きたりけるよ。天明の火よ。のころところなく。やけうせぬ。お  
よそ百三十年むかりの木なりけんかし

當家猫靈神事

付不入育女  
が當家中

いつの比よ。猫の怪異とて。よろしからぬ事のみうちつまさける。當家の青侍ふるさね  
こをころすといふよよりて。曩祖あんむるよ。彼の安葬との  
深光の神か 驗者よ仰せ合され。かの靈を當

家守護神のやしろ地より。第二のうちに勧請せられ。猫靈と號す。これよよりて當家よ  
猫をころす事を制すべしといひつたふるなり。また故殿光つな  
の神 仰せられしよ。當家よ盲  
女を召し入るゝことをせむ。この子細つよ  
ひらかからむ ある時門をあやまちて。入る事のありしよ。不便  
の事ありとぞ

當家書府事

萬治四年の火よ。當家文書のくら板くらあり。古  
代のものぞ 北の敷地よありけるがやけぬ。書ども少  
々とのくといへども。火急よしてのころ十の一よ及む。曩祖兵部卿殿俊吉  
の神 一流の文書を梅寮どのすけあき  
らの神 につたへしめ給ふ所よて。たびくの兵亂よあひしかと  
もおよそつかなくもちつたへたるを。大かたようしなひぬ。なけくよも猶あまりあり。  
この外。身の具ふるま調度などいふもさらなり。その後。寶永の火よも。くら一宇やけぬ。  
又文書をうしなひぬ。天明の火よこそ。五箇所のくら一宇もやけむ。文書一卷もやきうし  
なとす。ひとへは祖神の加護とおほえ侍るなり

當家辨財天事

辨財天の。當家鎮守の地より第三のやしろよおかしまして。代々信じきたるなり。殊よ高



祖一位殿の尊親御信ありて。さまぐの御願書なども。いまよをさまれるなり。予十六歳のときなり。信じたてまつるよ。そこからをも弘法大師のうつされし御影大黒毘沙門十童子あり。或人のもちつたふるを。おくりぬ。のちよ其米院前大僧正宥證のちよ特証。見せしよ。偈仰をく。なからむ。凡。居毘沙立辨といひて。辨財天の立像にまれよして。靈像なり。此像たち給ふよ。又さまよおのす毘沙門居像なり。よのつねのものよあらず。秘藏し信仰をべきよしかたられき。又その後ほとへて。東寺或院よもちつたられる。三面地形の辨天の靈圖まんなうのじときものあり。これも弘法大師の圖せらるゝところといひつたふるあり。子細ありて。またゆづりをうく。この御影に。秘密の事よて。大かたの僧徒などしるものなしとぞ。當家よ年中三度正月五月九月。真言の行者を請じて。一印法を修せしむ。子孫よいたりても。ゆめくそりやくあるべからざるよし申しおくなり。

廣橋家辨財天事

廣橋家の辨財天に秘佛として。厨子よ封じて。くらよ納めてあるなり。故儀同三司兼胤公。この外の信仰にせられけれども。つひよ拜見せせとなん。たよし予ひそかよきよつたへたることあり。たけ四寸をかり。毘沙門。大黒。十五童子おのくたけ二寸をかりよて。岩のほらのうちよおのまとぞ。佛師のつくりしよのあらむ。驗者の作ならんといへり。

當家中筋敷地事

當家中筋のしきちの瑞光院。贈儀同殿の養女かめの方の八幡の御宿清水加賀守宗清のむすめをまあり。或は田中坊のむすめともいふれしところなり。當家一條室町の敷地荒廢の後。この所を贈太政大臣家康衆所望ありて。を照權現みつたへきたれるとぞ。それゆゑ此地に公家より賜ふ地よあらむ。又もとめえし所よあらむ。されば享保のそじめよも。寛政元年よも。この事たづねられしとき。注しいだしよなり。龜のかたに太政大臣家康室よて。尾張大納言頼宣卿の母ときくところなり。

天明火後小佛敷兩現中筋築焼跡事

天明八年の火後。當家中筋の築の灰のうちより。五分をかりのかなぶつをひとつふたつひろひしものありて。岡崎の別荘よもてきたり。所持のほとけよと申しよ。かつて見しらぬ佛なれば。いとふしんなる事なり。よくくたづねよといひつかれし。又こと人をもさがしもとめよつかれし。まかると日あらむして。數多のほとけをしき地よえたり。見ると同じほどのかなぶつなり。又ふるさかとの厨子ひとつありて。そのうらよ同じさまなる佛のこりてあり。その厨子のとひらのうちよ。此五體のほとけの名あり。さてその數あるべしと。いよくもとめしむるよ。此三體のつゝがなくのこり。二體の絶して全か



らすといへども。つひは皆いでぬ。佛師をめて見せしむる。弘法大師の作られしほとけといへり。いとふしきなる事なれば。あしたは厨子をつくらしめ。當家はあんちせしむるなり。さればかの大火の日。ことの外の烈風にてありしかば。いつかたその佛堂の火のうち。紙の厨子は小佛をいれながら。空はあけ。風はさそひて。當家は落ちりしなるべしと。皆人申し侍りしなり。

當家古人形事

當家はふるくよりもちつたられる人形あり。兒の座せるかたちにて。一尺むかりなり。編北となづく。靈ありといひつたふるなり。明和七年の比ひてりるとき。紫竹村の領所の百姓雨こひのため。かの人形をかりたまよし申すより。かいつかこしぬ。これに先代より。ひでりのときかりて雨乞して。雨ふりし例あるゆゑなりとぞ。このこと高祖資ゆき曾祖すけかなどの御時すけかや。くとしく忘れがたし。明和のなかしけれども雨ふらむ。さて此人形いもうと故光子日野大納言資矩室かりたまよし申さるゝより。かこたしぬ。志かるは程なくうせられ侍りて。その後もとめつからす。いつちよや入りまざれけん。みえずとなん。もとより志ひて益なきものながら。ふるくつたされるものうせける。ねんなくぞおほ

ゆる

造念誦堂於當家事

寛政七年やよひむかり。當家中筋の筈。東のかたは築地をへて。念誦堂をつくらしむ。み六帖はかり程なり。本尊大日如來昭土。地藏觀音を安置し。又先祖代々の靈位をかげどのよ。予みづから書きてまつるなり。さて本尊大日。先年ある僧の本よりもとめえぬ。もと清和院はありし像なり。二百年むかりのものといふ。木にて作れる座像なり。地藏觀音は。内山の上乗院亮觀僧印よりもらひし。いこれある靈像なり。おのく五百年よりこのかたのことよあらむ。

弄蜘蛛語

土御門故二位泰邦卿かたられける。享保のはじめ。世は蠅とりくもとかやいふ虫をもてあそぶ事あり。風流なるちいさき筒に入れて。蠅のいる所へとこせてとらしむ。一尺二尺なと遠くとふをもて。最上とま。よくとぶ蜘蛛。あまたのこがねをかへて。あらそひもとのめ。蜘蛛をして。博奕は及ぶのあいだ。武家より制してやめしむとぞ。世はゆづらしきもてあそびもありけるなり。



桂猪老士語

前左將監藤原武盛入道家人村田かたりし口。寶永のこじめつかた。相國寺のあたりよ。としよるまで劍術ををしへて。世を渡る士あり。たけもひさくやせからびたりければ。いかよもさせるこごもあらざるよし。人いひあへり。まかるよ。かの士あきとくおきて。かどよたゝをみけるよ。そこからすも。手負けるあら猪のかけきたり。よぐべきやうもあらざりければ。もたる枝よて一打ようちけるよ。枝よほそかりければ。ふたつよ折れけり。おのまゝにかしらの骨をうちくだかれ。つひよたふれぬ。これを見て。日ごろ心ゆかおもひけるものも。今かく年老いても。年采の習練むなしからざる事を感じせしとなり

通鳥語女語

前對馬守藤原祐良家人かたりける口。萬里小路前大納言尚房卿としひさしくつかれるける女の。鳥のこゑをよくきゝゝあるよし。かねて聞きおき侍りしよ。ある日。かの家よまゐりて待ちおけるあいたよ。からすのいとうなきければ。かの老女おくの方よりいてきて。あしきからをなきかな。人よけがあやまちあるよこそといひしほどよ。まむしありて。臺所よ。下仕の女の庖丁よて。手のゆびをさりしとて。なきさわく。さてこそかの鳥の音をし

るときゝしよ。つゆたがそざりけりと感せしよこそ。公治長のためしもおもひいでゝ。ふしぎなる事なり

公治長弁百鳥語書事

少納言藤原通憲入道信西の所持の書目録あり。めづらしき書ども多し。そのうちよ。公治長弁百鳥語一卷とあるせり。むかしのかゝる書も。わが國よとたりけむ。今人の國よものこりしや。さかまほし

見異鳥於山中事

天明いつゝのとし彌生をかり。かれこれとなびくしらびを折りよ。如意がたけよのほり。いざやこの山のおなたなる湖をながめんとて。峯いつゝむつむかりもよぢけるとおもふよ。比巴のうみひろくみゆ。人と興じて。まむしやまらんとあるよ。あこひ六十間むかりへだてゝ。山のかたをらよ。むろの木ひさゝまげりひろこりたるうへよ。いと大きな黒きとりままるぬ。からまよよくよて。よついつゝむかりもあこせたらんほど大きよみゆ。ともなるものゝうちよ見よけてこんとて。三十間むかりちかよるうちよ。とびさりぬ。つむさひろげしきまなど。いかなる鳥ともままへがたし。吉野拾遺物語中。くろき怪鳥



いでしことあるせり。いかさまよのつねの鳥よあらじといふよ。皆人おそれていそまかへりぬ

見せむやといふ草名語

故民部卿入道爲村卿かたられし。今世見せむやといへるくさ鎮火をうゑるもてあそぶ。これわかの卿の父大納言爲久卿の和歌の門第。吉野山の法師よてあなるが。與山よて見侍りしくさとて。和歌をそへて贈りし。そのうたの句。君よみせむやとの詞あり。これよよりて。見せむやとなつけおくよし。爲村卿の返事ありしを。たしかよみられけるとなむ

翹瀉をだまき草事

松前よりちかき海中。小島といふ所あり。その所。おたまき草檜斗といふくさの。るりの色よさけるあり。そのたねを安永中。たかの入道中將隆朝臣のもとへ。松前守護のものよふよりかくりしをうゑて。近ごろ世よ多くなれり。故主殿權助佐伯職朝臣の第。蘭山といひて。博識のものあり。このくさ世よしれぬうち。見せける人のありしが。いづかたよりきたれるやらんめづらしき草なりといふ。たづぬる人しらむといへりければ。

つら／＼をほ見て。この色の海邊よ生むるなるべし。花の色を見るよ。東國のものならんといへり。その道をえし人の見るところ。いさ／＼かたぬざりけりと。見せし人大よ感ぜしなり

右少將公風兼美丈夫事

裏築地少將公風の。やごとなくうるこしく。男女老若よらむ。めでまどひけり。参内の日などをこかりて。ちまたよいで／＼まち見る人もありしとぞ。元文三年よたちよて。四位よものぼらむせぬ。これの戀ひしたる人々の。執念つけるよやと。人いへりけるとなん。この人十五歳まで。中御門院在時のちごよてめしつかこれけるよ。いとめづらかなるわらひすがたよて。女房などよ多く心をうごかし。なよとなく内もそう／＼しくて。時義よもか／＼りけるとぞ。術の彌子瀬漬の董賢よも。劣るまじきよそほひよやありけん

毒虫醫時藥物事

蝮蛇のさせしよ。しぶかきをすりて。そのふちよりちぬれば。その外よこれたらむ。次第よせまくぬるよ。毒刺おのづからぬけいづとぞ。柿なきとき。しぶをぬりて。これよ用ふとなむ。又こせうの務を帯ぶれば。そみちよよらすといへり。むかてのさまよのよと



りの糞をつく。蜂のさすよいもの葉の莖をつく。皆妙なりとなん。心得べき事

近江水虎語

近江なりけるものゝかたりし。湖水水虎俗よかいたらう。あるひにかつておどいふなりよかいらあるいかとこかし。又いよふけて。人の門戸よきたりて。人をよびなどするなり。これをさぐるよの麻からをおけばきたらむ。又さよけ大角をいむ。これを帯ぶる人よちかよらむ。又舟よ鱧をかくるも。これをさくるまじなひといへり

肥前水虎語

肥前のしまばらの社司某かたりていふ。かの國よかいたらう多くあり。年よ一兩度ばかりの。かならず人を海中よ引き入れて。精血をすひてのち。かたちをかならむかへすなり。いかなるものゝさとりしめけるやらん。かの亡屍を棺よ入れむ。葬らむ。たゞ板のうへよのせ。草庵をむまびて取り入れかならむしも香花をそなへむおけむ。この屍のくつるあいたよ。かの人をとりしかいたらうの身體らん壞して。おのづから斃る。まらざればかこたらう人間の手よとらふべきものよあらず。いそんや。いづれのとりしといふ事をもまりがたし。いと奇術なりとぞ。かこたらう身のらんゑせるあいた。かの死がいをおくや

のほとりを。かなしみなきめぐる。人そのかたちを見む。たゞこゑをきくとなん。もしあやまちて香花をそなへしむれば。かいたらうかの香花をとりかへり。食むれば。その身らんゑせむといへり。棺よ入れ葬れば。これも斃るゝよおよばむとぞ。およそ。かいたらう身をかくを術をえて。死せざれば。見る事あたそむ。多力よして茲惡の水獸なりといへり

和泉海歌語

和泉よすみし人のかたりける。かいつかの邊りの海邊よ。ときく海坊主とかやいへるものいそちかくよる事ありて。家ごとよ。子どもをいださむ。もしあやまちていづれば。とり□□いひておそる事とぞ。兩三日むかりして沖のかたよかへる。そのかたち人よ似て。大まよ總身くろくうるしのごとし。半身海上よあらそれたちてゆく。かたりしものうしろより見けるゆゑかほをばまらむとぞ

東園前中納言基辰卿家題語

東園前中納言基辰卿のからを丸の家よ。いと大きなるいてうあり。四五十年むかり以前よ。かの家の老女よ。記して館守カクシの神とあがめ。かの木よまめ引きゆひ。供物などそなへて。かりそめよも枝をさらざれば。かげふかくまげりあひて。まことよもうりやうのそみ



しあともいふべし。兼室大納言頼照卿殿上人のころ。その南のとなりなる家をかりて  
すみける。ある夜下仕の女の見えざりければ。そこへとたづねける。かの木のかげ  
のこなたなる庭のうち。息たえてふせり。水あたへくすりなどふくましむる。からう  
じて息いでいふやう。たそがれのころ庭よいでける。となりなるいてうの木のうちへ  
より。大なる男の。かしらにくろぐろあかみたる恐しきかたびきて。かひつかむとおぼえ  
しその後のあらむとぞいひける。二十日あまり熱つよくづらひけれども。なごとも  
なく本復しけり。横川の僧都の。うき舟を見いでけむためしもおもひやらるゝ事こそそ

延暦寺竹林院有兒靈語

山門は行林院といふ坊あり。その内は兒がやといひて。ひらかざる間あり。寶曆七年法華  
會の行事。權右中辨敬明まかりて。かの坊へどりける。家人をしてひそかかとの間  
をひらきこゝろみしむ。うちにくらくてなよまかりける。冷氣身をおそふとおぼえて。  
たちまちかのみのもづらひづき。家へかへると。そのまゝうせぬ。又辨もそれより心地  
たゝならむをみて。その次のとし三月むかりし身まがりぬ。それよりして行事辨登山  
する。此坊は宿まることを用ひむとぞん

日野一位資枝卿家怪異語 土御門里内 唐門西方築

日野一位資枝卿はかゝりしころ。家の子うちよせて。夜ふくるまで酒のみ物がたりしけ  
る。屏風のうしろよそかよあかるく。まそくして人のあゆみくるけそひなりければ。屏  
風のそむより見やりたる。火焰のうちよあかき法師のたちていたりける。人のあるや  
といひけるうち。跡かたなくうせよけり。ある坊主とてかの家へ吉事ある時。いづる  
これならんと。一位のかたられ侍りしなり。吉事のことの心ゆかむ

猿采洛中事

元文二年の春なりしが。いづくよりきたりけん。いと大きなるさるいできて。仙洞。二條  
殿。近衛殿はじめ所々といくといしけり。此とし中御門院。登霞まじく。前關白吉忠公。  
准后前關白家久公など薨せられぬ。當家中筋南のとなり柳筈家へきたり。木のうへよ  
けるを。故殿光つかのも御覽せしよし仰せられき。あるじなりける一位隆成卿も。そのとし  
りせられぬ。およそ。此さるきたれる家の。主人多く事あり。ふしきなりける事とぞ

中山故大納言榮親卿石藥師筈怪異事

延享二年。中山故大納言榮親卿いしやくしの家にて。人の怪異とて。朝よりゆふべまで朝



度の類うごき。また陶器など。かのづから飛びてわれぬ。夜よいれば。あやしき事さらし  
なし。かの祈禱をどせさせけれども。さらしまるしなし。その秋。榮親卿の室。俄よりせら  
れぬ。そのさとしよやと。人いひあへり。およそ。一月あまりまでこのあやしみありて。そ  
の後のかの怪異。烏丸中立賣の毘沙門堂の里坊よりつりしとぞ。そのあくるとし。中御門  
院皇女尊宮。かの里坊よりしばらくおかしませし。彌生をかりなりける。雛のあそびの  
人形とりならべてありける。そのひなども人のごとくわらひけるよおどろかせ給ひ  
て。院御所へ内々わたらせ給ひしと。或人のかたりし

高松前宰相重季卿語

高松前宰相重季卿は近ごろのうたよみなり。新古今集の風體心よかなへりとして。小草紙  
帖をかしらよいたごき。烏帽より引き入れて。院參を見れば。事あれば。烏帽のうちよりと  
りいでて見る。これ此集をふかくあふきたふとぶころなるべしと。人いへり

烏丸入道前大納言光胤卿和歌語

烏丸入道大納言光胤卿。久しく勅勤をかうふり。籠居のうち。月をみて  
さらしなやおむせて山もよそならむ。都の月よなくさまぬ身の

この後ほどへて。勅免ありて。院より仰事ありて。ふたたび和歌の指南などせし。第の  
日野一位資枝卿も。和歌の傳うけし人ながら。歌がらも大きよおとり。ことよ元のことな  
りければ。稽古のうたをかの入道よみせ傳へける。をこたりがちなりければ。入道のも  
とより

のぼるべき高根の遠しまむしとして。やまらふほどよ日やくれぬべし  
といひやりければ。道の勝劣やごとなしといへども。うちこらたちけるとぞ

日野一位資枝卿求和歌傳語

日野一位資枝卿の中納言のころ。有栖川故中務卿職仁親王の姫宮よしのびまありて。あ  
りなくかたらひ申し。この姫宮のつてよて。歌道のつたへを職仁親王よ申しうけぬと。世  
人いひあへり。その事よ。院の流しきもあしかりぬ

醍醐前宰相榮長卿妾醜女語

醍醐前宰相榮長卿あかへりしとき。或ものゝむまめを戀ひたりける。おやなりける  
ものかたきいらへて。ゆるさざりしを。年月をへてやうくよこしらへ。とり入るべく  
なりしほどよ。かの女瘡瘡とづらひて。かたち大きよみよくなり。ことさら一服しひ。か



たぐへてじめのうるをさしきよ引きかへ。さながら鬼のごとくなりおやなりけるものう  
とましくおもひける。榮長卿をこしもくやめる氣なく。こゝろよくとり入れて。妾よし  
やしなひ。一生をおくらしめぬ。見よくしとしても。丈夫の一言變をべきよあらずといこれ  
しとぞ。たのもしとやいふべき

贈太政大臣吉宗公求萬里鏡於異國語

有徳院の贈太政大臣吉宗公。天文志をみられて。日中は黒子みゆる事あり。本朝よこの事  
なし。日の光輝をなをたしければ。たしかよ視がたし。もし異國よ見るものありやと。紅  
毛國の商客よとしめられ侍りし。萬里鏡といふ物ありて。これよて日を見るよ。ぞ  
んからすといへるたまを目よくへてみされ。天火目よ入りて眼をそこをふといへ  
り。よく心をつくべきよし申して。その後。萬里鏡を貢せしとぞ。いまよ關東よあり。  
土御門故二位泰邦卿の申し請ひて。日月星辰をかめがねよてうかぶれしなり。泰邦  
卿かたられし。ほし三角六角などありて。そらよさがりて見ゆるあまの川の。小星の  
あづまれるなり。日ともえておそろしく。月の波見ゆとぞ。かの萬里鏡の大きなる速目が  
ねよて。七八間もありと聞き侍りしなり

月鐘摩貢琉球驢馬於關東事

付先年貢  
大宛馬事

寛政五年四月十九日。さつまの國より琉球のうさぎ馬を二疋關東よ引かしむ。その時伏  
見をとほりけるを見し人のかたりし。耳ながくしてかたちちいさく。やせたるものな  
りとぞ。推古天皇七年百濟より駱駝一疋。驢一疋を貢まるとみえたり。又萬葉集よ。人まろの  
歌よ

いこま山こたちもみえを散りみだれ。雲のうさきまわた樂しかも

とありたれば。つねの馬をうさぎ馬とよめるよ。おぼつかなし。安永十年。大國の汗血馬  
二疋を。關東へ異國より引かしめ。これもふしみをとほりしを聞きし。たけ五尺あまり  
すくれたる馬よて。まことよ目をおどろかす。見物せし人のたてるうへ。馬の脊ありと  
なん。杜子美が詩よ。胡馬大宛名ありといへるこれなり

宇治橋再造事

寛政五年五月。宇治むし武家の沙汰として。もとの所よつくりあたまぬ。供養の沙汰よ及  
む。後宇多院の御宇弘安九年。西大寺の恩圓上人興正  
普賢再興のとし。去賢曆六年九月洪水  
よ落ちける。その時うさ島の十三重の塔もたふれ。橋姫のやしるもながれぬ。その後。平



等院のあたりより橋をかけて往反せし

六月寒事

寛政五年六月二日。土用中北風ふきてひややかなる事。八九月のごとし。近來たえてきよも及ばぬ事なり。三日むかりよて風も吹きかたり。氣候もなほりぬ。のちよきく。北國よの雪ふりて。うまくもつもれり。越後よの三寸むかりありけりとなん

夏雪事

太平記下。後光嚴院康安元年六月廿二日雪ふりて。寒氣冬のごとしといへり。これにあまたもなき事なり。又後小松院嘉慶二年五月雪ふるとあり。年代記よのせたり。これも同じく所見なき事なり。この兩度。北國などよのあるまじき事よもあらむ。このごろ寛政五年すてよそのためしもあなる。孟子もことくく書を信ぜば書をきよまかすといへり。むべなるかな。さて保元平治物語。盛衰記。太平記などの書。ことよ文筆をもたらよかけるゆゑよ。皆まことし侍れば。大よことたかひぬ。又たよしき文書をもて。引きくらべて用ふれば。見所ありて。すてられむ。書に見る人の才學よよるなり

左大臣輝良公大風日拜賀事

付春日社頭大風事

左大臣輝良公の關白拜賀。寛政三年八月二十日よてありしが。此日羊時むかりより。大風おどろしく吹きいて。殿が屋も大くたふれ。大木をかむよりをれぬ。夜よ入りてもやまざりければ。延引ある事と。人々おもひけるよ。からうじてよふけとげられぬ。粟田關白有衛この關白の時よはあらざるべしいかなる大風雨よもおこたらむ。みのかさよて參られけんためしよのことたかひぬべし。孔子もとき。いかづち風をけしき時。かならむを變をとよかれぬれば。押してこの時出でられしこといかにとど。人いひけり。風近國へたてなにか大和をどのあたりつよく。春日の神木大なる木もたふれ。その外をみくのよのかををあらむ。又故の鳥居ホノヤのたの桂笠木等たつこの事むかりの社家より申しあげけるとど。ちかびを申しあること。時教よかむとど此外卅八所のやしろたふる。神體につがなく。かりやうつしたてまつるとど。又石の燈籠千三百餘たふる。のちよ三百餘願主より修覆して。もとの如くよなれり。のこる千むかりたふれしまよおくよし。社司丹波守延賢朝臣かたられしなり。長者の拜賀の日よあたりて。かゝる怪異ある事。祈禱答文の沙汰よも及ぶべきよ。何の沙汰もなく。また公家よりも仰せられむとなむ

春日五箇屋災事

付安居屋及興福寺塔等災事



同じき年十月。春日のやしろ五箇の屋本殿講屋。瓦の屋。上の屋。黒陰の屋。並の屋。ゆゑなくてやけぬ。このうち西の屋本殿講のくらしも取り入れて。いまは社司のあづかりよてあなるを。このよひくら共本殿講やけかちぬ。又三年寛政四年三月廿九日。春日の安居屋として。後の白川院勅願よて。興福寺のあづかりの所として。人もままぬ所かのづからやけぬ。又ことし三月一日の夜宵とも開き。か。さねて尋ねる。興福寺のうち。享保二年やけのこりし伽藍のうち。東西十二間の堂南北八間これもゆゑなくしてやけぬ。食堂。くさくたづぬ。俗はついでといふとぞ。その火の色ことよあかく。いかなる故と人いひしよ。或ものいふ。これの古代の繪ゆゑなるべしとぞ。これも皆延賢朝臣のものがたりなり。此三ヶ年以來つゝ。南都は變異あり。まかれども。御祈の沙汰よも及むす。これと當社のみのことよあらむ。近比よて神社佛閣の崇敬大ようすくなれり

興福寺享保火事

享保二年正月四日の夜。戌刻むかり興福寺講堂より火いでき。金堂。四金堂。南圓堂。南大門。中門。四廊。西室。北室。中堂。鐘樓。鼓樓。築地不空四端。素觀音。いたるまで焼けぬ。南圓堂の本尊東金堂。五市。北圓堂。のことゆゑなくとりのけたてまつる。その外。本尊ともよほろび侍らじとをむ

食堂。勸學院。細殿。龍殿。三重塔。三谷觀音院。大塔のこりか。その時の天火のやういひけれども。盜賊古金襴のとりをたらむとして。火をつけしとぞ。これも數年へて事あらそれ。刑元享元年行れしとなむ。先年正預故三位延樹卿のかたりし。その前年享保元年冬の本つかた。興福寺よりくちなをかへるのたぐひの虫および。ねむみ。いたちのたぐひのけものおびたしくいで。外へうつりぬ。嚴寒の折ふし。心ゆぬすおもふものも多かりしが。かゝる火のゆゑなりけりと。後よおもひあらしと聞きおき侍りしとぞ

細相家相事

ちか比。細相といふ事。世よとやり。ひとのもたるかたなを見て。貴賤貧富吉凶などのことをいふ。またそのうち。家相とて家のつくりかたを見て。同じく吉凶をのぶ。大かたよいひめづる事もあれども。さのみたしかならむ。ふるき書よ細を相すとある。細の利鈍を見ることなり。いまよく細のめきよまといふよあたれり。家相のこと。異國よて三才圖繪。本朝よての吉日考秘傳など。敷地のかたちよつき吉凶あり。あるは山よむかひ。水より。街よのぞむのたぐひいられあり。いまいふ家相よ。ことかかれり。いかよしけん。又馬牛を相する事。ふかく沙汰ある事なり



兵部卿邦頼親王相劔事

付廣橋前大納言  
伊光卿同トク

兵部卿邦頼親王の。ことゝ劔をこのまれ。よく利鈍および。銘の真偽をどかち。無名の劔の  
うちてを察せらる。又いまの世ゝとやる劔相をもらひえてのべらるとぞ。廣橋前大納  
言伊光卿も。ちか比兩方ともこのみて見らるゝよし。吉凶などもあたるよしと侍りし

式部卿貞朝親王善打劔語

ふしみ式部卿貞朝親王の。落胤にてみそぢばかりまで。鍛冶入りて侍りしを。邦道親王  
薨せられてのち。繼嗣なきより。とり入りて親王とま。さるより。よく劔をきたると  
なむ。この親王心を入れてきたこれしつるぞ。いまふしみ殿あり。先年あづまより本阿  
彌の至りて大い感じ。正宗のつくりし所といふ。古今大い相違せし事なれば。近きものと  
いられし。近きものよてもあれ。このやきは正宗より外よきたふべきものなし。又見及  
ばむといひしなり。かの親王鍛冶入りて侍りしゆゑのみあらむ。まことゝ古来のづ  
らしき上手といひつたふるなり

人相者事

安永中。むさしの國より。長元齋といふ人相者京都きたりぬ。伏見殿その外諸家こゝ

かしこよび入れて見せしむる。まことゝたなごころをさすがごとしとぞ。歸國の後ま  
侍りし。のこり多き事なり。予わかたりしとき。いさゝかならひて侍りし。明にていで  
まし相法全書といふひろくつたえ  
らぬ書なり。文辭。或ときえがたき事どもあり。仲治梅莊といふ南人の  
師もつたへをうけ侍りし。およそ流手を見るも。ハとほりあり。長元齋の傳の。この外  
とまむ

東坊城前大納言綱忠卿讀内辨事

寶曆九年元日節會。内辨右大臣尚實公早出にて。よいか謝座より管大納言綱忠卿これ  
をつゝもとよりかくかきこも。おろそかなりければ。内々きたありて。源大納言重熙卿衣冠  
て参り。みつゝかいとへとして。まじりふちしぬときの人ふたりの内辨としてらひし  
なり。たゞし管家にて。讀内辨のこと。北野の御後とぞ人いひける。その後かんがへ侍りし  
。弘治二年白馬。管中納言長雅卿。白馬渡のち。内辨をつく。この外の所見なし。さてか  
の綱忠卿の。心おろかなる人にて。嗚呼のふるまひつねより多かりしが。めづらかなる例を  
のこしけるなり

本朝變社丹事



わが國よ不たんを愛せしこと。保元以前よりとじまれるなり。崇徳流位よおのじましたりける時。このとをの御歌をよませたまへりけるよ。法性寺關白忠通公の

咲きしより散りてつるまでみしほどよ。花のもとよて二十日へよけり

とよまれしよし。詞花集よ見えたり。その後の靈元院法皇ことよめでおのじましけるよし。たしかよしるせり。この外よとかよおぼえむ

先人令愛同花給事

先人の草花をこのませ給ひて。菊。かきつばた。しやくやくなどうゑさせて御覽む。ことよ牡丹をめでたまひて。多くうゑらる。薔せられしつぎのとし。寶曆十一年このふかみくさこことくかぬぬ。いとふしきなる事なり。ひごろめでさせ給ひしとをくれむ。もとよりおろそかよのなさをといへども。草木こころなきよあらず。おのづから薔せられしをいたみてなるべし

大小菊語

正徳のそじめ大きくといへるものをつくりいで。家ごとよりゑもてあそぶ。そなのおほきさ一尺よも及ぶとぞ。これのかぶろさくといへる菊ありて。そのたねよりまきいで

ひとをむ。又小さくといひて。同じころいたりてちいさきとあるをも。とり合せて賞翫せしなり。その後。明和中よ。中菊といへるものいで。さてめづらかなるをないろくありて。今よせよもてそやそよより。大菊。小菊などいすたれり

難波故前大納言宗建卿菊花語

難波故前大納言宗建卿の。識者の名あり。近衛よて色々の菊どもを見せられけるよ。かつて感心の氣なし。故准后内前公。菊のをかれずやと尋ね仰せられしよ。たれか菊を愛せぬものよべらん。いまの菊のかたわものなれば。めづるよたらむと申しとぞ。内前公ものがたり給ひし



閑窓自語終



閑窓自語終

人姓名考  
准后准三后考



○新井白石小傳

白石名ハ君美字ハ在中初の名ハ瑛又の字ハ濟美白石ハ其の號また紫陽、錦屏山人天齋堂、勿齋等の號ありその先ハ上野の人なり大炊助義無の孫覺義新田二郎と稱し髮を削りて僧となり上野の荒居ニをりぬよりて荒井と稱せしが後ハ新井と改めき父正濟の時ハ土屋利直(久留里侯)ニ筮仕せり正濟人と爲り器達ニして器度あり常ニ藩政を助けて補益おほかりき明暦丁酉の年利直の邸火けぬ正濟も從ひて侯の族内藤政親の柳原邸ニ寄居せり此の時ハ白石生れしかば侯ハ常ニ火兒と呼びきとぞ白石生れながらして岐嶽頼敏三歳の時よく大字を書せり侯其の幼慧を愛して召して膝下ニおきぬある時南部利直(盛岡侯)來りて之を異としていそぐ吾嗣子なし願くハ養ひて子とせんと主人吾が兒ハあらざるを以て之を辭せり六七歳の頃父母と戯劇を觀さてかへりてのち之を語るハ次序一も違ふ所なかりきといふ十歳ニ及びて常ニ侯側ニ給事して文翰を書るハ殆老成の如くなりきとぞ延寶三年侯卒して頼直つげり然るハ無道なりしかば臣其等廢立を謀り之を正濟ニ問ひたるハ正濟可かざりき六年春事發れて頼直臣其等を逐ひたり白石も亦父の此の謀ニ與せるを以て禁錮せられぬ白石この時



年二十三慨然として歎じていそく大丈夫生きて封侯となることを得ずば死して當り閻羅王とならんと常は貧乏安んじて書を読み父と府下は落魄し居を河村瑞軒に借れり瑞軒は府下の豪商として多く書籍を藏せしかば白石就きて借閱せり瑞軒心はその神姿非凡なるを知り其の女に配して以て婿とせんとし其の子をして之を説かしめぬ然れども白石その商人たるをいやしみて遂は從はざりしかば家まをく貧しかりしかど苦學をほ懈らざりき天和二年堀田正俊(古河侯)に仕ひぬをりしも朝鮮の使來聘せしかば白石舊作の詩を輯録し對州の文學西山健甫に托して韓人の改竄を乞ひぬ韓の學士等大に褒賞し序を作りて之を授せり陶情集これなり明年木下貞幹の門に遊び談博を以て稱せられ遂はその高足となりぬ後一故ありて堀田侯を辭せりこの時貧窶甚しく篋中たゞ青錢三百米三斗のみ然れども府下は隱居し意氣少しも挽まざりきとぞ貞幹白石を以て加賀侯に薦めんと志たりきこと一門は加賀の人岡島達字の仲通といふ人ありき感然として白石に告げていそく予笈を負ひて遠遊落魄せると此は數年頃日家信を得たるは老母日よ衰頹し逼り切は歸郷をうながせり余之を念ふ毎は百感心をうごかさぬことなしもし余をして本藩に代はることを得しめばまこと幸

なりと白石その情を察していつく之をゆるし貞幹も亦白石の信あるを嘆美してその言の如くしたりきといふ元禄六年十二月徳川家宣をば甲府にあり白石を辟して儒官とせり白石この時年三十七待遇日よ遅く進講畢る毎は必座をたまひて國家の遺事を説かしめられぬ十四年命を受けて新に列侯譜を撰みぬ七月は草をおこし十月は完成せり其の譜三百三十七家慶長五年にえじまりて延寶八年は終れり凡八十餘年間の沿革備は載せたり藤翰譜これなり寶永元年家宣立ちて將軍の儲嗣となり將は西域に入らんしせり白石間部詮房よりて言ひていづく凡天下の事をば進講せり今亦何をか言ふべき只忘るゝことをなけれは幸甚なりと後家宣詮房につけていそく白石の一言余一日も忘るゝことなしと此の後白石幾もなく召されて侍講たる事藤野の時の如くなりき六年家宣繼ぎて將軍となるや祿五百石を賜ひ文學を以て殿中給事せしめ事大小となく必召して之は問ひぬ正徳元年冬十月朝鮮の使來聘せり白石從五位下に叙せられ筑後守となりて其の事を掌りぬ凡釋傳供給の制進見饗賜の儀に關して建白せるはかほむね施行せられざるはなかりき白石かつて冬日林氏を訪ひぬ主人容奇の二字を書して詩を索めたり容奇は雪の國訓なり白石其の意を解し筆をとりて立ち



どころに賦していき

曾下瓊鉉初試雪。紛々五節舞容間。一痕明月芳潭里。幾片落花瀟嶺山。提劍騰臣尋虎跡。捲簾清氏對龍顏。盆梅剪盡能留客。濟得隆冬無限艱。

と一座みなその敬警に服せりまた自肖像に題せる詩に

蒼顏如鐵鬢如銀。紫石稜々電射人。五尺小身潭是膽。明時何用畫麒麟。

といへり老年に及びて門を杜ちて客を謝し日夜典籍を以て樂とし享祿十年五月歿せり年六十九人皆之を痛惜せざるをなかりき白石また蕪ねて阿蘭の學を講ぜりかつて羅馬人および和蘭貢使に就きて見聞せる所を集めて采覽異言西洋紀聞等の書を著せり之を我が國洋學の權輿とて大槻玄澤かつて六物新志をあらとして荷蘭學の草創者なりといへるに亦故なきよあらざるべし著書のあらましを擧ぐれば藩翰譜、經邦禮典、古史通、采覽異言、西洋紀聞、讀史餘論、折焚柴の記、外國通信事略、本朝寶貨通用事略、蝦夷志、南島志、西洋圖說、阿蘭陀風土記、東雅、本朝軍器考等三百餘種なり白石二子あり長子明卿父よつぎて幕府に仕へ次子宜卿とやく卒せりとぞ

## 人名考

新井白石著

本朝の人の名。漢字を用ひられしより此かた。或は文字の音を以てあるし

鸞色雄命など云ふ類なり。後代にて不比等、武智磨などの類また同じ

或は文字の訓を以てあるし

大彦命などいふ類なり。後代にも入鹿、鯨足などの類またおなじ

或は文字の音と訓とを以て併せあるし

吉備津彦の類に。上二字の音なり。下二字の訓なり。後の代にも。藤原の長良など。上の

訓なり。下の音なり

其人々の意の欲する儘にあるしければ。文字の數も定まらむ。

不比等を不史登とあるし。鳥養を又宇合とあるし。長谷雄をまた發昭とあるし。類に。

一人の名を。或は音にてあるし。或は訓にてあるし。なり。○古より本朝の人々の

名をつきしよも。異朝の如く五つの謂ありと見えたり。是等のこと。悉く考へて呈せん



と思ひ。草按をば立て置きしものあり。事長ければこゝよ老るべき  
五十四代の帝。仁明天皇の御時より。始めて今の代の人の如く。多くの文字の訓をとりて。  
二字を用ふる事いなりたり

此事の神皇正統記のみゆ

されば昔の人の用ひし所の。定まれる文字もあらむ。多くの聖經賢傳の文字を取り用ひ  
て。意義ある事共よてありき。世の末ざまなるに隨ひ。文字や々廢れしより。世の人。多く  
の古人の名に用ひし文字のみを取り用ひ。己が名とするほどよ。その名とする所。意義も  
なく。自から文字も定まれる様いなりたり。ましてや近き代より。西域二合の法に倣ひ  
て。二字を合せて一字となし。其一字の幾訓の吉凶を論むる事よのみ成りしかば。俗に名乗  
字を辨す  
といふ人の名。尚々むかしよも似む。あさましき事いなり成りたるなり

右の。名の字に定まれる字と云ふこといあらざる證の一つなり

前よ申しごとく。古より人の名の字。定まれる文字のなかりき。末の世よ至りては。儒家  
の人々の家よ抄し置かれし所の文字もありしよ。文和の初。後光嚴帝の御名字を撰ま  
せられし時よ。成の字を房と訓むる事。名字抄よみえたるよし。管三位在成卿の申し事

以来二品よ叙せられしもの。准大臣可預朝參のよし宣下せられしを。後よ備同三司と  
號するなり。人数も定まらむ。又官よあらざれば。解退などいふ事もなし。前官當官の沙  
汰もなしと見えたり

親王一品二品三品の事

職原抄よみえし所の。皇子の親王よ立ち給ふ事。尋常の例なり。襷袢童體よましますと  
いへども。宣旨を蒙り給ふなり。元服のとき叙品の。當代の後服の親王の三品。自餘の四  
品といふことしるされたり。又道達院殿の御説い。先親王宣下あるとき。初位の心よ  
て。無品よ叙す。其後。或は三品。或は二品よ叙するなり。一品の殊よ執せらるる事なり。  
又無品と申す事。五品よや當り給ふべきと問ひ申しよ。五品よや當り侍らん。四  
品までの位なれば。無品の四品の次とぞ覺え候ひつると答へらる。また親王の位に勿  
論なり。世話よ。二位。三位をも。二品。三品。四品などいふ。唐名のやうよかくの申しな  
らうしけるよしをのたまひき

攝家准三官の始

太政大臣從一位藤原良房

准后准三后考



委しく列し注したる故。こゝに略す

内親王准三宮の始

一品資子内親王

是の六十二代の帝。村上天皇の皇女にて。冷泉院御同腹の御妹にてましますなり。此後内親王よこの宣下あること。連綿たえむ。謹みて按ざる。七十六代近衛院十七歳の御時。かくれ給ひし後。御父鳥羽法皇。近衛の御母美福門院とてかり給ひて。其御腹よ生れ給ひし皇女暲子内親王を帝位よつけ参らせらるべしとありしかど。稱徳天皇のちの。其例久しく絶えたれば。近衛異腹の御兄雅仁親王の二十九歳よならせ給ふを。おして繼體の君よ定めらる。後白河院と申し。是なり。即ち後白河第一宮守仁親王を東宮と定められ。法皇の姫宮暲子内親王を東宮の御養母となさる。是の后よ立たせ給ひし御事もなかりけれど。八條院と申し参らせ。また是を准后とも申し。又暲子の御妹高松院を。東宮の御息所となされ

これの東宮の御伯母なり

東宮位よ即かせ給ひし後。中宮よ立たせ給ふべしとの御定なり。されど東宮御即位

の後。即。二條院あり近衛院の後藤原多子を。中宮よなされしかば。所謂二代后あり高松院をば中宮准宮

などせよの申し傳へけり。八條院も高松院も。美福門院の御腹よて。近衛の御妹よまします。鳥羽法皇あまりよ美福門院を寵せさせ給ひしかば。かくのかわらせ給ひき。是。即。保元平治の亂。よりて起りし所よして。本朝の王家おとろへさせ給ひし事の起りの。其一よて侍るなり。此二人の皇女。同じく准后と稱し申し。かど。一人の帝の御養母。一人の初めより東宮の御息所よす参らせしかば。尋常の内親王の准後の宣下を蒙り給ひしとい。少しく例かかれるやうよも侍る歟

女院准後の始

高松院

即位高松御息所と申し。御事なり。前よ注しぬ。後代よ及びて。正しく女御と申すのかわしまさむ。多くの女御代と申し参らるる御事なり。其御腹の御子。東宮よたよせ給うて後。三宮よ准せられて。母后とならせ給ひし時。院號を蒙り給ふなり。近き比ほひ。後水尾法皇の御母。後陽成院の女御代よておのしまし。が。准後の宣を蒙らせ給ひて後。中和門院と申し奉りき



法親王准三后の始

二品道深法親王

是後高倉院の第一の御子。八十五代後堀河院の御弟なり。また後高倉院と申せり。帝位よりつかせ給ひ。後堀河院御即位ありしかば。尊號を參らせられしなり。

武臣准后の始

太政大臣從一位平清盛入道淨海

此人。八十一代安徳天皇の御外祖なりければ。安徳御即位有りし治承四年二月。淨海夫婦共ニ准三宮を宣告せらる。是武臣准三宮の始めなるべし。されど道深院殿の御記より。鹿苑院毎事の様。攝家昇進の如くなる故。始めて此宣を蒙らしめ給ひし由を注せられたり。心得られ。但。淨海のこと。其例の始のよからぬ事なれば。斯くの給ひし。や。若くは又武家の代となりて。准三宮の始。鹿苑院殿より起れりとのこと。や。又按むる。大臣の妻。准三后の宣を蒙りし始も。淨海の宣を始とぞいふべき。夫より前のこと。未だ詳なら。此後。西園寺大相國實氏の室。從一位貞子を。北山准后と申し。此ひと。八十八代後深草。八十九代龜山院兩代の御母。大宮の女院の御母なれば。此

洞院殿の御記。成の字を房と訓むる事。名字抄よりありと見えたり。今彼書の成の字の

訓。房といふ訓見えざるを以て。古の名字抄よりあらざることを志るなり。

又少し疑ふべき所。文字の音近きころほひ。異朝より来れる字彙の音を誤用したりと見えて。古より本朝より用ひ来れる音よりあらざる所。六七字より及べり。是古書よりあらざる證の一つなり。又古人の名。いまだ用ひざる所の奇字。多く此書より收め入れたたり。これ古書よりあらざる證の二つなり。同字重り書けるもの十字をかり。是又うたがふべき事の三つなり。文字の音心得がたき所。殊より多し。是疑ふべき事の四つなり。文字の訓。いかゞと思ふ所少から。是疑ふべき事の五つなり。

たとへば朝といふ字。上よあれば。あさとよび。下よあれば。ともとよむといふが如きを。朝といふ字をあさとよみ。ともとよむ。口授あるよしをも申す如くなり。上下よりて讀みかるといふこと。よあら。義朝の子の朝長をあさながといふ承り及び。頼朝の烏帽子子結城七郎朝光をあさみつといふ承り及び。承り及び。

然りと申せども。世より既。此書あり。世の人此書より。名字をえらむ人多かるべし。然らば其字を讀み得ん。この書をくればあるべからず。只此書をありし儘。寫し置



かれて。其か冊子と相ならべて。藏め置かれんより。彼是二つながら相通じて。異聞を廣めさせ給ふ所の。益あるべきに似たり。其が冊子に此書の文字をまじれぬ。この書の訓を増し補はんこと。其敢て命を奉けがたき所ある。其不學。昔よりかつて上より先聖述而不作の教を奉じ。下より先師述而不可作の戒をうけて。よのつねの人より對し。假初の詞も。いまだ無證の言を發せむ。ましてや書に筆して。公に進呈せんもの。さづかも疑ひあらんことを以てせん事。其が愚誠尤畏るる所にして。且素懷はあらむ。これ敢て自からの異見を立て。上命を違拒するよりあらむ。

人名考終

准后准三后考

新井白石著

職原抄中務省の下

太皇太后宮 帝王祖母也

皇太后宮 帝王母也

皇后宮 帝王妻也

以上謂之三宮 和漢同

謹みて按ずる。三宮の事。職原抄に見えし所。右の如し。准三後の事。見えむ。三代實錄并に公卿補任等を按むる。五十六代の帝。清和天皇貞觀十三年四月十日。帝の御外祖。太政大臣從一位藤原良房即。忠仁公の事。詔して。賜封三千戸。或本に四月朔日。隨身兵仗を賜り。年官并に准三宮よしみえたり。

年給として。太上皇より初めて。年ごとく定まれる御給あること諸臣にいたる。忠仁公へ賜ふ所の御給。三宮に准せられし事の御事なるべし。後代に及びては。御給をといふ事



もなければ。只其名のみありて。其實をしとみえたり。年給一の斗官。年給二封戸などいひて年ごと賜一の賜二の所三の事長し。さればこ一の略を

是准三官の號のよりて起る所なり。夫より後一。攝家の人々二いふ三及四ば五。皇子内親王法親王官人諸臣并一法中の輩までも。此宣言をたまふこと絶えを。委しくしるさん一の事煩しければ。唯其始一やあるべきと思ふを。別一注して進呈す

儀同三司准大臣の事

職原抄一見えし處二。准大臣などいふこと一文武天皇大寶三年正月一。三品刑部親王を知太政官事となされ。又聖武の朝一。參議從三位大藏卿鈴鹿王を。知太政官事となさる。是其濫觴なり。帥内大臣藤原伊周一。房前九代の孫。關白道隆の男なり。歸京の後。寛弘三年一の年二朝參三のとき。大臣の下。大納言の上列なる。同十五年准大臣。賜戸一千戸ければ。自から儀同三司と稱するよし見えたり。さらば其事の起り一。文武。聖武の朝より始まりて。正しく准大臣と云ふ。又儀同三司と稱すること一。伊周を以て。其初とすべし。此後の代々一少からず

道達院殿の御説を按ずる一。儀同三司といふ一。もと是從一位の唐名なり。されば中古

を志るし一ものあり

洞院大相國の御記一見ゆ。○後光嚴帝一。九十九代一あたらせ給ふ。此比一。太平記の代一てありしなり

されば今の名字抄などいふものも。世一の傳二らる

節用集

これ一。舟橋宣賢卿の作られしよし。世一の申二をなり

拾芥抄

これ一。天正五年一撰まれし所。作者詳ならぬよし。水戸西山公一仰せ置かれしなり。などいふもの一。人の名字を集め置一し世一廣く行二る三ほど一。世の人皆これらの書を據となして取り用ふる事一成りたり。油小路故大納言隆真卿のたまひし一。近代の人の名。殊一淺ましきもの一成りたり。拾芥等の書一抄出せし所一。いかなる事を據となして。僻める字多く集め置一きけん。心得られず。周公の撰ませ給ひしといふ。爾雅の字を取り用ひたらん一。然るべき文字いくらもありなるとぞ

隆真卿の説一。某一神書を授けし人。まのあたり承りしよしを申しき。此卿一近代の有



職の人にておとしき

いこれある事とこそ覺ゆれ

右に近世の人の名の字よからむ。又人の名よ定まれる文字あるまじき證の二つなり。又師よて候ひし者の。某よ竊よ傳へ候ひし。天子の御名。凡人の名よとなふる所と同じかるべからざる由。ある有職の人の仰せおかれき。

何人の仰よると重ねて問ひ返し難かりし故。其人の名をばつひよ承らざりき。口惜き事なり。此言を思ふ。たとへば後水尾院の御諱政仁を。まさひとよ申さて。ことひとよ申し。今の仙洞の御名を。識仁と志るして。のりひとよ申さて。さとひとよ申を類なるべし。

さらば將軍家の御名など撰み申さん。心得あるべき事なり。我國よ傳ゆるのみよもあらむ。異朝の後の代までも。あるし傳ふべけれ。いかよも經書の文字を用ふべし。たよ經書の字を取り用ひんのみよもあらむ。唱へまゐらす所も。心得あるべきよしを申しき。

今按する。室町殿の代々の御諱。讀み得がたき事ありとぞ覺ゆる。寶篋院殿の御諱を

義詮と申しき。詮の字を教と唱ふる人あれど。普廣院を義教と申しまゐらせしかば。いかで其祖考の御諱。同じき唱の名をば付けさせ給ふべき。又詮の字を昭と唱ふる人あれど。靈陽院殿を義昭と申しまゐらせしかば。是も先祖の御諱よおなじきとなへの名。付けさせ給ふべからむ。拾芥。節用等を見る。詮の字の訓よ教と昭との外よ。別の訓も見えぬ。寶篋院殿の御諱。必らむ別なる訓のありしを。世の人其傳を失ひしなるべし。追ひて拾芥抄を考ふる。詮の字としと訓む。蓋し寶篋院殿の御諱。よしとしと申し。よや。猶たつめべし。

大塔宮の御諱を。護良と志るして。もりよしとせよ。云ひ傳へたれど。實にもりながと申しまゐらせき。是等また同時の事なれば。義詮のとなへ。必らむ。せよ云ひ傳ふるが如きよあらじ。

是等の事を思ふ。先師の傳へし所。誠よ誣へむとすべし。

右に名の字よ定まれる字なきよもあらむ。唱ふる所も定まれるとなへなき證の三つなり。

謹みて按ざる。凡そ人の名の字。もとより定まれる字あるべきいこれもなし。又古よ定まれる文字とてもなく。定まれるとなへもなかりし證。右よあぐるが如し。然らば其書



なくしても可なり。また古人の名の字を抄出し置きて。讀書の人へ便せんも亦可なり。然るに前年人の名の字。抄書して呈すべき仰を承り。敢て辭を所なく。拾芥抄。節用集。新編纂圖。并鍛冶銘字抄等の如き。世にひろく行ゆる所の書を取り用ひ。敢て自からの意を加へて。一字を増減せむ。一冊子を作りて進呈しき。其故は先師常々某を戒しめて。證なく據なく疑ひしき事なり。かりそめにも口より出だすべからむ。孔子の大聖をら。猶述而不作と宣ひき。只古人の言を述べ。自の意見をもて。言を作るべからむ。是先王の時より刑し給ふ所なりと申しき。されば某かの冊子を撰みしこと。只古人の抄録せし所を述べしのみなり。敢て私の意見を加へむ。然れどもかの古人の抄録せし所も。猶疑ふべき所尤多きが故に。私考を作りて。家へ藏む。今その草案を以て呈す。某が意を用ふる所。をては此のごとし。然るに今又仰を承りて。一つの別本を下し賜りて。此書を以て。某か進呈せし冊子に收め入れざる所の文字を増し補ふべき由を承りぬ。謹みてかの別本を以て。拾芥。節用等の書にたくらぶるに。彼書に收むる所の文字こと多く。文字の訓もまた拾芥。節用等に見えざる所多し。尤も珍書と云ひつべし。細かき是を考ふるに。彼書古に聞えし名字抄にもあらむ。

宣を賜はらせ給ひしなり。何れも皆御門の御外祖母なるが故なるべし

將軍家准三宮の始

鹿苑院太政大臣從一位源義滿

百一代後小松院明德三年六月。准三宮の宣旨あり。其時左大臣從一位にておはしき。其後百四代後土御門院寛正五年十一月。慈照院大相國義政公。准三宮の宣を蒙り給ふ。東山殿と申す御事なり。其時の左大臣從一位にておはしき。此二代の將軍の職にておはしき。此宣ありき。義政の御弟大智院贈大相國義親の。終に將軍の成り給ひざりしかど。准三宮たりしよし。諸家の系圖に見えたり。此人の。初。御兄義政天下を譲り給ふべしとして。父子の如くおはしけり。義政に男子出来給ひし後。不和の事起りて。終に應仁の亂の出来りき。多くの年を経て。義政の實子義尚將軍もうせ給ひしかば。義政。義親と中なほりし給ひ。義親の息男。義植を子とし給ひて。世を譲り給ひき。されば義親に准三宮の宣旨をなされしや。義親世にましまし。内。今出川權大納言入道殿と申しき。其男義植將軍となり給ひしかば。没後。贈官の事もありしなり。是將軍にも任せむ。大臣にも任せむして。將軍の御父なるが故に。准三宮の宣旨ありし例と



やいふべき。但義親准三宮たりしこと。公卿補任より見え侍らむ。さらば此人の此宣旨ありしこと。初浄土寺の門跡にておのせしときのこと。未だ詳ならむ。

### 法中准三宮の始

### 青蓮院准后道玄

是の八十八代後深草。八十九代龜山院兩代の關白。二條の普光圓院良實の息なり。良實の二條殿の始にてまします。道玄第三井寺長史大僧正道瑜も准后たりしよし。大系圖にみえたり。是攝家門跡。准后の始なるべし。又按むる。將軍の男准三宮の宣旨ありし始。鹿苑院殿の息。梵光院准后法尊六覺寺。准后義照二人を始とて申すべき。

### 清華准三宮の始

未詳

道遙院殿の御親。清華其例希なり。たしかに所存を得む。北畠親房卿南朝に於て。宣下なり。當朝より用ふべからむと注せられたり。其初きたかならむと云ふべし。

右數條某が不才なる。見もし。聞きも及びし所を以て。其事の始めと思ふ所を先注して。進呈す。

謹みて按する。日本紀に。神武天皇庚申の秋。事代主神の女。踏鞴五十鈴媛命を納れて。

正妃となさる。

此とき。未。帝位。即。かせ給ひぬ時あり。

其明年辛酉の春正月。帝位に即かせ給ひしかば。正妃を尊

みて皇后となされしよしみえたり。是本朝皇后を立てられし事の始めなり。其後代々帝即位の初め。皇后を立てられし事。皆是初め皇太子たりし時の正妃を尊みて皇后となされし事。猶神武の例の如し。其後五十代の帝。桓武天皇御父光仁の譲りをうけ。帝位に即させ給ひし初。始めて中宮職をおかす。是本朝中宮を立てられし事の初なり。其後延暦二年四月中宮を立てられし年。より。二年にあたる。又皇后を立てらる。北畠准后の職原抄に。中宮に即皇后なり。本朝二宮を并べ置く。甚其謂なし。是より此かた代々並べ置く。因りて四宮と號すとも見えたり。

太皇太后宮。皇太后宮。皇后宮。中宮。合せて四宮なり。さらば桓武より後。代々皇后宮。中宮二宮を並べ置かれしなり。

此事に。むつかしき事にて。其説長ければ。先大略をしるまなり。

五十六代清和天皇より上つかたり。幼主即位の例。本朝よりなき事にて有りしかば。天子御即位の日。皆東宮の時の正妃を尊みて。皇后となされしなり。



桓武より二宮を並べ置かれしこと。此例はあらむ

即位のち。多くの年を経て。立後の事あること。是皆幼主位を繼がせ給ひ。御元服の後  
一行のれし例と見えなれば。夫人。女御など申す中。或は皇子を設けられ。或は天龍を蒙  
られしなど。立後の宣言ありしと見えたり

又謹みて按ずる。後宮職員令

是は文武の朝。藤原不比等勅を奉けて。撰定せられし所なり

文武。四十二代はあたらせたもふなり

見えし所。妃二員四品以上。夫人三員。妃四員五位以上と見えて。其餘。内侍の司より下  
の。皆盡く宮人にてあるなり

妃夫人嬪などいふ。正後の外の御妻なり

其代。女御更衣などいふ稱は聞えむ。女御といふ名の見えし事。五十五代文徳天皇  
崩じ給ひし天安二年。清和天皇の位を繼がせ給ひし初。文徳天皇の女御。從三位藤原朝  
臣古子。從一位を加へ給ひし由。三代實錄にみえたり。さらば其比ほひ。女御などい  
ふ稱は。既にありしなり。源氏物語。女御。更衣又の御息所などいふ事見えたり。此物語

は。六十六代一條院の御代に出で来れりと見えなれば。其比ほひ。古の妃。夫人。嬪など  
いふ職名。盡く改まりて。女御。更衣などいふ稱となりしなり。それを後世の女御の事共  
に。八十五代順徳院の御製の禁秘抄にみえし所を以て。世に其據とせし事と見えたり。  
かく女官の如き。其稱のむかしよかれれることも。朝家の權。ことごとく攝關の人々  
奪られ給ひ。朝儀百廢して。日々出で来りし事をなれば。衰世のことよどあるべき。されど  
尚其初。女御。更衣などいふも。古の妃。夫人。嬪などの如く。宮中の女官にて。正後の  
如く尊びし事と見えむ。しかあれども。女御。大臣の女をなさる。納言の女の希有の  
例なり。更衣の多くの納言の女なる由見えなれば。女御。多くの當時權勢ある大臣の  
息女を參らせられし事なる故。いつとなく。かく正後の如く。なれるなるべし。凡。物  
の盛なる。必衰ふることありなり。されば攝關權勢あまり盛なりし後。時の勢一變し  
て。院中にて政務をとらせ給ひて。藤原の權勢や。おとろへ。其後また一變して。武家天下  
の事を知り給ひしより。攝家の權つひ衰へしより。女御を參らせられし事も。古の例の  
如く。一行の事もかなむ。是よりして女御代といふこと。出で来しや有るべき。  
すべて何代と申すこと。後代出で来りし稱にて侍る



## 親王代判官代などいふ事の類

然るも。又近き代は。女御よりをいふ。中宮は立ち給ふといふこともなく。多くの准後の  
宣旨を行はるゝ例はなりたり。思ふも。是は其初より女御はなましまさむ。女御代はか  
のしらすか故也。又中宮は准せられて。准後の宣旨ありて。後々は院號を參らせらるゝ  
事もどあるべき。凡かゝる代々は隨ひて。或は高く。或はひさくなりゆくも。我朝も異朝  
も。段々此の如し。只當時目も見。耳もふるゝ事を準據として。古を注せんも。不通の論と  
いふべし。されば古今は通ざるを以て博文とい申すなるべし

## 准后准三后考終



親王代判官代などいふ事の類

然るよ。又近き代よ。女御よりまぐよ。中宮よ立ち給ふといふこともなく。多くの准後の  
宣言を行はるゝ例よなりたり。思ふよ。是は其初より女御よなましまさむ。女御代よてお  
のしますが故よ。又中宮よ准ぜられて。准後の宣言ありて。後々よ院號を參らせらるゝ  
事よぞあるべき。凡かゝる代々よ隨ひて。或は高く。或はひきくなりゆくも。我朝も異朝  
も。段々此の如し。只當時目よ見。耳よふるゝ事を準據として。古を注せんも。不通の論と  
いふべし。されば古今よ通むるを以て博文とい申すなるべし

准后准三后考終

轉  
後  
説



○狩谷掖齋小傳

掖齋名の望之字を卿雲と呼べり江戸の人なり其の祖嘗て三河國刈谷に住めり江戸に移りて後氏を狩谷と改め居を神田に占めて家號を津輕屋と稱し其の友松崎懽堂いふ掖齋本姓の高橋氏年廿五にしていで、從祖弟狩谷保古の嗣となり男懷之を擧げぬこれより殆二十年其の成長を待ちて家事を悉く懷之に托し終に淺草に老いたり性書を嗜めり幼より老いたるまで孳々として一日の如く廣く和漢の諸書を涉獵して得る所少からざりき其の專攻する所の本邦の律令にありとも、本邦の律令たるもと隋唐を模したるものなれば深くこれを研究せんは勢其の本に入らざるべからむ掖齋夙にこれを悟り唐律六典太平御覽通典等の諸書を參考し頗其の蘊奧を極めたりのち更に嗜好を轉じ溯りて漢學を修め大に發明する所あり其の最精しき小學にして即本書<sup>轉注</sup>を著して大に世に廣めたりまたかの源順が和名類聚抄に上天地の現象より下禽獸草木にいたるまで一も漏らさ所なく悉く其の名稱を擧げ一々漢字を當てたれば後世物名に妥當なる漢字を尋ね古言を證せんは誠一の書なり然るに其の引用の書多し隋唐間を行これし古書にて今にこれ散逸せるも適この書に



りて傳これりもし此の書失せたらんよ如何でか當時世は行われし文字言語の正しさをみるべき然るに本書の完良なるにいたりて稀なり翁即古抄本若干種を比較して考證十卷をあらわしせりかの箋注和名類聚抄これなり此のほか日本靈異記考證、本邦度量權衡考、法王帝說證注、古京遺文、扶桑略記校偽皇國泉貨通考等の編著ありまたかゝる人の常として大に五車冑洞の書を羨み唐鈔、宋槧、元刻晉唐の碑刻法帖などの極めて得難きもの及古貨錢等を集めて樂めりと然れども翁はたゞは樂の爲にするよあらむおのが學問の助とせんと欲するなりとて屢これを人に語れりといふさもあるべし老いて漢器を好み歐陽公の六一の號擬し六漢老人と稱せり天保六年七月四日歿しぬ年六十一墓は下谷天龍寺ありといふ松崎懽堂の外翁の親友は朝田栴園、北靜廬、村田了阿、市野迷庵等あり迷庵は三右衛門光彦といひ翁もまた通稱を三右衛門といひて同じく神田は住めりしかば時の人今世の國學家は六右衛門なりなど戯れたりきといふ

轉注說

狩谷望之著

六書の說。指事。象形。會意。形聲。假借の五。古人の説く所、略異説無し。轉注の一つ。人々、同じからずして、聚り訟ふるが如し

説文序。考考是也とあれども、考は从人毛也。三體會意の字。考は从老省、考聲なれば、形聲字なること。各字の下は釋したれば、序は云ふ所と合はざるよよりて、説々の生ぜしなり

今攷ふるよ。其説皆據るべからむ。愚謂らく。轉注の義を説かんよ。先づ説文の序。後人の羸入あるを沙汰し刪り去りて、許慎の舊は復するよ非れば、其正義を得ると能はず。其羸入せし文。一曰。指事の下なる指事者、視而可識、察而可見。上下是也と云ふ十五字。また二曰。象形の下。三曰。形聲の下。四曰。會意の下。五曰。轉注の下。六曰。假借の下なる十五字。皆々後人の羸入なり。是を羸入と知る故に。後魏書江式が傳よ。其著せる論書表を載せて。歴代の書の沿革を論ぜしよ。庾嶷氏の八卦を畫し、神農氏の繩を結び、倉頡が初めて書



契を作りしより。漢の代に至るまでのこと。皆説文の序と全く同じくして。一も増減すること無く。次序も改むること無ければ。説文の序は依りしこと知るべし。然るに論書表の序。周禮。八歳入小學。保氏教國子。先以六書。一曰指事。二曰象形。三曰諧聲。四曰會意。五曰轉注。六曰假借云々とありて。所謂十五字の。皆有ること無し。是江式が見たりし説文の序より。いまだ後人の舛入無かりしを證すべし。又序の後の文。漢興有草書尉律とある草書の二字。又王莽が時の六體の書を云ひし。三曰篆書。即小篆の下なる。秦始皇帝。使下杜人程邈所作也と云ふ十三字も。論書表より無し。草書のこと。序中前後に云はざるを。こゝに突然と云ふべきは非ず。小篆の序の前文。李斯が作りたることを云ひたれば。此に至りて程邈所作也と云ふべきは非ず。然れば是等も江式が見たりし本より無くて正しかりしを。後人の舛入したるなり。

段玉裁の。秦始皇帝云々の十三字を。後の四曰佐書。即秦隸書と云ふ下よりありしが錯亂したるなりと云へり。然れども。一曰古文の下より。孔子壁中書也と云ひ。二曰奇字の下より。即古文而異者也と云ひ。三曰篆書の下より。即小篆と云ひ。四曰佐書の下より。即秦隸書と云ひ。五曰膠篆の下より。所以摹印也と云ひ。六曰鳥蟲書の下より。所以書幣信

也と云ひて。文勢も能調ひ。理も明に聞えたる。獨篆書の下。又ハ佐書の下。此十三字あるべきは非ず。篆書の下よりあるべからざるは上より云へり。佐書の下よりあらば。其説誤らざるに似たれども。若し程邈が隸書を作りしことを云はんとすれば。前の秦書八體の八曰隸書とある所より云ふべき。そこの云はむして爰に至りて。始めて云はんことも理無し。

是を何よりて舛入したらんと思ひし。上下是也。日月是也。江河是也。武信是也。考老是也。令長是也。と云ふこと。漢興有草書と云ふこと。下杜人程邈。爲衙獄。吏得罪始皇。幽繫雲陽十年。從獄中作大篆。少者增益。多者損減。方者使員。員者使方。秦之始皇善之。出爲御史。使定書と云ふこと。皆晉書衛恒が傳に載せし。四體書勢より出でたり。然らば此舛入の。後人四體書勢よりて書き加へしものなり。四體書勢下杜人の上より。或曰の二字を肩らむ。もし許慎が語より。下杜人程邈が所作と云ふことありんば。或曰と云ふべからむ。又指事者。視而可識。察而可見云々の語。顔師古も此の如く云ひて。漢書藝文志を注せり。漢書注より。察而見意とあり。識と意と韻を押したるより可見と云ひて。韻合されば説文の序は。決して誤りしものなり。



もし説文序。此文あらば顔師古必これを引くべき。出典を云はざれば。顔氏が見たりし説文。此等の文無かりしと思はるれば。是も後人の挿入なる事知るべし。

但此六書を説きたる語。何より出でたるか。顔師古も此説を用ひ。賈公彦周禮疏及廣韻の卷末にも略載せられたれば。唐宋の間。專行われし説と見えたり。

或説曰。廣韻卷末。只言左轉爲考。右轉爲老。無建類一首等語。蓋係先生之偶誤。宜刪去也。然らば。轉注を考老是也と云ひし。衛恒が謬説にて。視而可識。察而可見等の語も。許慎が言ふをあらむ。如此改正して。考老の説。建類一首。同意相受の語を刪らば。六書の義。始めて説くことを得べし。

それ六書とい。古書を讀み解かんよも。今文を書き綴らんよも。此六法は通ぜざれば。手を措くこと能はぬ。故に保氏をして。是を教へしむる也。其六の事を指し示したる上下の類。指事なり。物の形を象りたる日月の類。象形なり。此二つを文と云ふ。又其物の文。从ひて。名。一呼ぶ聲の文を添へたる江河の類。形聲なり。形聲の其聲と云ふものも聲をとりたるばかりにて。原に必義ありしものなるべし。今に至りて。其義の知りがたきもの多し。其推して知るべきも往々あり。たとへば其聲の字。多くの薄片の意。堯聲

慧琳經音義  
審序。及後  
名鈔並云。  
考聲切韻而  
慧琳所引。  
皆曰考聲

の字。多くの高明の意なるが如し。かく云へば。會意と混ぶるが如くなれども。會意の聲よあづからむ。形聲の必聲よよるを異とす。又形聲と云へる名義。江河の字なれば。水旁の形にて。江河の聲なり。形と聲と二つのものを合せて字となる。故に形聲と云ふ。或説。形聲と云ふ。象聲と云ふと同意にて。聲音を形容する義なりと云ふ。非なり。約之聲。假借之稍有義者。即轉注々々之。全無義者。即假借。又繁。以易象筮占者。用轉注假借甚多。否則周易二經十翼無用之物也。約之聲。亦字をも通じて文と云ふ。説文每部末。曰く。文幾重幾是なり。二文を合せて義をなしたる武信の類。會意なり。此二つを字と云ふ。

對文なれば。其別かくの如し。散文。文をも通じて字とも云ふ。説文。此四つの本義を釋したる書なるより。説文解字と云へり。文と字とを説解せしと云ふ名なり。

今説文と云ふ。省きて便に從ひしなり。

此文と字とを便に用ふる。其本義を用ふるものあり。義を轉じて用ふるものあり。聲を借り用ふるものあり。本義の説文。釋せし義是なり。義の轉をもつ。譬へば令の發號なり。



約之素說文  
一序所云建類  
受又云本無  
其字依聲托  
事四字不令  
也四字不令  
長四字不令  
考老二字當  
轉今長字當  
作馬也字當  
假借之字也

从△甲。會意の字なりとあるが本義にて。法令の字なるを。法令を出だして。民を法令の如くならしむるより。轉じて使令するを。總て令縣令と云ひ。法令の吏長の民を命ずる故に。轉じて其命をる吏を令と云ふ。是なり又長の久遠なり。从兀从匕。兀者高遠意也。久則變匕。亡聲。斤者例亡也。會意にして。又諸聲の字なりとあるが本義にて。遠長の字なるを轉じて。物の長短の字とし。又轉じて長聲効の字とし。又凡人を勝れたる人を。長者と云ひ。佛典に。財を富める人を長者と云ふも。其意全く同し又轉じて主領たる者を長と云ふ。此の如き類を轉注と云ふ

轉の。車輪の運するが本義にて。凡物の移るをも轉と云ふ。譬へば左にあるものを右に移し。上なる物を下よおろせむ。物の即其物ながら用を異にするを云ふ。注して灌なりと釋し。滴の字を水注也とも解して。水の甲よりしり流れ注くが本義なり。山の水を注して。谷水となし。谷水の注して川水となり。川水の注して海水となるが如く。物の其物ながら名を異にするを云ふ。轉注の。轉運灌注の義にて。文字の本義をめぐらし使ふを云ふなり。又灌注の義。轉じて書の解しがたきを釋するを注と云ふ。雖義を解して流注せしむる故の名なり。戴震の此義よりて。轉注を互訓とせり。段玉裁此説に従ひたれども。許宗彦が鑑止水齋集の轉注説は是を破りて。東漢以前。釋古人之書者曰解曰說曰傳曰故曰章句

曰解故曰說義無曰注者。自鄭氏始有箋注之名。以後及多作注。而欲以此當六書之轉注。恐非篤論と云へり。是論蓋實從ふべし。もし戴段の説の如く。轉互注釋の義とせる時。轉注の文字を注釋するの法として。用字の法と云ふ可らむ。又段玉裁の予所言之轉注を假借の中にも包有して。引申假借とせる名目を立てたり

五經文字曰。寤寐此二字並從休。轉注聲。是轉注亦考老是也

然れば衛恒が假借の例に出だしたる令長の二字の。俱に假借のあらで轉注なり轉注の例に出だし。考の。形聲字。老の會意字あること。上云へり。又聲を借り用ふるもの。其字無きよりて。其物の名と同音なる文字を。何の文字にもあれ。借り用ふるを云ふ。譬へば之の出也と訓し。草の地より出づるなり馬の鳥名。也の女陰なるを音の同じければ。皆借りて語解とせるの類を假借と云ふ

假借のものと其字なくて。同音の字を借り用ふるもの。もとよりなり。然れども本其字あるも同音の他用をかり用ふるものあり。許の許聽の義なるを借りて。鄭國の字に用ふるが如し。又原其字なくて。同音の字を借り用ひ。後其字出来たれども。猶本のまゝに借字をのみ用ふるものあり。辰の辰巳の字なるを借りて。辰會宿の義を用ひ。後辰會の字出来たれども。其字に用ひむして。辰の字をのみ用ふるが如し。又皇國にて。西土の文



字の音を借りて。皇國語を書くをかなと云ふ。全是と同じ。かの假なり。な名よて。即。字と云ふことなり。古かりなと云ひけんを。音便よかんと云ひ。後よ省きてかなと云ふなれば。かなと。即。假借文字と云ふことなり。

此轉注假借の二つの。文字を使用する法なり。文と字との本義のみよて。用を成すこと能はざるより。轉注して本義を沿用し。文字無きを。同音の文字を。假借して。これよ充て用を成すを得。故よ文字ありといへども。此二法無ければ。語言を成すこと能はざ。此二法を以て。文字を使用すれば。事として辨をべからざるに無し。故よ文二つ。字二つ。此二つを併せて六書といふなり。「この六法備はらざれば。文字を使用し。意を達すること能はざれば。此理の誰も誰も知るべき事なれども。かく云ひて。轉注者。建類一首。同意相受。考老是也と云ふ義よ非くを以て。こよ思ひ寄らざりしなり。「故よ六書の義を定めんよ。必先説文の序よ。羸入せし謬説を刪りて。許氏の舊よ復するよ非れば。其正義を得ること能はざると云へるなり。

明以上の諸家六書を説きし轉注の説。皆非なること。今論むるよ及ばず。趙宦光が六書長箋。戴震が東京文集。曹仁虎が轉注古義考等よ詳よ論じたり。

清よ至りて。學問精密を極めたれども。此轉注よ至りて。いまだ善説を得ず。

戴震の。考老也。考老也と訓むるよよりて。互訓の説を立て。曹仁虎。許宗彦の。建類一首。同意相受の語よよりて説をなせり。皆後人羸人の文よよりて興したる説なれば。云ふよ足らむ。「上よ云ひし如く。指事。象形。形聲。會意の四つ。造字の本轉注假借の二つの。使用の法なれば。一をも闕くべからざれば。六書と定めしなり。この人々の考へし轉注の。造字の本よもあらむ。使用の法よもあらむ。其説よ従はして。五書とせんも。文字を使用するよ足らざること無ければ。必然らざること明らかし。戴東原文集卷三。六書論序云。謂轉聲爲轉注者。起於最後。於古無稽。特蕭楚諸人之臆見也。

案。轉聲是真之轉注。戴氏説非。

明楊慎轉注。古音略古音叢語等序。所言据周禮注。以爲展轉注灌之義。以説文序之考老是也爲謬。殆近望之説。唯以説文序文。爲後人羸入者。古未未有之也。

我享保年中。界浦嚴龍著。韻鑑古義標註補遺。曰轉注者。謂一字轉其聲而讀者是也。謂展轉其聲而注釋。爲他字之用者也。如惡字本善惡之惡以其有惡也。則可惡。故轉爲憎惡之惡。



内外之内爲收内之内之類也。易疏云。實有七音。義各不同。觸類而長之。衰有四音齊。有五音從。有七音差。有八音歌。有七音。皆轉注之極也。說文曰。轉注考老是也。佩鱗集斥云。考老字左回右轉者。是孟浪也。謂考老字下从匕。考字下从方。各成文。非反考爲老。是則許氏不得周禮之一字。數義展轉。注釋而後可通語。意遂以反此。作彼爲轉注。自許慎以來。同意相受。考老爲轉注。鄭玄以之而解經。夾際以之而成略。遂失其本旨矣。嗚呼。慎旃哉。

焦氏筆乘曰。轉注轉音而注義云々。又曰。熊朋來曰。古初制字多象形。故象形爲六書之首。形不可象而指事。事不可指而會意。意不可會而諧聲。聲無可諧。五不足而假借。又曰。原轉注之義。最爲雜明。周禮注。曰。一字數義展轉。注釋而後可通。後人不得其說。遂以反此作彼爲轉注。許慎云。轉注考老是也。毛晃云。考老字下從匕。音化。考字下從方。音巧。各自成文。非反考爲老也。王柏正始之音。亦以考老之訓爲非。蕭楚謂一字轉其聲而讀。是謂轉注。程端禮謂假借。借聲轉注。轉聲皆合。周禮轉展。轉注釋之。說可正考老之謬矣。又易疏云。實有七音。義各不同。觸類而長之。衰有四音。齊有五音。從有七音。差有八音。歌有七音。辟有十一音。皆轉注之極也。又曰。自許慎以來。同意相受。考老爲轉注。鄭玄以之而解經。夾際以之而成略。遂失其本旨。

貝原益軒說。小學卷首六藝六書曰。性理紀聞。焦氏筆乘論。轉注假借而辨古人之誤。可謂精詳也。可以爲據。

たゞ江永が本義外展轉引伸爲他義。或變音。或不變音。皆爲轉注。其無義而但借其音。或相似之音。則爲假借と云ひたる。戴震答。江永論小學書の中より引り暗に愚説に合へり。然れども。說文序。籒入の事を云ひぬ。いまだ江永が書の全文を見ざれば。極め言ひがたけれども。若し籒入を剛る説あらば。戴氏が答書。これが可否を辨せざる可からざる。其事無きを見れば。江氏の説此に及びざりしならん。說文の序の建類。一首同意。相受考老是也とあるを。許慎が言とすれば。江氏が説之に合はざる。戴氏が其説に従はざりし。この故なるべし。然らば江氏が説も。偶中して。覆説のあらむ。

許宗彦の指事。象形。形聲。會意。皆指造字之始。言之則假借轉注。亦出於造字之始可知也。或分事形聲。意爲體。假借轉注爲用者。非也と云ひたれども。六書と云ふ名。文字も備り。それを使用して。文章をなす事を教ふるに至りて。設けしものなり。倉頡が時出来し。のあらむ。周禮に保氏が國子に教ふる目に出でたり。

書勢。黃帝始作書契。字有六義。玉篇表。庖犧始成八卦。倉頡の時此目ありし如くを



れども。後よりしてくらしと云へるものよしして。其實の周禮に始めて見えたるなり。周の代。文字行ゆる時に至りて。學ばんより。先文字の本義を知るべく。文字の本義を知らんより。其字の指事なるや。象形なるや。形聲なるや。會意なるやを辨へ。さて夫を使用する法を<sup>ハナハ</sup>出<sup>ハナハ</sup>な<sup>ハナハ</sup>い<sup>ハナハ</sup>ざ<sup>ハナハ</sup>れば。文章をなす事能はざるより。轉注。假借の二をも學びしなり。其實の指事。象形。形聲。會意等を<sup>ハナハ</sup>ま<sup>ハナハ</sup>か<sup>ハナハ</sup>つ<sup>ハナハ</sup>事<sup>ハナハ</sup>の<sup>ハナハ</sup>ま<sup>ハナハ</sup>ら<sup>ハナハ</sup>ぬ<sup>ハナハ</sup>とも。文字の本義を知り。それを轉じて使ひ。又無き字の假借まる事を<sup>ハナハ</sup>ま<sup>ハナハ</sup>ら<sup>ハナハ</sup>ば。用<sup>ハナハ</sup>に<sup>ハナハ</sup>於<sup>ハナハ</sup>て<sup>ハナハ</sup>足<sup>ハナハ</sup>ら<sup>ハナハ</sup>ざる<sup>ハナハ</sup>こと<sup>ハナハ</sup>な<sup>ハナハ</sup>か<sup>ハナハ</sup>らん。保氏これを教へむして。たゞ造字の本をのみ教へんより。いかでそれを使用し得べき。

往年與友人市野迷庵論六書。迷庵以互訓為轉注。轉注說 暗合愚以展轉引伸為轉注。以序建類一首同意相受考老是也等語。為後人所加。非許慎之舊。其事去今廿餘年。後獲北魏書晉書二證。知前說之不誤。迷庵化為他物。愚亦鬚髮變白。回顧之。總與一場夢無異。頃有舉轉注一事問者。於是書昔日所考。與其後所見。以答若是。天保乙未年二月三日。狩谷望之草

轉 注 說 終



れども。後よりしてくらしと云へるものよしして。其實の周禮に始めて見えたるなり。周の代。文字行ゆる時に至りて。學ばんより。先文字の本義を知るべく。文字の本義を知らんより。其字の指事なるや。象形なるや。形聲なるや。會意なるやを辨へ。さて夫を使用する法を<sup>ハナシ</sup>出なれば。文章をなす事能はざるより。轉注。假借の二をも學びしなり。其實の指事。象形。形聲。會意等を<sup>レ</sup>まかつ事<sup>ハ</sup>あらぬとも。文字の本義を知り。それを轉じて使ひ。又無き字の假借を<sup>レ</sup>する事を<sup>レ</sup>あらば。用<sup>ハ</sup>於て足らざることなからん。保氏これを教へてして。たゞ造字の本をのみ教へんより。いかでそれを使用し得べき。

往年與友人市野迷庵論六書。迷庵以互訓為轉注。<sup>漢書說文</sup>恐以展轉引伸為轉注。以序建類一首同意相受考者是也等語。為後人所加。非許慎之舊。其事去今世餘年。後獲北魏書晉書二證。知前說之不誤。迷庵化為他物。愚亦鬚髮變白。回顧之。總與一場夢無異。頃有舉轉注一事問者。於是書昔日所考。與其後所見。以答若是。天保乙未年二月三日。狩谷望之草。

轉注說終

ねほろむとては



○富士谷成章小傳

富士谷成章字仲達通稱を專右衛門とよべり橋家の用達人なりきといふ元文三年京師に生れぬ實に皆川淇園の弟として富士谷の家を繼ぎしなりはじめ養父の號を用ひて層城といひ其の居正親町北の邊大納言の舊趾なりければまた北邊と號せり世に傳ふ成章年甫めて三歳よく物書く事を習練し七歳のをりよに既詩をさへ賦したりとされば人々の神童と稱したりといふも理なり延享元年韓使來朝し成章一面して筆談を試みしに終始倦む色なく應答頗神速なりしかは件の韓人も舌を捲きて嘆賞せりとぞ其の漢文も長けたりしまた見るべし成章このとき年わづか九歳稍長むるに及びて學識益進み大に儒教の真理を發覺せしが既にして思ふや今の人かほかの内を忘れて外に走り近きを捨て遠きを求む是豈道の本相ならんやと斷然心を齟して切に本邦の典故を修めぬ國史律令の更なり家乘遺集のいたるまで偏く搜り求めて究めぬといふ事をかりき殊に言語の道に精しく其の法を立て後人の軌範とせりこの道今の大に開けて更難しとも思ふがれどそのいまだ普からざりしときよの古言を解き古歌を譯するに不便なりしといふまでもなし本居翁かつて「詞の玉の緒」を著せ



る時成章が「あゆひ」「かざし」の二抄を見てあれより先よかゝる事いふものありけるよとして痛く賞嘆したりとぞ和歌の廣橋家の門人なれども往々古風を慕へるも見ゆ常は京家の風を立て、書を著せよも明らかなるこれを壞らむほどよく回護してまた己が意も見ゆるやう注意せるなど心なきもの、業かゝ兄淇園の有名の儒家なり詩文を能くせりある時其の友清君錦等と同じく成章が家集ひて百題をいだし午時より子時迄を限りて各五律を賦したる事ありしは淇園先成り君錦これよつぎ成章なほ後れたり人々其の平生よも似を躊躇せるを怪みしがやゝありて其のいだまを見れば各和歌一首を副へたりこゝに皆その凡ならざるは驚かざるにかりきといふ天資聰明よろづの學藝に達し天文曆數の事より諸技彈吹の事よいたるまで拙からざりき軀幹矮小たましく會するもの初の輕侮の念をおこすすといへども忽其の敏なるに服せりとぞ後年人の勸よより柳川侯に侍し頗優待を受けしが安永八年十月二日病みて歿せり年四十二其の基京都蓮臺寺ありかざし抄、あゆひ抄の外其の著書甚多しといへども世に公よなりたるは六運圖略、七體七百首國字淵源考、北邊家集、やまのともしび等なりとせ

おほうみのほし

富士谷成章著

中務の三子有極川一品職仁親王きたのかた 辰子二條關へ。たかうなをまゐらせたまへける  
白音忠公女

よ

たまづさのこやく火よたけ残りては。我憂中を人よ去られん

なかのみかどの御時。姉小路中納言 公景孫係  
八年 亞相よ。任の小折ゆみをいたさらで。久しうな

されざりけるころ。内の御當座よ。河といふ題をとりてよみ給ひける

もがみがいつかのぼらんいな舟の。いなと計よすぎゆくはうし

これを厭覽ありて。いみじうあわれがらせ給ひて。御かへしとて給ひせたりける

最上がのやがてのぼらん稻ふねの。いなとむかりよまぎのゆかじを

かくて又の日。大納言よなさせ給ひけり

内よ御祝の事ありて。醍醐左大臣。冬無公久我右大臣。通見公御とのゐどころよて盃酌ありけるよ。久我殿いたくまひ申されければ。醍醐殿御かゝらけよ。たふくとうけ給ひて。おほ



やけの御祝の事は候へば。ままひ申まべきはあらむ。されど冬際にてや過分よたびて候程よ。まべなく侍る。この直衣のいまだたびを候よのませ候へと。御なほしのかたよりさと流しかけさせ給ひければ。久我どのいたくかしこまりてぞおのしける

この右大臣。行作いみじくおのしまして。御くつの音なども。人よまぐれたるも。延享のみかどの三條西大納言此くつの音を本とせよと。常一人々仰せられけり。あるひと。公福卿の延享三年歌よみて。天地をうごかさんこと。いかよとひけるよ。夫のその人の徳なり。かま倉のおととの。まくれの民のなげきなりとよませ給ひ。能因が。なしろ水よせまくだせとよみたるも。たゞ人からぞかしとのたまひけり

内實隆公元當座の御會ありける時。武者小路の儀同三司文三年いたるることありて。参り給ひざりければ。竹亭月といふ題たゞいままよみて奉るべきよし。里亭へおほせごとありければ

くもならでかぜをやまたんくれ竹の。なびけば走るまどの月かげ

御つかひよいとよくよみて。奉らせたまひけり。この歌を人々めであへりけるを聞かせ給ひて。後日冷泉爲久の大納言よあひて。誠よや。なびければしるを。ひとの興じ候なる。

そこのさかせ給ひん事こそとづかし候へと。の給ひけり「明日香井の中納言雅量八はたよまうでられける時。のられたる馬のものよおどろきて。そねさるをどりめぐりけるを。とかく乗りまづめられけり。おもちいさか。そらざりけり。さて後よ心しづかなれば。落馬をるとなしたのたまひけり。またいとわかりける時の事あり

此卿ある時。紅夷のほりきたるを見むとて。いたくやつして。侍よまざれておとしけるを。紅夷の見ておどろきさるごて。いみじき貴人なり。かくておのまべき人よあらすとして拜しけり

道遥院のおと三條西内大臣三十六の記。火のことよあひて。なかばやけうせけるを。人々をまみきこえければ。何かをしきとて。一文字もたがへを。そらよかよせ給ひけり。さるゆゑよや。一井君となづけられける

おなじおとの時。唐さきの松枯れなんとしければ。高名のもの。今しもからすらむことよをしませたまひて

花の咲くためしもあるを此まつ。ふたよび青き緑ともがな

この御歌を。かの松よかけられければ。ほどなく青くなりたり。末の世よかよる事なん